

332. 9-Ko537



1200500737850

3329
53



始



255

332.9
K053



京都帝國大學教授
經濟學博士

黑正嚴著

經濟地理學原論

日本評論社版



序

本書の稿を起したのは丁度昨年の此の頃であつた。七八月の間叡山の茅屋に於て自炊し乍ら原稿の約半分を仕上げた。下山してから進稿の度は頓に鈍り、且つその後の思索、資料の涉獵により、最初の考想到多少の變化を來したため、印刷に附するのが甚しくおくれた。殊に豫定よりも頁数が遙かに増加したので、地域編制論の一節として掲載すべかりし國土計畫論は之を割愛し、他日單行本として公刊する事とした。

本書の目的は學生の參考書たらしめんとするにあるが故に、個々の經濟地理的事實を記述することを避け、専ら方法論に力を集注した。事實を充分に知らなければならぬ事は云ふ迄もないが、如何に事實を知悉しても、之を統一的に把握し、理解し、推理するの力がなければ、單に事實を知るといふ丈けでは、物識りたるに止る。學問の發展には何よりも確乎たる方法によつて事物の本質を把握し認識する事を必要とする。今日の如く進歩せる我が學界に於て最も貧困を感じるものは實にこの方法論である。殊に經濟地理學に於ては

二
研究方法が未だ充分に發達せず、從て經濟地理學はその研究領域、對象すらも不明確なる有様にして、所謂地上の事實雜炊學たるの嘲笑を受け、又學問的に最も興味少きものとして嫌惡された。本書がかゝる大きな目的を達してゐるとは決して自負するものではないが、之が契機となつて多くの立派な研究が生れ出る事ともなれば幸である。

本書を貫く根本思想は、經濟地理學の指導原理、アプリオリは經濟地域の概念でなければならぬといふ事である。經濟地域の概念は、從來一般の經濟地理學者は殆ど之を問題としなかつた所である。私が最初に教を請ふたのは元京都帝國大學教授法學博士戸田海市先生であつた。先生は夙に之を以て經濟地理學の根本原理とすべき事、又之あるが故にこそ經濟地理學が他の經濟科學と區別さるゝ所以を屢々力説され教示されたのである。戸田先生は二十年前既に時間と空間の絶對矛盾的自己同一の思想を展開され、私が經濟史研究を專攻すべき旨を申出でたる際、「本庄榮治郎博士は現代より倒敘的に歴史研究に入られたが、君は先づ地理的空間的研究より入門せよ」との事であつた。之れ經濟史家たる私が今日尙ほ經濟地理學研究に力を注いでゐる所以である。本書が果して恩師戸田先生の思想の眞意を完全に傳へ、且つ之を充分に展開せしめ得たとは固より考へられないが、私として

は最善の努力をなした積りである。只ひそかに虞るゝ所は、この種の方法論につきましては先學の論著極めて少く、從て私一個の獨斷的議論に了つた點の少からぬ事である。願はくば同學諸士の叱正あらん事を。

本書を成すに方り、第五編經濟地域編論中、チューネンの農業地域論、ウエーバーの工業地域論は昭和高等商業學校教授菊田太郎氏の著書に俟つ所甚だ多く、又ウエーバー理論の數學的解明は京都帝國大學經濟學部助教青山秀夫氏の研究によつた。更に圖表の作製、文獻の蒐集につきましては京都帝國大學助手農學士三橋時雄氏、理學士喜多村俊夫氏、福島よしゑ氏が多大の援助を與へられた。茲に諸氏の御厚誼を深謝する。

昭和十六年六月十三日

京都山科 天智天皇御陵の上り

黒 正

巖

目次

序

第一編 經濟地理學の概念	一
第一章 經濟地理學の成立過程	三
第一節 地理學的認識の變遷	三
第二節 人文地理學の發達	一五
第三節 經濟地理學の成立	二五
第二章 經濟地理學の本質	二九
第一節 經濟地理學の定義	三〇
第二節 經濟地理學の任務	三二
第三章 經濟地理學の分類と領域	三六

目次

一

第一節 經濟地理學の分類…………… 四

第二節 經濟地理學の領域…………… 七

第二編 經濟地理學研究方法論

第一章 經濟地理學の研究に於ける指導原理

第一節 自然本位論…………… 八

第二節 人間本位論…………… 八

第三節 景觀論…………… 九

第四節 地域論…………… 九

第五節 立地論…………… 九

第二章 經濟地理學の研究に於ける作業的方法

第一節 推理的方法論…………… 一〇

第二節 解釋的方法論…………… 一一

第三節 表現的方法論…………… 一六

第三章 經濟地理學の研究資料…………… 二〇

第一節 素材的研究資料…………… 二二

第二節 參考的研究資料…………… 二三

第三編 經濟地域劃定論…………… 二五

第一章 經濟地域劃定の意義…………… 二七

第二章 自然的地域劃定論…………… 三五

第一節 自然的地域劃定の意義…………… 三五

第二節 氣候による地域劃定法…………… 一六

第三節 植物の分布状態による地域劃定法…………… 一四〇

第三章 文化的地域劃定論…………… 一五〇

第一節 文化的地域劃定の意義…………… 一五〇

第二節 文化の特徵による地域劃定法…………… 一五三

第三節	文化の擔當者による地域劃定法	一五四
第四節	國家領域による地域劃定法	一五九
第五節	政治形態による地域劃定法	一六一
第六節	宗教による地域劃定法	一六二
第四章	經濟的地域劃定論	一六五
第一節	經濟的地域劃定の意義	一六五
第二節	經濟發達階段による地域劃定法	一六八
第三節	經濟形態による地域劃定法	一七一
第四節	食糧獲得及び消費による地域劃定法	一七四
第五節	經濟的指導精神又は經濟組織による地域劃定法	一七五
第六節	人口及び聚落による地域劃定法	一七六
第四編	經濟地域構造論	一八五
第一章	經濟地域構造の概念	一八七

第一節	經濟地域の構造要素と條件	一八七
第二節	經濟地域の構造條件の分類	一九一
第二章	經濟地域の構造要素	一九九
第一節	經濟地域の構造要素の意義	一九九
第二節	經濟的指導原理	二〇一
第三節	經濟組織	二〇三
第四節	勞働組織	二〇五
第五節	人口及び聚落	二〇八
第六節	富及び生産手段の種類、集積状態	二二三
第七節	財貨が生産より消費に至る迄の諸過程	二二四
第八節	交通、通信制度	二二七
第三章	經濟地域の文化的構造條件	二三〇
第一節	文化的構造條件の意義	二三〇

第二章 政治組織……………三三

第三節 社會階級制度……………三六

第四節 社會的結合關係……………三〇

第五節 民族的文化能力……………三五

第四章 經濟地域の自然的構造條件……………二四七

第一節 自然的構造條件の意義……………二四七

第二節 氣候……………二五二

第三節 土地……………二五六

第四節 水利……………二五八

第五節 災害……………二六一

第五編 經濟地域編制論……………二八九

第一章 經濟地域編制の意義……………二九一

第二章 經濟地域編制の原理……………三〇二

第一節 經濟地域編制の原理の意義……………三〇二

第二節 資本主義以前の地域編制の原理……………三〇四

第三節 資本主義時代の地域編制の原理……………三〇八

第四節 統制經濟時代に於ける地域編制の原理……………三二四

第三章 經濟地域編制の變化……………三三〇

第一節 經濟地域編制の變化の意義……………三三〇

第二節 國內關係による經濟地域編制の變化……………三三四

第三節 國際關係による經濟地域編制の變化……………三四〇

第四章 農業地域編制論……………三四五

第一節 農業地域編制の意義……………三四五

第二節 チューネンの孤立國に於ける農業地域編制論……………三五六

第五章 工業地域編制論……………三七三

目次

八

第一節 工業地域編制の意義……………三七

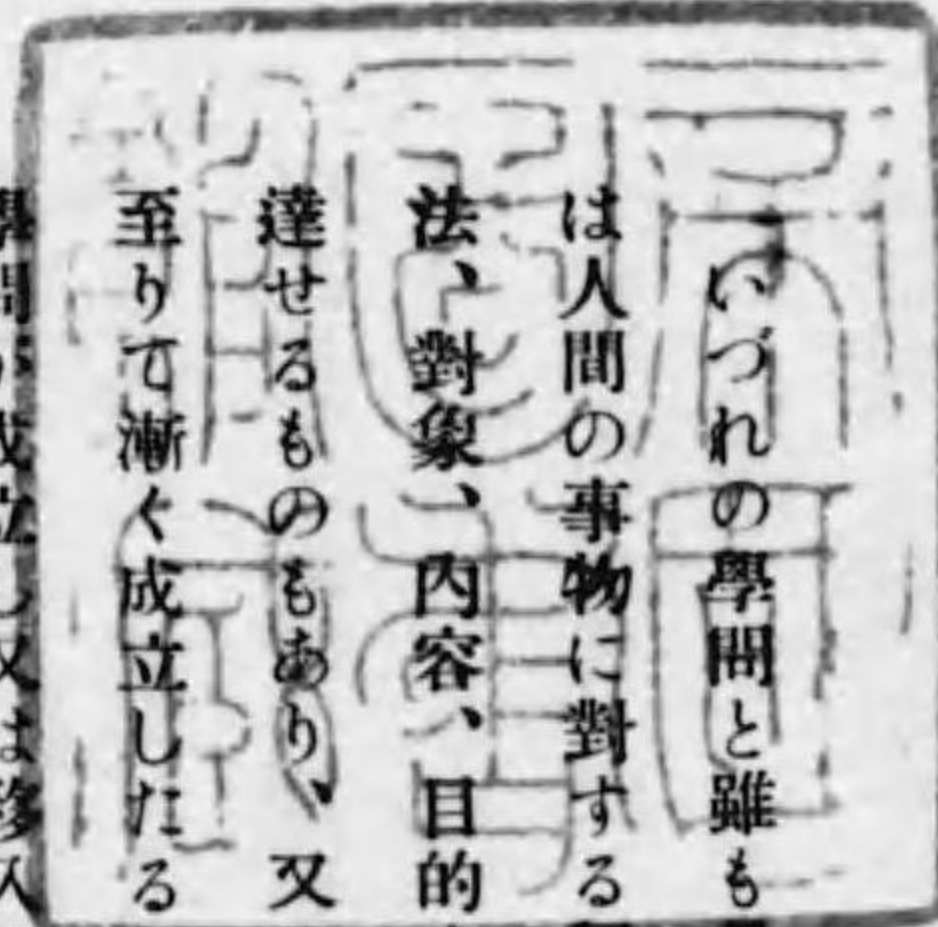
第二節 アルフレッド・ウェーバーの工業地域編制論……………三六

附録 經濟地理學文獻要覽……………四二

第一編 經濟地理學の概念

第一章 經濟地理學の成立過程

第一節 地理學的認識の變遷



いづれの學問と雖も最初より今日あるがままの發達段階に於て成立したるものではない。それは人間の事物に對する認識力、及び社會狀態の推移、發展に對應して變化し、從てその研究方法、對象、内容、目的も時代により地方によつて著しく異つてゐる。故に頗る古き時代より發達せるものもあり、又その成立期は古い、發達の遅々たるものもあり、或は又極めて最近に至りて漸く成立したるに拘はらず、急速なる發達を遂げたものもある。更には早くより多くの學問が成立し又は移入され乍ら少しも發達せざる地方もあり、或は常に新しき學問を移入して急速に發展せしめた地方もある。而して現代ほど歴史上に於て科學の進歩したる時代は絶無といふべく、正に科學時代と稱する事が出来るのである。思ふに現代に於ては、人間の精神力、認識力が著しく發達し、而かも社會狀態が急激に變轉し、從來の如き舊き傳統的思想、觀念を

以てしては、人類文化を發展維持する事は不可能となつた。一部の學者思想家の間には社會組織の再編成又は變革を行ふならば、社會の行詰、崩壞の運命を阻止する事が出来るかの如く考へられたのである。併し乍ら單なる社會組織の革新、再編成のみを以てしては社會の發展を根本的に促進しうるものではなく、科學力を發揮して地表に於て存する萬有の物理的、化學的、社會的潜在力を最大限に利用發現して社會の生産力を發展せしむるの外はないのである。而して茲に謂ふ科學は單に自然科學及び之に基礎を置く技術のみではなく、文化科學の如く社會全體の文化的構造の研究をなすものをも包含せしむべきである事は言ふ迄もない。蓋し自然科學は社會又は文化一般と無關係に發達し、存立しうるものではなく、それは一國、一時代の文化一般の反映であり、否、その函數にすぎぬからである。之は科學が一定の認識方法による事物の觀察、理解、説明の論理であり、推理であるが故の必然の結論である。

人間の認識力の發動は人間が一定の意欲又は目的を自覺して一定の行動を起す時に之を見る。人間が何等の意欲を有せず、目的を自覺せず、從て行動を起さない場合には認識力は發動しない。認識力の發動せざる時は論理的考察も推理も生れ來る餘地はない。而して人間が最初に一定の意欲を有ち、目的を自覺せざるを得なかつたものは、自己の生存確保に關する行動である。

生存確保の行動は、第一に外在の物資を獲得するの諸關係、第二は外在の人間との結合關係、第三には右の兩者に對する經過の關係に對して志向するのを常とする。換言すれば人間の行動は空間と人間と時間とに對する認識を離れては存在し得ないのである。故に苟しくも人間が人間として存在し行動する限りは、生來的に空間と時間との認識を體得してゐるのであつて、空間と時間との認識なき所に人間もなく、行動もなく、從て文化もあり得ないのである。空間と時間の本質に關する議論は今日尙ほ哲學上の重要問題とされ、空間なき時間もなく、又時間なき空間なしとも考へられ、時空の同自性、絶對矛盾的自己同一性等が主張されてゐるが、併し古來より今日に至る迄の人間の認識、推理の仕方を見るに、時間を前提として空間を、空間を前提として時間を概念するのが常である。而して人間の精神力、認識力の一定發展段階に於て、人間は自己にまつはる事物、行動、その成果たる文化を論理的に考へ、或は因果的に推理するのである。故に空間的概念によつて事物を認識したるものとして地理學が生れ、時間的概念によつた場合に歴史學が発生したのである。而かも時間、空間の認識は、時間も空間も、その發展的過程に於て、及び分布的展開に於て異質であり、決して同一であり得ないといふ事が前提となつてゐる。同質であり、變化なしとすれば、時空に對して認識力を働かせる必要を生じな

い。地理學と歴史學とが人間の歴史と共に成立したのは右の如き必然の結果であり、學問として最も古く發達した所以である。

地理學が、歴史學と共に最も古き學問であるといふ事は、それが方法的に、又系統論的に進歩し、學問的意義、地位、任務が明確である事を示すものではなく、却てその進歩がおくれ、科學論的にも極めて不明確なる状態に停滯するの因となつて居る。蓋し極めて長い時間の間に種々の研究方法、研究對象が取り入れられ、それが根強く蔓延して除去する事の困難なる上に、地理學の對象として、悠久無限の自然と變化限りなき人間及び人間の結合、更に人間と自然との關係等が取り扱はれたるが故に、結局、地表の萬有を研究對象とするに至り、全く雜炊的學問となり、方法的にも科學的體系をなすや否やを疑はるることさへある。この雜炊性を免れんがために、自然の神學的説明によらんとし、或は地人一體論、地人相關論、環境論を以て地理學の一元性、科學性、純粹性を擁護せんとする有様である。

右の如く従來の一般地理學は地表の凡ての現象を研究對象とするが故に、その固有の方法を確立する事は頗る困難である。若し強いて一元的方法論による時は、一種の哲學觀、世界觀に墮し、形而下の經驗科學たるの地位より自らを逸脱するの虞がある。一元論的地理學者が、地

的統一又は地的渾一によつて有機、無機、人間を包攝する地理學を體系化せんとする努力に對しては滿腔の敬意を表するものであるが、方法的に見て一元的に把握するの必要もなく、又事實甚だ困難なるか、或は不可能であらう。之と同時に一般地理學が一元的に把握され認識されないでも、敢へて地理學の面目に關するものでもなく、研究上に失ふ所もあるまい。人間の文化發達の程度が低く、自然の影響が極めて多く、更に人間の認識する世界の範圍の狭小にしてその變化と異質性の少かつた時に於ては一元的地理學論は可能であつたが、今日の如く文化の發達、科學の進歩に伴ひ、自然が單に靜的條件、又は潜在的な能力としてのみ存在の意義を有するに止り、世界の擴大に従ひ各地域の急變性、異質性が甚しくなりたるばかりでなく、今日あるがままの地域的個性或は景觀は決して原始的自然の状態ではなく、長年月に互る自然的文化的變化によるものであつて、その相關的因果の關係の如きは正確に闡明しうる筈はなく、強ひて變化の過程を深く追求するとせば地理學の領域を離脱して歴史學又は歴史觀となるの危険がある。かくては地理學の本質を明かにせんとして却て地理學の意義を見失ふといふ逆結果を齎すであらう。

惟ふに一般地理學が地表の一切の諸現象を包攝し之を統一的法則によつて地的統一をなし、

地理學の一元化を計らんとするは、近世に於ける人文地理學の發達、而かもこの分枝が益々生長し、繁茂して地理學固有の課題は之に吸収され、親木は漸次に萎縮するが如き有様となつた事が、地理學一元論の擡頭した主要なる原因ではあるまいか。自然地理學の中に地理學一元論の多き事もこの間の事情を物語るものであらう。最近歴史學に於て經濟史、法制史、宗教史、教育史その他凡ゆる部分史の著しき發展の結果、一般歴史學なるものがその存立を脅さるるに及びて文化史又は精神史なるものが一部の學者によつて主張せらるるに至つたが、之は多くの場合、歴史哲學となり、或は歴史の精神的、心理的説明に墮したるもの多きものと思ひ比べて、地理學一元論に對し一の示唆を與ふるものである。

科學的認識が分化し細分され、從て科學が新しく分化するのは科學史の示す所であり、事物必然の結果である。之がため舊來の一科學部門が消滅し、或は變質するが如き事もありうるであらう。殊に地理學の如く對象論的に見て全く別個の概念に屬するものをも包攝したる學問に於ては、科學方法論の進歩と共に極端なる分化の行はれるのは當然の事である。人間は外的物體なくして、又空間なくしては存在し得ない。故に人間即ち自然、空間と考へ、又自然なき人間なしとの觀點よりすれば、或は一應一元的に地理學を認識しうるかも知れず、又人間と自然

とは一體たるべき事が神の攝理であるとの神學論より見れば又已むを得ぬであらう。併し人間が意思を有し自然と獨立の存在である事も眞理である。人間の存在は運命であると共に意思である。若し人間が運命のみによつて存在し、行動するならば、その生成物たる文化は自然的存在にすぎず、從て所謂一元論は成立し得ないといふ矛盾に陥るであらう。人文地理學が巨大なる發展をなしたといふ事實こそは一元論の弱點を明示するものではあるまいか。地理學的認識は一元的に非ずして寧ろ二元的たるべきではあるまいか。蓋し最初にも述べたるが如く人間は生來的に空間を認識し地理的考察を行ふ存在である。如何なる人間と雖も、程度の差こそあれ、空間的認識を有し、從て地理的であり、その行動は空間を離れて存在し得ない。併し人間の空間的認識力の發展に伴つてその研究方法が異らざるを得ぬ。即ち古代に於ては地表空間が狭小であり、その上に現象する一切のものが單純であり、且つ空間的認識が幼稚であつたから、地理的認識に何等の分化を見なかつたが、今日では世界の外延的擴大と内充的集積によつて無限の複雑性を生じ、方法論的に分化せざるを得なくなつた。後に詳述するが如く、おのづから自然科學的認識と文化科學的(又は歴史科學的、精神科學的)認識との分化を生じ、同一の地表空間を異れる研究方法によつて取り扱ふに至つた。かくて自然地理學と文化地理學とは

概念的に截然と區別され、この區別あるによつて却て兩者の意義を闡明する事が出來、應て地理學一般の意義の理解を深める事が出来る。自然地理學をテーゼとし、人文地理學をアンチテーゼとする辨證法的對立と見る時に自然地理學と人文地理學とは相互に認識を深め合ひ、内容を豊富ならしめ、茲に止揚されたる地理學が理解されるのであつて、地理學の一元論こそは地理學を益々雜炊的ならしめ、獨立科學としての存在を否定するの結果とならう。

上述の如く地理的認識は人間自身の發展と社會關係、人間と自然との相對關係の變遷によつて變化するが故に、地理學が自然地理學と人文地理學とに分化し、更に無數の地理學部門を發生したのであり、又この分化の過程及びその研究方法、目的等も亦時代と地方によつて變化してゐるのであるが、而かもそれは一定の方向を以て進むものの如くである。從來、時間的認識の變化、之に適應する歴史學の發展段階を、第一、物語的（歌はれたる）歴史（die erzählende od. singende Geschichte）第二、實用的教訓的歴史（die pragmatische od. lehrhafte Geschichte）、第三、發生論的發展的科學的歴史（die genetische, entwickelnde od. wissenschaftliche Geschichte）の三に區劃するのが常であつたが、この發展段階は、正に地理學にも適用しうらと思ふ。即ち古來の地理學の變遷のあとを見るに、第一は物語的趣味的文學的地理學、第二は實用的目的論

的地理學、第三は現象論的分布的科學的地理學の三段階に大別する事が出来る。古代より現代的に至る迄の地理書を大觀するに、文化の發達未だ幼稚なる時代に於ては、人間は悠久無限複雑多様な自然を神祕なるものとし、諸の自然現象を以て神意の表現なりとさへ考へ、從て個々の自然物を神化する程であつたから、之を理論的に研究する事なく、只驚異と恐怖と神祕の念を以て、日常生起する自然現象及び自然状態を記述したるに止るが故に、何れも物語的記述である。又人間は新を求め奇を好み、停滯束縛をいとふの習性を有するが故に、常に移動して止まない事は、意外にも古くより遠隔地の間に人と物との移動、交通の行はれたる事實が之を歴史的に證明して居る。人間が見知らぬ異郷に旅行して多年住みなれし郷土の風物と著しく異れる世界に接する時は之に大なる興味を刺戟され、それは應てその山川風物を歎美し、驚異の眼を以て書き記さんとするのは當然であり、又旅行せざる者は未知の世界を知らんとし之を憧憬するが故に、物語的文學的地理書を好んだのである。古き旅行記風の地理書、地誌的地理書は多くこの段階に屬するものである。更に國家の體制が整ひ政治が社會生活に於て重要な意味を加へ、殊に軍事的又は商業的、植民的活動をなすに及び、遠隔地の事情を知悉する必要を生じて以來、地理學は著しく發達して來たが、併し乍らこれは國家又は支配階級が政治の遂

行の便宜に刺戟せられたものであり、又軍人や商人の活動を有利ならしむる手段として研究せられたのである。即ち政治行政上の基準として、又は攻略營利の豫備知識として、各地域の地理的事情を記述し、或は一定の地理的事情の下に於いては、その住民の特性の異なる所以を推論し、政治、經濟その他文化一般の特異性に關する概括的理論を構成し、役人、軍人、商人のその時々、所々に適應して活動すべき指針を與へる事を目的とした。人國記風の地理書はその典型的なものである。白人が世界各地に出沒して侵略的活動を初めて以來、實用的の地理學が著しく發達した。未知の世界に至りて國土を侵略し、又は萬人の尊重する珍奇の物資を掠奪するには多くの危険あるが故に、各地の民族性、風土病、動植物の分布状態、特産品の種類、品質、數量、交通關係等を詳述し以て目的達成に資せんとした。要するにこの時代の地理的研究は實利的目的を以て行はれたるものであるから、必ずしも一般的綜合的論理的ではなく、便宜の一方的たるを免れなかつた。併し何分にも強力なる實利心から出發し、而かも多くの場合生命がけの行動に對する唯一の指針とされたのであるから、その記述は比較的正確にして、地理的認識を深め、地理的視野を廣むるには大なる効果があつた。所謂探檢發見時代の地理書は多く之に屬し、商業地理、植民地理、商品地理はこの段階に於て成立したものである。

前段階に於いて集積され整理された地理的認識、資料の豊富、世界地域の擴大、各國家間の均衡の確立は、舊來の如き研究方法を以てしては、文化の進歩發展に即應するが如き地理學たり得なくなつた。茲に地表空間を現象論的に考察し、事物が如何なる過程によつて地表に展開し、分布するかを研究し、科學それ自身としての地理學を樹立せんとするに至つた。即ち地理學は特定の目的を達成するための手段として研究されるのでなく、事物の分布現象と之による空間の各部分の地域的個性の形成せらるる理法を研究する事夫れ自體を目的とし、その成果が如何に利用されようと、又それが如何なる影響、結果を社會に齎さうとも敢へて關知する所に非ずとの態度を以てのぞんだのである。この態度は科學が人類全體の共有的文化財であり、時間空間を超越するものであるならば、何等非難さるべきものではなく、却てかくあるべきを主張しなければならぬ。併し乍ら人間は今日の状態に於ては國家なくして生存する事は出来ない。而して資本主義の發展途上に在りては、資本主義が超國家的であり、超民族的であつて、人間は之に適應して或る程度に超國家的超民族的であり、從て世界主義的であり得た。地表空間を取り扱ふ地理學は勿論、他の諸科學も亦世界主義的であり、超國家的であり得た。國家も亦世界主義、自由主義に立ちて自由貿易を行ひ有無相通じてその存立を充分に確保し得たのである。

から、一國に妥當する科學は又他の國家に妥當したのであるが、第一次歐洲大戰以來、この世界的自由的機構は崩壊し、一民族一國家の原則は、各國をしてアウタルキー、計畫經濟、ブロック主義の三原則を採用せざるを得ざらしめ、茲に國際主義、自由貿易主義は終末を告げ、各國共に閉鎖主義、鬭爭主義となり、有無相通する事は殆ど不可能となつた。併し乍ら既成の國家には夫々大小あり、その自然的文化的所與は一定して居るのである。この所與によつて國家の存立と發展を計らんとすれば、必然的にアウタルキー經濟となり、更に之を有効に運營するには自由主義的經濟に代つて計畫經濟又は統制經濟に由るの外はなく、更に統制經濟を効果的ならしむるにはブロック圏を構成するの外なきに至つた。而して統制經濟は國內又はブロック圏に於ける所與の凡ての物の總力を壓出する事を目的とするが故に、人と物と自然を時間と空間に於いてその編制を合理化し以て國家存立の目的に即應せしめんとするのである。從來の自由主義の下に於ては、一個人が自己の目的追求のための合目的的行動が認められたるが故に國家全體としての利益又は目的と相反馳する事が頗る多かつたのである。従て國家の各地域は必ずしもその固有の機能又は作用を充分に發揮する事が出來ず、換言すれば地域的編制の合理化が完全に行はれ得ない場合があつた。統制經濟遂行の必然性は先づ地域的編制の合理化を要求

するが、之は更に各地域の個性を高調し、その個性の由つて生じたる所以を明かにし、更にその個性、機能に應じて國家又はブロック圏の地域的編制に参加せしむべきである。換言すれば舊來の資本主義的利己的立場による無政府的地域的編制を解體して、國家目的遂行の爲めに地域的編制の再組織を必要とするのである。茲に地理學は新なる使命を以て科學的地位を占むるに至つた。地理學はかつて個人的、部分的實利の爲めに研究され、更にそれが現象論的、分布的科學それ自體として研究されたが、今やこの兩者は辨證法的に止揚されて國家の合理的地域的編制を研究するの科學となつたのである。即ち一定の目的のためにする實用的目的論的ではあるが、併し前の低き次元に於けるものではなく、又科學それ自身ではあるが、而かも國家の最高目的を内包するものであつて、超國家的ではなく、全く高き次元に於ける兩者の止揚としての段階に到達したのである。

第二節 人文地理學の發達

地理學の成立が科學史上最も古きものの一つであり、且つ人間の空間的認識の發展と共に變

化したことは前節に述べた如くである。併し乍ら *Geographia* なる詞が示すやうに、本來は人間が空間的認識によつて地的關心を記述したものであり、從て人間の加はらざる自然的狀態を主として取り扱つたため、各地方の自然的事情を敘述したる地誌的研究と、自然の物理的關係の研究が地理學の本體とされ、地理學は即ち自然地理學とさへ考へられたのである。固より地誌的研究に於いても亦ギリシャの諸學者の旅行記或は一般の書物に於いても、自然が人間に對して及ぼす影響を論じ、又人間は自己の目的に適應するが如くに自然に對應すべきを説いたものが少くなかつた。併し今日の人文地理學の如く系統的に一科の學として自然と人間との關係を研究しようとしたのではなく、從て人文地理學的研究は全く萌芽形態に止つたのである。爾來文化の發達、交通の進歩、國家領域の擴大等によつて地理的認識の視野は擴大されたのであるが、クリスト教の隆盛となるにつれ自然に對する神學觀は、自然の分析、批判を以て神の冒瀆となし、之がために自然の本質を科學的形而下的に研究する事が甚しく阻害され、この事は又地理學一般の發達を妨ぐるところ頗る顯著なるものがあつた。

近世地理學の成立に對して最も大なる推進力となりたるものは *グレニウス Bernhardus Varrenius* (1622—1650) であつて、彼はその著 *Geographia Generalis, in quo affectiones generalis*

telluris exr-licantum (1650) に於て初めて地理學の體系化を試みた。彼は地球全體を研究する一般地理學と、一地域に於ける諸現象を研究する特殊地理學とを區別し、更に一般地理學を絶對、相對、比較の三部とした。一般地理學は純然たる自然的物理的地理學であるに反し、特殊地理學は土地に關する部門、天體に關する部門、人間に關する部門の三とした。彼は初めて地理學の研究對象を天地人の三方面に區分したのである。尤も彼は尙ほ舊來の地理學的方法よりして、人間に關する部門を地理學に屬せしむる事には多少躊躇したけれども、一定地域に於ける住民の肉體的特質、風俗習慣、言語、宗教、歴史を地理學の對象とした。彼は僅かに二十八歳の短命を以て終つたのであるが、その地理學の體系化は實に地理學史の一大時期を劃したものであつて、その體系は百年の長きに互り歐洲諸國の地理學界を支配するところとなつた。又人文地理學を廣義の地理學の一部として初めて認めたものともいひ得るであらう。グレニウスの死後、多くの學者によつて研究が行はれ著しき發達を見たけれども、何れも物理的、數理的地理學又は測量技術的のものであるか、或は探檢的發見のためか、國策遂行上に必要なる地誌的なものであつて、地理學の體系にはふれなかつた。彼に次で地理學の體系を論じたのはカント *Immanuel Kant* (1724—1804) であつて、二十年の間、自然地理學の講義を行ひ、地理學を分ち

て自然地理學、數理地理學、道德地理學、政治地理學、商業地理學、宗教地理學の六部門とした。彼は實體的調査による事少く、彼独自の科學論によつて、從來支配的なりし自然地理學、數理地理學の外に人文地理學に屬するものを分化せしめた事は、地理學史上注目すべき點であると共に、當時の學界社會状態が如何なるものであつたかを思はしめる。カントが哲學的方法論的に地理學の體系を明確にしつつある間に、地理學の實質を構成する實體的調査研究が盛んに行はれ、特に地誌的地理學は著しき發達を見た。この時期に於ける特筆すべきものとしては、モンテスキュー Montesquieu (1689—1755)、ケルデル I. G. von Herder (1744—1803) 等によつて自然的環境と人間生活との關係が系統的に研究された事である。彼等の思想は古くはストラボ Strabo (63 B.C.—19 A.D.) に發し、更にポードン Jean Bodin (1530—96) 等の影響によるものである。彼等は純然たる地理學者ではなかつたが、その説く所の地人相關論は近世の人文地理學の發達に對しても重大なる影響を與へたものである。

地理學を體系化しその科學的基礎を與ふると共に人文地理學に獨自性を與へたものはフンボルト Alexander von Humboldt (1769—1859) とリッター Carl Ritter (1779—1859) の二大地理學者である。フンボルトはヴレニウスの影響を受けたともいはれるが、實體的調査研究を

主とし、独自の哲學觀、宇宙觀を以て之を整理に力め、必ずしも體系的なる地理學理論の定立を企てたのではなかつた。併しその著はせる旅行記、論文全體に互りて自らその地理學體系を展開し、殊に一地域に於ける多種多様の現象は一體として相互に關聯するものなる事を高調し、諸現象の分布状態を因果論的に説明し、更にこの方法を社會現象にも適用し、自然と人間との關聯に關する環境理論を樹立するに至つた。フンボルトと殆ど時を同うしたるリッターは實體的な研究と相俟つて歴史哲學的理論的に考察し、從來の地理學が實用主義に墮したるを排し、科學夫れ自身として研究すべきことを主張した。彼は地理學を以て地域性の空間的並存關係を取扱ふものとした點はフンボルトと同じであるが、特に地域を統一的全體として把握し、比較研究に力を致した。更にリッターは環境論を以て地理學の指導原理となし、自然が人間の歴史に及ぼす影響を重要視し、而かも自然を以て人間の修業所なりとし、人間の歴史はこの修業所に於て神の命令によつて進行するといふ彼獨特の自然觀、神學的目的論より論じてゐる。而してかかる自然觀、目的論の結果として、世界を以て一の有機體と見、且つ自然と人間との關係に於ける環境論を主張し乍ら、自然そのもの又は自然相互の關係を輕視し、地理的研究の對象として社會現象を最も重要視するに至つた。リッターが人文地理學の始祖と稱せらるるは之がた

めである。實にフンボルトとリッターは人文地理學、否、近代地理學の建設者として今日に至る迄地理學界に對する影響は顯著なるもの存するのみならず、當時の歴史學、經濟學、更には政治、植民政策にまでも多大の影響を與へたのである。この二大地理學者の影響によりて地理學は凡ゆる部門に亙りて著しき發達を遂げ、殊に歴史地理學的研究、交通地理學、聚落地理學、商業地理學等の礎石の据ゑられたのもこの時代の事である。かくして一般地理學に包攝されて研究された課題は、夫々一科の學として細分化され、地理學は却て體系的に大混亂に陥り、地理學は獨自の存在を失ひ地表空間に關する諸學の研究結果を機械的に羅列するに止るが如き觀を呈するに至つた。前節に述べたる地理學一元論の如きはこの苦惱を打開せんとする努力の現れである。フンボルト、リッター以後の地理學的風潮に對し、特にリッターの神學的自然觀に對して最初の批判を加へたもの一人はベッシュマン Oskar Peschel (1826—75) である。彼はリヒトホーフエン Ferdinand von Richthofen (1833—1905) と共に自然地理的關係を重要視し、自然と人間との關係を自然科學的因果關係として研究すべきを主張したのである。

多くの地理學者の主張にも拘はらず、自然地理學なるものは次第にその影を薄くしたるに反し、人文地理學は益々擴充發展した。而して人文地理學を全く一科の科學として系統化し、完成したるものはラツチェル Friedrich Ratzel (1844—1904) であつて、人文地理學の父と稱せらるる所以は茲に在る。彼の地理學の指導原理は、人間生活に對する自然的環境の影響を絶對視する所の環境論であつて、その名著 Anthropogeographie oder Grundzüge der Anwendung der Erdkunde auf die Geschichte (1882—91) Die Erde und das Leben (1901—2) Politische Geographie (1897) 等に於て、その系統的なる環境論により、且つ豊富なる實例よりする歸納論に基き、人類の分布及び文化と環境との關係、國家政治と環境との關係を論究した。彼は人間が自然に與ふる影響をも考へ、所謂地人相關作用 (Wechselwirkung) をも論じたが、併し之も所與の自然的環境の下に行はれるものと考へたから、結局、彼は自然的影響の絶對性を主張し、その結果は、人類文化の發展變化、從て文化の特殊性は地理的環境によつて絶對的に支配され、歴史、文化は地理的環境の函數なりとする一種の自然的史觀、地學史觀に迄發展したのである。古來多くの學者が斷片的に論じたる地人相關論、地學史觀は實にラツチェルによつて科學的に論證されたのである。爾來この環境論を以て人文地理學の指導原理とする事が人文地理學者の主流となり、ラツチェル以後の人文地理學者にしてその影響を受けざるものなき有様である。彼の影響は常に獨逸國內に止らない。佛國のプラームト Vidal de la Blache (1845—19

18) もその一人であつて、彼は更に佛國內に多くの有力なる地理學者を輩出せしめ、ドマンジ
ン A. Demangeon、フェブール Fevre の如きは最も注目すべき人々である。米國のセンブ
ル E. C. Semple (1863—1932) 及びハンチントン Huntington もラツチェルの系統に屬すべき
人々である。

かくの如くラツチェル以後人文地理學の目ざましき發展に伴ひ、地理學に於ては人文地理學
が本體にして、自然地理學は寧ろ人文地理學研究への資料を提供するに止るが如き觀を呈する
に至り、茲に多くの地理學者は地理學體系につき再検討をなさんとし、又人文地理學が環境論
のみを以てその指導原理とする事が正當なりや否やを論議するに至つた。シュリューター Otto
Schlüter、ハットナー Alfred Hettner は夫々方法論の立場より地理學の本質、科學的地位を究
明せんとした。シュリューターは環境論に代ふるに景觀論(Landschaftslehre)を以てし、ハット
ナーは地理的因果論を以てした。而して兩者共に地域的概念を重要視したが、前者は景觀論的
立場より小地域の考察に力を注ぎ、後者は大地域につきて統一的研究を旨とした。この兩説に
つきては尙ほ議論の存する所であるが、地理學に於ける二の主流と見る事が出来る。シュリュ
ーター、ハットナーは共に完全なる地理學一元論者であつて、この思想の影響はラツチェル以

後に於ての最も顯著なるものといふ事が出来る。

人文地理學の新しい方向を辿るものとしてはズーバン Alexander Supan、チェレン Rudolf
Kjellén、ハウスホーファー Haushofer、ディクス Dix 等であつて、之は主として世界大戰以
後に於ける國際狀勢の變化、國力消長に關聯して地理的認識の變化せしに因るものである。地
政學(Geopolitik) 地的經濟學(Geökonomie)の如きは新しき獨自の方法論によつて科學體系を
確立せんとするものであるが、併し依然としてラツチェル流の環境論を完全に脱却したものと
いふことは出来ない。

更に最近の著しき傾向は主として經濟學者による立地學(Standortslehre)の隆興である。之
は單に經濟現象の本質より演繹して、經濟活動の地理的配置による生産能率、原費優越による
生産費等のみを研究するのではなく、國家を一の經濟的統一的地域として、その中に特定經濟
を在るべき所に在らしめる所の原理を研究するものにして、一定の經濟活動の地理的分布の決
定を研究するものであるから、廣義の人文地理學に屬すべく、從て又經濟地理學の一分野とも
考へられるのである。殊に新秩序の確立によつて舊組織を再編制し、地域的編制の合理化、國
土計畫が必然の要求となる場合には、立地學は益々その重要性を加へるであらう。立地學は地

政學、地的經濟學以上に人文地理學に於て重要な問題となるであらう。

かくの如く社會狀勢の變化、之に伴ふ地理的認識の發展は今後更に人文地理學の本質、指導原理、研究方法等につきて多くの議論を生ずる事は必然である。人文地理學は地理學上最も重要な地位を占むるものであり、地理學者は勿論他の學者も重大なる關心を有するものであるが、今日の如き單に景觀論、環境論、或はその變形物によつて地理學一元論を主張してゐるやうでは、前節地理學發達段階の説明に於てその一端を述べたるが如く、地理學の目的及び任務、從てその研究方法、對象等は必然的に變化し、その矛盾の止揚を必要とするのであるから、この新事態に即應する事は不可能である。併し乍ら余は斷じて地理學の獨立科學としての存在を否定するものではなく、如何に社會狀態が變化しても、地理學が地理學として存在するには不動の根本原理、アプリオリ、固有の研究方法の存する事を認むるものである。

最後に、本節に於ては人文地理學なる詞を使用した、之は舊來の學界慣習によつたのであつて、私は人文地理學の代りに文化地理學と稱するを適當と考へるが、それでは一般に了解し難き點が少くないので、暫く慣用語に従ふ事とした。人文地理學の代りに文化地理學なる語の適當なる所以は、次章に於ける科學分類論に徴すればおのづから明かとなるであらう。

第三節 經濟地理學の成立

經濟とは廣義に於ては、人間の物質的欲望を充足する爲めに營まるる人間活動の組織的秩序を意味し、文化一般は主としてこの經濟的活動の上に生長するのである。而してこの經濟的活動は外在する物資、特に自然的所與を對象とし、その中より經濟的欲望を充足しうるものを調達する事を第一義とするが故に、人間が狭小なる天地に居住し、未熟なる技術を以て自然に向ふ時は、増進して已まない經濟的欲望を充足し、以て文化の向上を計らんとすれば、常に自然の強力なること、或は人間活動の束縛となること等を痛感し、茲に地理的認識を發展せしめ、更に經濟的活動と自然とが密接不可離の關係に在る事を自覺し、之が考察を深めるのは當然の事である。故に苟しくも或る程度に經濟が發達し、事物を理論的に推理しうるの能力を有するに至りたる時代には、多かれ少かれ經濟と自然との關係が論ぜられたのである。併し乍ら經濟と自然との相關論は經濟學上の一研究方法か、或は經濟地理學上の一方法にすぎないのであつて、經濟地理學それ自身とはいひ難い。尤も之を以て經濟地理學的考察の萌芽と見るのは必し

も失當ではない。已述の如く已に古くより人文地理學の一部門として地理學者が、交通、聚落、商業に關する地理學的研究をなし、地域の個性又は景觀の構成要素として經濟現象を取り扱つたものも少くなかつたが、只方法的には未だ一の科學たるの地位を有せず、一般地理學に對する補助學的の使命を有したるにすぎぬ。從て經濟地理學なる學術語も存在しなかつた。カントの如きも政治地理學、商業地理學、宗教地理學をも認めたが、經濟地理學なるものを認めなかつた。固より之は當時の社會狀勢の然らしむる所にして、政治と經濟とが未だ明確に分離されず、國家又は領主本位の政治經濟が行はれ、且つ國家が富國の策を講ずるには海外に植民地を獲得し又は貿易によつて金銀及び財貨を獲得蓄積するの外なしとの重商主義的政策の行はれたる結果に外ならぬ。カントにして尙ほ然り、他の學者がかかる立場より地理學を研究したのは當然の事であつて、經濟地理學は先づ商人地理、植民地理、商品地理、交通地理の形を以て現はれて來たのである。併し乍ら産業革命以來資本主義の發達と共に、排他的國家經濟より自由的世界經濟に推移し、世界が或る程度に經濟的地域統一體となるに及び、經濟地理學的認識の確立、研究資料の豊富、他の諸科學の異常なる發達に伴ひ、文化活動中の最も主要なる部門としての經濟は地理學の最大關心の集中する所となり、獨立の地理學部門として存立するには

充分なる素地が出来上つたのである。而して經濟地理學なる用語を最初に用ひたのはゲッツ(Wilhelm Götz)にして、千八百八十二年、經濟地理學の課題(die Aufgabe der Wirtschaftlichen Geographie)なる論文を發表し、その意義を明かにして獨立科學たるべきを主張したのである。其の後、ハントナーは Wirtschaftliche Geographie よりも Wirtschaftsgeographie なる語を適當なりとし、爾來之が慣用語とされてゐる。

文化一般は經濟諸關係の上部構造であり、經濟諸關係は即ちその下部構造なるが故に文化は經濟關係の函數たりとするの説に對しては多くの議論の存する所であるが、經濟と文化とが密接不可離の關係にある事は何人も疑ふ餘地はない。從て文化が發達すればする程、經濟關係の重要性を加ふる事は明かである。而して前にも述べたるが如く、人間意思の所産たる文化、特にその一部門たる經濟が常に時間的空間的存在たる事は論を俟たざる所にして、之が地理學的認識によつて究明せらるべき必要は益々大とならざるを得ぬ。從て經濟地理學は愈々地理學上、特に人文地理學上重要な地位と任務とを有するであらう。而して今日の經濟地理學はその指導原理として自然と經濟との相關論即ち環境論、或は景觀論、地理的因果論等が主張されてゐるが、かくの如き理論を以てしては充分なりとすべきや否や大に疑問である。蓋し經濟が外的

物資の調達に志向する人間活動の組織的秩序ではあるが、その指導精神は常に變化するからである。論者或は曰はん、經濟の概念、指導精神が常に變化するが故にこそ、不動の地理學的指導原理を主張する必要あり。然し乍らこの地理學的指導原理は實は地理學そのものの指導原理に非ずして、地理學の取り扱ふ諸現象を説明するの一原理たるに止り、その全部ではないと思ふ。この點につきましては次章に於て詳述するであらう。

第二章 經濟地理學の本質

「經濟地理學の成立が極めて最近の事に屬し、且つその研究對象が、經濟と自然といへる概念的に全く別個の範疇に屬するものなるが故に、之を統一綜合して一元的に取り扱ふ事は方法論的に頗る困難であり、強ひてこの異なるものを一元的ならしめんとすれば、經濟哲學又は歴史觀となり、經驗科學たるの地位を逸脱するの虞なしとせず。かくの如き事情にあるが故に經濟地理學はその研究方法、任務、定義等その本質を闡明すべきものにつきて未だ定説を見ざる状態に在る。故に經濟地理學の名を冠する論著の中には、全く名實伴はざるものが少なくない。而して之を大別して見ると三の傾向を看取し得る。その一は舊來の商業地理學の變形と見るべきもの又は商品地理學に屬するものであつて、個人的營利的經濟活動の手段たるに止り、何等科學的理論を有しないものである。第二は獨逸流の經濟地理學にして自然と經濟との相關關係によつて地表の經濟的意義を明かにしようとするものである。第三は經濟現象の地理的分布は一

定地域の自然的人文的關係によりて異なるが故に、地表の各地域の經濟的特異性を研究し、更に之を統一比較してその本質の研究をなすべしとするものである。第三の傾向は最近著しくなつたものであつて、歴史學が文化を時間的垂直的發展的に研究し、各時期に於てその現象形態の變化する過程を闡明せんとするに對し、經濟現象を空間的平面的分布(展開)的に考察し、各地域に於ける現象形態の差異を説明せんとするものにして、方法論的に最も正鵠に近きものといふべきである。第一、第二によるものは經濟地理學研究上有用なる方法ではあるが、之を以て經濟地理學そのものといふ事は出來ず、一の研究方法又は豫備知識たるにすぎない。

第一節 經濟地理學の定義

經濟地理學の本質を明かにするには、先づその定義を確立するの必要がある。定義が確定されたならば、之に即應して範圍、研究對象、研究方法、科學的地位、任務等は自ら決定されるのである。定義の確定は學問の體系を樹立する上に最も重大なる意義を有するものといはねばならぬ。經濟地理學に關しては未だ定説的の定義はなく、又經濟社會の狀勢が急速に變化しつ

つあるが故に、今の處、永遠不變の定義を樹立する事は困難である。茲には今日の科學の發達階段、社會狀勢に於いて一應の定義をなすの外はないと思ふが、併し如何に諸事情が變化するも、經濟地理學を經濟地理學とする限り、次に示す定義が根本的に崩壊する事はないと信する。「經濟地理學は經濟的文化の空間的分布的現象形態としての地域の個性を研究する科學である。」

左にこの定義を分析説明する事によつて、經濟地理學の本質、科學的地位、研究對象につきて一般的考察を試みるであらう。

第一 經濟地理學は經濟的文化の現象形態を研究する

經濟は人間文化の一領域である。文化は人間がその欲望充足のために一般的普遍的妥當性ありと認識して完成せし價值的所産の總和され抽象化された概念にして、之を夫々のアプリアオリによつて、科學、教育、宗教、藝術、經濟等に分類する事が出來るけれども、本質自體を直接に認識する事は哲學の力に俟つの外はない。蓋し形而下の學問はその現象形態に於てのみ認識し研究するの外はないからである。例へば水の原素は之を五感によつて認識する事能はず、抽

象的理論的に理解しうるに止るが、併し一定の時、所に於て現象する所の液體としての水、氣體としての蒸氣、固體としての氷は、その現象形態に於て種々の研究をなし、理解しうると同一である。經濟的文化なるものも亦同じであつて、經濟的文化は「經濟的なるもの」をアプリアリとして區別されたる文化領域ではあるが、「經濟的なるもの」は哲學的にのみ規定しうるのであつて、直接その如何なるものなるかを把握する事は出来ない。併し乍ら個々の經濟現象に於て經濟的文化を理解する事は可能である。故に經濟地理學は窮極する所經濟的文化の本質の理解に到達しようとするのではあるが、實はその現象形態の研究をなすはすぎない。

註 經濟的なるもの (das Ökonomische) の本體につきては定説なく、或は經濟主義なりとし、或は生産の概念、配分の概念、貨幣概念等を以てするものもある。又ウェーバー (Max Weber) の如く、「一の行爲が要望せられたる效用給付のためにする計慮、又は要望せられたる效用給付を處理するの可能的機會を目標として志向せしめらるる限りに於て、この行爲を經濟的なりとする」と間接に經濟的の意味を定義してゐるものもある。

第二 經濟地理學は經濟的文化の現象形態を地理的

分布的に研究する

地理的、空間的

凡べての事物の區別は特定のアプリオリによるのである。換言すればそのものをそのものた

らしめる所の先驗概念によつて區別が行はれ、特定の概念が構成されるのである。已述の如く凡ゆる文化は時間と空間とを離れて存在し得ないのであり、從て時間なき空間、空間なき時間は現實には在り得ないのである。併し乍ら一般の科學は時間と空間とを同時的に把握する事は出来ないので、經驗科學に於ては時間と空間を孤立化して一方的に理解するの外はない。兩者の同自性、矛盾的自己同一性の把握は哲學のみよくなしうる所である。地理學が独自の科學として他の科學と區別さるべき基準は種々考へられるであらう。例へば研究方法、對象はその主要なるものであらうが、併し之は絶対的アプリオリたり得ないのであつて、地理學の性質を理解するの一條件にすぎないであらう。地理學の絶対的アプリオリは空間的分布といふ事である。分布といふのは一定の現象が各地に點在してゐるといふ事ではなく、地表は一の綜合體であり、地的統一であつて、如何なる地表部分と雖も苟も地表である限り渾一的に連續してゐるのである。而かもこの地的統一は斷じて同一同質なるが故に存するのではなく、不同、異質なるが故の地的統一である。この不同異質の地的統一は一切の現象の分布、擴がり、展開を夫れ自身に包攝してゐる。地表の諸現象は時間的に變化し、須臾も止る事はない、同じ地表の現象を只時間的系列に於て各部分の個性の變化を研究するのが歴史學とせられるのであるが、地理學は正

に空間的連續に於ける各部分の個性の展開、推擴を一の空間現象として認識するものである。故に經濟地理學は、同一の時期、特に現代に於ける、相連續せる地表空間の各部分を、經濟的文化的諸現象の地理的分布的展開的推擴の構造聯關に於て研究するものである。分布的展開的推擴の構造聯關は當然に地的統一を前提とし、個々の孤立せる地域のみにつきては考へられな。故に一地方に於ける經濟的事實を個別的に記述し、或は一地方の生産物の數量、品質等を集録するが如きは、經濟地誌又は商品學に屬すべきものにして、經濟地理學研究の資料又は準備としては必要であるが、經濟地理學そのものとはいひ難い。

歴史學は相連續し系列せる時間の各部分に於ける一定現象の垂直的發展的變化の過程に存する理法を研究するに對し、地理學は相連續し並置せる空間的各部分に於ける一定現象の平面的分布的推擴（又は展開、擴がり）即ち地域的構造聯關を研究するものである。歴史に於ける現象が時間的に異質性を有するは、現象そのものが時間的に自己に内在する矛盾の轉回止揚によつて變化するのであるが、空間的に異質性の生ずるは、地表空間が最初より異質であるといふ事を前提とし、之に對して人間がその意思によりその目的達成のために行動するの組織的秩序を有する地域的構造を形成するが故に、その地表に現はるる現象形態が異なるのである。その空

間分布的の差異は隣接連續せる地域の現象が内在的自己矛盾的發展變化より來れるに非ずして、人間意思がその行動を展開せしめ、推擴せしむる構造聯關によるのである。故に地理學は、歴史學的發展的變化の概念に對して、分布的推擴（展開、擴がり）の概念を以て根本概念としなければならぬ。固より個々の地域の時間的變化は自己矛盾の止揚による事は當然であるが、その自己矛盾的變化は地理學の概念の外に在るものにして、直接地理學の研究する所ではない。かくの如く地理學に於ては、空間的地理的分布的推擴（從て地域的構造聯關）といふ事が絕對的アプリオリをなすが、併し後に述ぶるが如く、經濟地理學は文化科學に屬するものであるから、分布的推擴なるものは、どこ迄も文化的價值特に經濟的文化價值に關係せしめられなければならない。只單に分布的推擴のみを考へ文化價值を沒却するに於ては自然科學的地理學と化するであらう。例へば人間の經濟活動特に農業は動物、植物、水利、土壤等と不可離の關係に在るが、若し之等のものの單なる自然的分布現象として經濟的價值と無關係に取り扱ふならば、それは經濟地理學の一分科としての農業地理學ではなく、その補助的手段としての動物地理、植物地理、水理學、土壤學にして、自然科學の一部門たる自然地理學といふべきである。又經濟史は經濟的文化そのものの時間的發展的變化の過程を研究するものであるが、併し歴史の發

展が社會の經濟的關係と重大なる關係を有すればとて、一般歴史の變化過程を經濟的に説明したるものが經濟史そのものでないと同じく、自然的又は地理諸關係は人間の經濟的活動に重大なる意義をし、且つ經濟活動ありて初めて社會的地理的意義があるからとて、之等のものを經濟的に説明せるものは又經濟地理學に屬せずして、寧ろ一般經濟學の問題といふべきである。

第三 經濟地理學は經濟的現象形態としての地域的個性を研究する

凡ゆる經濟現象は抽象的に顯現するものではなく、必ずや具體的事實として現はれる。而して具體的事實は更に一定の空間現象として地表に展開され、一定の擴がりを以て分布的推擴をなし、地域的構造聯關をなすものである。この分布的推擴、構造聯關に於て經濟現象が複合して一定の地域は一定の個性を有し、他の地域と完全に區別される。若し一定の個性なき地域は地域として存在しないのであつて、何れかの地域に包攝されるのである。地表は各部分が決して自然的に同質でなく、全く異なるものであると考へられる。若し地表が自然的に同質であるとするならば、已に自然地理學は成立し得ず、僅かに地球と他の天體との物理的數理的關係に

關する物理地理學、數理地理學のみが存在し、一般地理學は有り得ないのである。而して人間は量質共に増進して已まない文化的欲望を有し之を充足し達成せんとするの意思を有するが故に一定の手段、組織を以て異質なる地表に對して創造的活動をなすのである。その最も顯著なるものが經濟活動である。吾人が一定の地域の景觀を見る時、夫々の特徴個性を有するが、結局、自然的異質の上に於ける人間の經濟的活動の表現にすぎない。種々の自然的現象の配置は地域の特徴として、又景觀として最も容易に認識しうる所であるが、併し之は經濟の本質そのものではなく、從て文化的、經濟的なる地域の個性とはいへないのである。經濟現象が空間を離れて起り得ず、又その地域に於ける所與としての自然的關係によつて現象形態が規定される事は自明の理であるが、經濟地理學に於ける地域の個性は、かかる自然的關係を潜在的豫件として考へ、經濟現象の複合體たる經濟構造そのものを地域的個性の現實的特質と見るべきである。故に諸々の經濟現象を綜合統一して一定地域の特徴を抽出し、之によつて一定地域を他の地域と區別するのである。この區別あるが故にこそ經濟地理學は成立しうるのである。若し地表全體が何等の經濟的特殊性を有せず、從て地域的區分をなし能はざる場合に於ては經濟地理學は存在し得ないであらうし、又人間の地理的認識力は發達しなかつたであらう。

地表がそれぞれの立場から區別され、一の地域として認識される所以は、經濟地理學的にいへば、經濟的個性を有するからである。故に一の地域は他の地域と完全に區別さるべき個性を有する。併し地域的個性を有するといふ事は、他の地域と無關係に孤立して存在するといふ事ではない。各地域はその独自の個性を有し乍ら、必ずや他の地域と連續的に並置し繋がりを有するるのである。各地域は地的統一の下に初めて自己の地域があり、存在があるのであつて、全體的地的統一のなき所には地域なる概念そのものが生じないのである。故に地域的個性を論ずる場合には、地表を一の地的統一とせる事を前提としてゐるのであり、經濟地理學的にいへば經濟的なる地的統一の下に考へられてゐるのである。他の立場より見れば、地域は部分的特殊の概念であり、地的統一は全體的一般的概念である。地域的個性は、一般性又は普遍性の特殊なる結合關係によつて生成せられるものであるから、個性はその中に一般性を包藏してゐるのである。而して一般性の究明は主として演繹的方法に俟つべきものにして、個性の認識は歸納的方法による場合が多いのである。地域的個性と地域的統一とを右の如く理解する時は、經濟地理學が先づ地域的個性を經濟的現象の複合體たる地域的構造として研究するものである事は自ら明かであり、かくして地的統一の立場より國家の地域的編制に對して各地域がその個性

的存在によつて如何なる關係を有すべきかの問題をも研究の對象とするに至るのである。

第四 經濟地理學は經濟的文化を研究する科學である

經濟地理學が獨立の科學なりや否やにつきましては最近迄尙ほ議論の存したる所にして、或は經濟學の補助的手段なりとせられ、或は地理學の豫備知識の如く解せられた。蓋し先にも述べたるが如く、地理學自身が方法的に又對象論的に科學としての存在を疑ひ、單なる地表全般に互る知識の寄せ集めとさへ考へたのであるから、最も新しき地理學の分科たる經濟地理學の科學性に關する定説なきは敢えて異とするに足らぬであらう。併し乍ら地理學が地表に關する萬般の問題を取り扱ふものとせらるる限りは、その科學性は問題となるけれども、今日の如く地理學が微細に分化して特殊地理學が發達すれば、却て一貫せる指導原理によつて體系を樹立し、その研究對象、方法が確定されるが故に、完全に獨立の科學たりうるのである。地理學一般としてはその存立のために一元論、二元論等が尙ほ論争してゐるけれども、他の特殊地理學に於ては、その科學性につきましては殆ど議論の餘地なく、獨立の科學たる事は疑ふの餘地なき所である。併し乍ら各特殊地理學が科學體系上如何なる地位を有し、從て如何なる方法によつて如何

なるものを研究すべきかは、特殊地理學みづからの力によつて決定する事は出来ないであつて、科學方法論、哲學の分野に屬する問題である。而かも尙ほ今日の哲學、科學方法論も、未だ科學分類につきて決定的ではないのであつて、種々の議論が行はれてゐる。科學分類論として古くより行はれたるものは Francis Bacon (1561—1626) の三分説にして、即ち人間の知能の作用を記憶力、想像力、推理力に三分し、之に適應して史學、詩學、理學の三科とし、更に之を細分して科學體系を作つたのであつて、長く學界に用ひられたものであつた。その後、所謂獨逸哲學の發達するに及び、先づヴント (Wilhelm Wundt 1832—1920) は研究對象によつて科學の分類をなし、科學を先驗科學(形式科學)と經驗科學とに分け、更に後者を自然科學と精神科學とに分つた。固より方法論的區別を全然無視したのではなく、細部につきては組織論的、發生論的、現象論的科學なるものをも認めて居る。併し乍ら第一義的に研究對象により科學分類をなすは一見容易簡單なるが如きも、研究對象そのものを如何なる方法によつて區別すべきかは更に困難なる問題にして、却て理論一貫せず、曖昧のものとなるの虞がある。茲に於て ヴインデルバンド (Wilhelm Windelband 1848—1915) は方法論の立場より法則定立學と個性記述學とし、自然科學は前者に、歴史科學は後者に屬すとした。この思想を展開發展せしめた

のがリッケルト (Heinrich Rickert 1863—1936) である。即ちリッケルトは經驗科學を分ちて沒價值的普遍化的科學たる自然科學 (Naturwissenschaft) と、價值關係的個別化的科學たる文化科學 (Kulturwissenschaft) との二とした。固より無限に存在する森羅萬象を只この二の科學分野に分ちうるものではなく、更に無數の細分化を行ふの必要があるから、嚴密なる區分は不可能であるが、科學分類の根本としてはリッケルトの説は最も適切なるものといへよう。而して更に細分化を行ふ場合には、夫々のアプリオリを定立し或は研究對象を類概念によつて構成し、以て各科學の任務を遂行すべきである。左に經濟地理學が文化科學たるの所以を説明するであらう。

イ 經濟地理學は文化科學である。

已述の如く地理學が他の學問と本質的に區別せられる指導原理につきては種々の議論が存するけれども、何れも普遍妥當的ではなく、唯一の原理は諸現象の地理的分布(擴がり、又は展開)、即ち地域的構造聯關、并に之によつて形成せられたる地域的個性に外ならぬ。而して經濟地理學は經濟的文化の現象形態の地理的分布、地表各部分の地域的個性なる概念をその科學的アプリオリとするものであるから、方法論的にいへば廣義の地理學である事は言をまたぬ。

併し乍らこの概念は沒價值的普遍化的方法によつて構成されるのではなく、各地域に於ける經濟的個性の比較研究をなし、經濟現象を構造聯關に於て研究するのである。而かも空間現象として經濟現象を取り扱ふけれども單なる自然現象としてではなく、文化的價值關係に於て研究する事を任務とするが故に、個性を離れ、價值關係を離れる事は出来ない。されば經濟地理學は、人文地理學 (Anthropogeographie, Human geography) 又は文化地理學 (Kulturgeographie) の一部門であり、從て經濟地理學は文化科學に屬すべきものである。

文化科學と自然科學とは方法論上、如何なる點に於て區別せらるべきか。元來、自然科學に於ては、個々の現象を精密に分析して、同類のものを綜合概括する所の分類的記述に始まり、遂には經驗に直接現はれざるが如き内容を有する概念を思惟によつて構成し、更に普遍的必然的關係を現はすものとしての法則 (Law, Gesetz) を定立し、個々の事物の個性を全然沒却し、この法則中に包攝して、これが論理的説明を行ふものである。從て自然科學研究の終局の目的は、無條件に普遍的なる法則を定立する事に存し、その他の手續はその目的到達の手段にすぎないのである。かかる法則が定立せらるることによつて、無限に多種多様な現象が、單純なる普遍的關係に織り込まれてしまふ。かくの如き自然科學の認識は、單に諸現象中に含まるる普

遍的關係に止り、個々の現象に固有なる特質、即ち個性又は價值關係は、自然科學の概念に達し得ざるものといはねばならぬ。例へば經濟の主體である人間は人種學的に、又は生理學的に研究する場合には、各人の有する人格、個性は全然その認識に上つて來ない。只一定の人種又は民族に固有なる普遍的性質を抽出して一定の概念を構成しておき、そして個々の人間を觀察分析して、その普遍性を研究し、以てそれが如何なる人種に屬するかを決定する。從て個個人が如何なる人格を有し、形相を有し、更にそれが經濟的文化的に如何なる意味を有するかは問題となり得ない。更に一例を以て説明するに、木綿は今日人類生活と離るべからざる關係にあるが、これは全く自然科學たる植物學、植物地理學の研究の對象となり、又文化科學たる經濟學の對象ともなりうる。而して假りに木綿を植物學的に研究する場合には、木綿一般に共通普遍的性質のみを考へ、以て他の植物との區別、その物理的化學的性質の一般性を研究するのであつて、その分量の多寡、產地如何、質の良否と經濟的價值の關係の如きは直接に問題となり得ない。これに反して文化科學に於ては、事情が全く異なる。即ち、これに於ては、事物又は現象の個性又は價值關係を高調し擴充する事がその認識の根本をなすのである。從て經濟地理學に於ては、各地域の經濟的個性を最大關心事とし、その最大關心事たる事象につき、他の事

象と共通なる性質を除外し、以て一定の地域をして、他の地域と獨立の、特有の個性あるものとして考察し、以て他の地域の價值關係又は意味を研究し、その個性、差異の生ずる所以を明かにする事を任務とする。勿論、文化科學に於ても共通普遍的性質が完全に除外せられるのではなく、共通普遍的性質も共に考察せらるる場合が少くない。蓋し經濟的現象の個性は、單に種々の要素の機械的結合によつて成り立つのではなく、一般的性質の特殊なる有機的結合の結果に外ならぬからである。併し乍ら文化科學の存立の根本理由は、その個性の價值的認識にある。故に木綿の人文地理學的又は經濟地理學的研究の場合を例にとるに、木綿は前述の如く、植物學的に或は物理學的、化學的に普遍化的研究をなし、その個性價値を没却してその一般性を明かにしうるが、同時に、各地方に産出する木綿、或は一定の耕作技術の下に於て産出せられたる木綿は、その産出の分量に於て、又生産工程上に於ける關係を通して、農業經濟上に、紡績工業上、更には貿易上にそれぞれ獨特の價值關係を有する。この價值關係を中心として研究すれば、即ち文化科學的研究となり、木綿に關する商品學的、商業地理的經濟地理的研究が成立しうるのである。即ち木綿の産地、消費地、木綿の加工地の經濟的個性特徴を分布論的綜合的に研究する事は木綿に關する經濟地理學であるが、抽象的に木綿そのものの一般性を研究

する事は經濟地理學の埒外に立つものである。木綿を通しての各地域の經濟的個性こそ絶對的に經濟地理學的認識を支配するものである。故に一般に、經濟地理學は地表に於ける各地域の經濟的特異性の嚴存する事を前提するものにして、若し地表の各部分が何等經濟的に特異性を有せざる場合に於ては、最早經濟地理學はその存在の理由を失ふものである。又特異性あるに拘はらず、この特異性を没却し、その共通的普遍的關係のみを見て、絶對的普遍法則を定立せんとするならば、それはも早經濟地理學といふ事は出來ないのである。

□ 經濟地理學は個別化的通則發見的科學である。

經濟地理學が文化科學に屬すべきものなる事につきましては殆ど疑もなき所であるが、さて然らば、文化科學が法則定立的 (nomothetisch) の科學なりや否やにつきましては議論を存するのである。通説に従へば、文化科學は個性記述的 (idiographisch) であつて、法則の定立は本來の任務とすべきものに非ずと考へられる。併し乍ら諸現象の個性の價值的特性は、一般的普遍性の特殊なる結合關係即ち特殊性によつて生ずるものであり、從て個性は一般的普遍性の凡てをその中に包藏するものである。個性は他と區別されたものあり、他との區別は一般的普遍性を通して初めて存立しうるのである。故に一般的普遍性をはなれて個性なるものは考へ得られないので

あるから、個性の本質を理解する爲めには、先づ一般的普遍性を研究し、之を通して個性的存在の關係を比較研究するの必要がある。併し乍ら文化科學として存在しうるが爲めには、どこ迄も個性又は價值關係がその根本的基礎をなすべきである。所謂法則の定立なるものは、個性の理解、價值關係の闡明の爲に行はるのである。かくして文化科學が個性の研究をなし、事物の價值關係を明かにしたるに於ては、更に各個性的存在の相互の關係又は共通普遍性が學的關心事とならざるを得ぬ。文化科學の法則は主として、かかる場合に定立せられるのである。例へば典型的文化科學の一たる傳記學につきて見るに、傳記は人間の個性を徹底的に高調しその特殊性のみを記述するものであるが、假りに偉人の傳記を研究したる場合に古來の多くの偉人を大量的觀察をなせば、それぞれ顯著なる個性を有するが、而かもそこに一貫せる偉人の特徴、共通點を見出しうるが故に、偉人とはかくの如きものなりとの理論が成立しうる。併し各個性的存在は如何なる場合にも、それが文化科學的に取扱はるる限りに於て、その存在を否定せらるる事はない。法則と個性との矛盾は常に止揚せらるべきである。個々の矛盾があつても、個性が否定されず、又法則が否定もされないのである。蓋し、文化科學に於ける法則は次項に述ぶるが如く、絶對的普遍化法則ではないからである。經濟地理學は地表の各部の經濟

的個性の高調記述をなすものではあるが、同時に又各地域に共通なる關係よりして一定の地域に於て一定の經濟的個性が形成せらるる一種の法則的理論を定立する事が出来る。即ち各地域の經濟的個性を比較研究する時は、何故にかかる個性が形成されしかが明かとなり、而かもその範圍が擴大され、その事例が増加するに從て、その法則的理論の妥當性が増大する。例へば或る耕種式による農業地域は世界各地方に分布して居るが、特異の個性を有し同一なるものは有り得ない。併し耕種式といふ一般的普遍概念を通して各地域を考察するならば、一定の地域は耕種式に於て一定の個性を有するものなりとの理法が明かとなり、逆にその理法に適合せざる地域は、その一定の地域的個性を有し得ずとの法則が定立されるのである。かくして定立されたる法則によつて更に自己反省をなす時に地域的個性の理解が一層深められる事となる。故に經濟地理學も亦限定せられたる意味に於て、經濟現象の空間的分布從て經濟地域の個性の形成、構造に關する法則の定立をも行ふものといふ事が出来る。

ハ 經濟地理學の法則は傾向法則、又は類型法則である。

上述の如く經濟地理學は文化科學ではあるが、或る種の法則を定立することを任務とする。併しこの法則は自然科學に於ける法則とは本質的に異なるものである。蓋し文化科學の法則は、

個性の基礎の上に立つものであつて、どこまでも個性と結びつき之をはなれて存在し得ないからである。只事象の傾向を法則化し、又は諸々の個性に共通なるものを抽出し、之を統一して類型化したものであつて、絶對性を有しない。換言すれば、一定の個性は一定の事情の下に於ては一定の類型として顯現するの傾向があり、逆に、一定の條件は一定の現象に對して一定の個性を形成せしむるの可能性、蓋然性があるといふに止る。これ文化科學が屢々類型學 (Typologie) と稱せらるる所以である。文化科學の法則は、時空を超越したる自然科學の法則、例へば萬有引力の法則、物質不滅の法則その他無數の自然科學固有の法則の如く、絶對性と普遍性とを有するのではない。從て經濟地理學の法則も一般文化科學の法則と同じく單に類型法則又は傾向法則たるにすぎない。經濟地理學も一種の類型學である。然るに從來の經濟地理學は、自然と經濟との相關々係の研究、又は自然の經濟的説明に陥りたる場合も多く、從て自然的要素を重要視したる結果、往々にして經濟地理學の法則を自然法則の如く律し去らんとするの傾向が少くなかつた。併し乍ら經濟地理學を以て單に經濟現象の自然的基礎の研究でもなく、自然の經濟的説明でもなく、更に又自然と經濟との相關論にも非すとなし、經濟現象の地理的分布に由て地域的個性の形成せらるる所以を、文化科學的に研究せんとする者にとりては、經濟

地理學に於ける法則の定立方法及びその意義は自ら自然科學の夫れと異らざるを得ぬ。

二 經濟地理學の法則定立は歸納法を主とするものである。

科學的法則の定立方法は之を大別すれば二とする事が出来る。演繹方法 (deductive method) と歸納方法 (inductive method) とである。演繹方法とは一定の假設又は事實より出發して推理法に基き個々の現象を通して之を實證し以て法則を定立するのである。歸納方法は多くの現象事例を蒐集列舉し、之を秩序的に整理し各現象に共通なる特徴を綜合して類概念を構成し以て法則を定立するものである。前者によりて定立されたものを演繹法則といひ後者によるものを歸納法則と稱す。演繹法則は思辨的豫定論的抽象的であるが、後者は實踐的結果論的具體的であるのを常とする。併し乍ら文化科學は經驗的科學なるが故に、絶對的に經驗を超越して前提假説を造り得ない。演繹方法に於ける假設は單なる研究者自身の空想ではなく、現實そのものでなければならぬ。この假設が現實性を有するが爲めには、現實の事象が研究者の一定の思惟過程に於いて一旦歸納して構成されたる概念たることを要する。この概念を出發點とするものなるが故に、全くの假設でもなく、現實性なき空想でもないのである。例へば、アダム・スミス以來の正統學派經濟學又はカール・マルクスの社會主義經濟學は演繹方法によつたといはれ、

獨逸の歴史學派は歸納方法を主とする學派であると稱せらるるも、併し之は所論の出發點の劃定如何によつて區別されたものにすぎないと思ふ。スミスの好んで用ひたる利己心、經濟人の如き假設は、一見全くの思惟上の假設にすぎぬかの如くであるけれども、これが複雑なる經濟現象を説明するの基準となり得た所以のものは、この假設がスミス一個人の空想的假定から生れたものではなく、實は彼の歴史的統計的實證研究又は體驗に基く歸納的結果であつて、現實そのものを内藏せるものに外ならぬからである。かくの如く、演繹方法といひ歸納方法といひ、從て又これによる法則といふも、根本的に異なるものとはいへない。併し具體的に研究をなすに當りてはいづれを主とするかは頗る重要なことであつて、科學の種類によつて、その主とする所が異なるのは當然である。一般に經濟史、經濟地理學は歸納方法を主とするものであるが、併し他面に於ては、經濟現象又はその他の社會現象に固有なる特性より演繹して、經濟現象の史的發展又は地理的分布の理法を究明する場合も少くない。例へば工業地理的研究をなすに方り、各地域が、重工業地域、化學工業地域、輕工業地域として形成され地表に分布してゐる場合に、その由て來る所以は主として歸納方法によつて説明される、即ち自然的、社會的、歴史的、經濟的諸條件の複合體として究明されるのであるが、併し他面に於て、一定の工業は何故

にかかる條件の存在し配置されたる地域に分布すべきかは、單にかかる條件の存在、配置のみからは説明し得ないのであつて、各種の工業夫自身に固有の特質があつて、この特質の存する限りは、必ず一定の條件を必要とし、之なくんば一定の工業たり得ずといふ根本なる構造を有する筈である。故に一定の工業の根本的特質はかくかくであつて、之に適應する絶對的條件、要素はかくかくであるとの豫定的演繹的理論が存するが故に、之を無視して、單に一定地域に一定の工業が分布配置してに定の地域的個性を形成せる事を、その地域に存する自然的、社會的、歴史的經濟的條件のみから説明しうるものではない。故に經濟地理學は主として歸納的研究方法によるとはいへ、常に演繹的方法が出發點となつてゐるのである。特に經濟地理學が立地的立場より經濟現象の地理的分布を研究する場合には、演繹方法が指導的役割を演ずるものである。

註一 經濟地理學は地理學なりや經濟學なりやにつきては議論の存する所であり、更に地理學なれば如何なる地理學であり、又經濟學上には如何なる地位を占むるやは諸説一致する所はない。蓋し先にも述べたるが如く地理學自身につきてすら種の議論があるのだから、研究對象は文化現象たる經濟現象であり、方法的には地理學である經濟地理學の科學的地位、所屬につきて定説なきは當然の事である。グラーツ (Otto Graf) の如きは地理學を地誌學となし、自然科學と歴史學との橋渡しの役割を演ずるものとしてゐる。從て經濟地理學を以て經濟學と地理學との交叉又は重複の學なりとするは一

般の考へ方である。併し苟も科學分類をなす場合には一應純粹の形態に於て考察すべきである。經濟地理學が經濟現象を取り扱ふといふ點より見れば廣義の經濟學であるが、その研究方法は一般經濟學とは全く異り、經濟現象の空間面又はその地理的分布、空間的擴がり或は展開の推移狀態の研究であり、從て地理學的方法によるのであるから、人文地理學に屬すべきものである。併し對象論よりして科學分類をなすならば勿論經濟學に屬すべきものであるが、かくすれば經濟學夫自身が方法的に異なる種々のものを包含する事となり、經濟學の體系を紊る事となるであらう。故に方法的立場より經濟地理學を文化科學としての人文地理學の一分野とするが穩當であらう。

注二 經濟地理學が獨立の科學たる事は已に述べたる所によつて明かにして、最早議論の餘地はないと思ふ。併し地理學が自然科學に依存してその研究資料をとり、地表に存する自然的文化的諸現象に關係するの故を以て、何れの學問も地理學を利用する所が頗る大である。この利用度の大なる事が往々にして地理學をして補助科學たるかの如く思はしむるのである。經濟地理學亦然りであつて、今日の文化科學は勿論、人間の活動が經濟問題を中心とし、或はこの基礎の上に立つといふ實際の事情よりして經濟地理學の力に俟つものが益々大となりつつあるために、又一面經濟地理學の發達幼稚にして未分化の状態にあるために補助科學として取り扱はるる場合が甚だ多いのである。併し乍ら今日の如く學問が細分化されるればされる程、各學問が相互に利用し補完し合ふのであり、密接の關係を有しなければならぬ。併しこの相互に利用し補完する事の多少と、科學の獨立性の如何とは自ら別問題であると思ふ。

第二節 經濟地理學の任務

前節に示したる經濟地理學の定義よりして經濟地理學の任務は自ら決定されるのである。即

ち經濟地理學の任務は地表空間が夫々特異の經濟的個性を有し、獨自の經濟的機能を發揮する事によつて地的統一をなし、かくして人間の經濟的文化が空間的に構造聯關をなし、地域編制を形成せる事を明かにするに在る。人間は文化を創造するが故に人間である。文化は地表の空間現象であつて、天上の架空的現象ではない。苟くも空間的地表の現象である限り現實でなければならぬ。文化の創造は無から有を出す事ではない。文化とは人間に内在する力と地表空間に外在する力との結合關係によつて化成されたる、而して人間と自然とから止揚され獨立したる力であり、價值である。故に人間なき所、自然の力なき所に文化は生れない。併し自然は與へられたる狀態であり、そのもつ所の力は潜在力たるに止る。人間の欲望と意思との關係に於て、自然の潜在力は現實力となるのである。同一地域と雖も、之を歴史的に見るならば時代によりて著しき文化的差異を示して居る。自然的狀態は殆ど變化してゐないし、又人間が自然の狀態を變化しうる限度は極めて少いものであるが、それにも拘はらず、文化的經濟的に變化して居るのは全く人間の欲望と意思とにより、人間が合理的行動に基き文化創造をなしたる結果に外ならぬ。故に經濟地域の個性の研究は從來の如く自然的狀態を本とすべきものに非ずして、人間の經濟的文化創造力を第一義的に考ふべきである。一定の自然的狀態によつて人間の

活動が影響される事は明かであるが、併し乍ら今日では純粹なる自然状態なるものは在り得ないのである。一定の自然的所與なくんば人間の經濟活動は不可能であるが、只單に在るが故に人間の經濟活動が發達するものではない。有用無用は歴史的社會的關係に應じて決定せらるべきものである。例へば石炭は古き時代より地中に存在したるが、人間が之を發見し得ず、發見したるも社會關係は之を必要とせず、寧ろ農業耕作上有害とすら考へた時代もあつた。然るに生産關係の經濟的技術的變化は石炭を絶對的に必要とするに至り、之と關連して地表の經濟地域に著しき變化を生じたるが如きも、石炭の存在は前提であり潜在力たるに止り、人間の創造力又はその總和たる社會關係によつて初めて地域的個性は形成される。かくの如く經濟地理學が地表空間の地域的個性を經濟的文化現象の顯現として研究するならば、その構成要素たる人間の文化創造力と自然の潜在力との意義、兩者の連關を研究する事が主たる任務となりうるのである。地人相關論の如きはかゝる問題を中心として發生したのである。地人相關論は自然を寧ろ絶對的優位においてゐるのであるが、之は經濟地理學の主たる任務といふ事は出来ない。自然の力が潜在的なるが故に文化は發展して已まない、即ち人間の力が大となればなる程、自然の力が増大するのであり、又かくてこそ、人間は不斷の努力によつて自然の力を利用發現せ

是の初めは地人相關論の間の文化創造力と自然の潜在力との意義、兩者の連關を研究する事が主たる任務となりうるのである。地人相關論の如きはかゝる問題を中心として發生したのである。地人相關論は自然を寧ろ絶對的優位においてゐるのであるが、之は經濟地理學の主たる任務といふ事は出来ない。自然の力が潜在的なるが故に文化は發展して已まない、即ち人間の力が大となればなる程、自然の力が増大するのであり、又かくてこそ、人間は不斷の努力によつて自然の力を利用發現せ

んとするのである。自然の力が單なる自然的所與にすぎないならば、人間の文化創造力は一定の限度に於て停止するか、或は滅亡せざるを得ぬであらう。故に文化が發展するに従て自然に關する社會の關心は増大するのであつて、人間が如何に進歩するも自然より解放される事は無い。併し解放されないとはいふ事は、人間の力が微弱なるが故ではなく、却て強大となるからである。それは最近に於ける世界の狀態を見るも文化、技術の著しき發達を遂げ、社會機構の變化に伴ふ合理的再編成の行はるるに従て、益々自然に關する認識、その利用發現の必要度を増し、地理學特に經濟地理學の重要性の加つた事實に徴するも、この間の事情を察しうるであらう。若し人類社會の文化力が、その社會の必要とするに足るだけの自然的潜在力を利用發現し得ざるに至れば、その民族は乃ち衰滅の運命に逢着するであらう。歴史上に於て頗る高度の文化を有したる諸民族が、今日跡形もなく滅亡し去つた事實に就いては種々の説明の仕方があるが、自然的潜在力發現の文化力が、人類社會の必要に適合し得なくなつた事を以て最も重要な原因の一と見るべきである。一定の社會の文化力が自然の潜在力を社會の必要な丈け利用發現し得ない時には人類はその文化力の相對的に微弱となれる事を悟らすして、先づその責を社會組織に歸するを常とする。故に社會鬭爭、階級鬭爭がかゝる文化力の衰退期に頻發するの傾

向の存する事は歴史上の事實である。勿論、一定の社會組織は一定の發展階段に達すれば、自然力發現の文化力を束縛する場合があるが、併し社會組織の變革が必しも新社會の發展を齎さざる事實の多く存するは、社會組織の變革が直ちに文化的創造力を増大して自然の潜在力を利用發現し以て社會の必要を充足するに至らないからである。又今日に於て國內の變革を行ひたる國國が却て領土の擴張を計り、資源の獲得に死力をつくせるは、變革に基く國內の文化力の變化、國家的欲望の變化が、最早國內の興へられたる自然的狀態と均衡がとれなくなつたからではあるまいか。

第一 人間の經濟的創造力と自然の潜在力との聯關

イ 人間の經濟的創造力

地域的個性それ自身を孤立的に觀察する時は、一定地域に居住する人種又は民族の文化創造力と、之が限界をなす自然の潜在力との聯關、結合として把握する事が出来る。この場合、居住者は興へられたるものとし、一定の時代を限り流離しないものと假定し、この假定の下に居住者の經濟的欲望を量質の方面より、即ち種類、程度を研究し、この經濟的欲望とその充足の

諸手段、換言すれば人間の創造せる組織、技術、方法の地理的分布が問題となる。如何に客觀的絶對的に有利なる自然的關係に在るも、人間が之を利用發現する丈けの能力、文化創造力を有しなければ、それは何等の經濟的意味をもち得ない。而してこの文化創造力は或る程度に自然的關係によつて制約されるけれども、人間の欲望と意思、その充足と遂行は興へられたる地域の自然的關係を超越する事がある。茲に他の地域との聯關を生ずるのであるが、この事は後に述ぶるが如くである。又人間が文化創造力によつて所興の自然の制約の下に完成したる文化はその存續が一定の自然的條件を必要とするが、而かも自然より獨立したる所興として一定地域の個性の重要な構造條件である。かくの如き文化的條件は年月を経るに従ひそれ自身の變質により、又はその自然的條件の變化によつて構造條件たるの意義を失ふ事があるが、地理學が一定時に於ける現實在を研究する以上は、かかる變化を問題とするの必要はない。

□ 自然の潜在力

自然とは人間の意思と無關係に獨立せる存在である。自然は人間の力によつて或る程度にその形態、配置、性質を變化しうるけれども、之は全く相對的比較的の意味に止り、悠久無限不變の自然よりすれば、その程度は問題ではない。自然的潜在力は地表に内在する凡べての物體、

その物理的化學的作用、更には他の天體との關係より生ずる諸現象をも包含するのである。神學的自然觀よりすれば凡べての森羅萬象は人間の活動に對して意味なきものはない事となるのであるが、併し人間が一定の欲望を有ち、一定の意思と目的とを以てその欲望充足を計らんとするならば、凡べての自然が積極的能動的に好都合のものではなく、その行動を阻害し、文化の發展を不可能ならしむる場合がある。又その文化狀態に應じて或は有要となり或は有害か又は無價値無關係のものとなる、經濟地理學は自然の意味又は諸關係を流轉變化の過程によつて研究するのではなく、一定の文化狀態に於て、又自然自身を不變の狀態に於て、經濟的文化の構造條件として觀察する。從て積極的建設的潜在力たる自然現象と否定的破壞的潜在力たるものに區別する事が出来る。

第二 地域的個性の統一的考察

地域的個性は右の如く夫れ自身のもつ諸現象、換言すれば地域的構造要素と構造條件との複合に由て形成されるのであるが、併し個性の眞の意味の把握は自己それ自體では理解出来ないのであつて、他ありての自己であり、全體と關聯せしめての個體であるから、地域的個性は常

に地的統一として考察さるべきものである事は已に屢々述べたる所である。從來の地理學が或は景觀論として、或は地人相關論として、更には地域論、地理的因果論として論ぜられて居るが、之は時空を超越したる一般的抽象論に墮し、或は孤立せる部分的地誌論に陥るの弊があつた。地域的個性を全體的地的統一として見る時に、地理學固有の根本概念たる空間的分布が意義を有するのである。從來の分布なる概念は單なる配置、點在としのみ考へられ、地表に擴り行く過程、展開的推擴の過程、更に各地域の構造聯關として考察されなかつた。經濟現象の分布が一定地域の個性を形成するといふのは、空より夕立が降つて、ある所には多く降り、他の所には少量に降つたといふが如き偶然的分布ではなく、人間の意思によつて地表に一定の經濟現象が押し擴げられ、而かもそれは構造的聯關を有するものであつて、恰も一定の敷物を推し展べたる場合に、その模様、凹凸、色彩等は異なるが、併し一の統一された一體であるのと同である。經濟地域はその個性を發揮すればする程、夫れ自身孤立して存立し得なくなるのであるから、一定地域が發達すれば必ずや他の地域と連繫せざるを得なくなる。古代社會に於て血縁團體が孤立的に存在し、互に相排擊闘争し自給自足の經濟を營みたるに拘はらず、却て交換がこの閉鎖的地域相互間に初めて成立せる事は、個體が單なる個體として存立し得ない所以

を示すものといへよう。かくして各地域が地的統一をなし、相聯關する時は、文化の水準化が行はれて一層緊密なる地的統一を遂げ、それは更に又各地域の個性を尖鋭化する。地域の有機的統一の擴大と共に地方的分業、從て合理的地域の編制の行はるるはかかる事情に因るものである。故に經濟地理學は各經濟地域の統一的考察を一の任務とするものである。

第三 距離の克服

一定の地域は文化的自然的關係によつて限定されて居る。然るに人間の欲望は無限に増進し、その欲望を充足せんとするの心的緊張は人間の知能を發達せしめ、組織、手段を以て、之が緊張の解除をなさんとする。而して人間の地理的認識の發達が他の地域の個性を知らしむるが故に、一定地域の住民は他の地域の文化的自然的力を取り入れ、以てその目的を達成するのである。例へば一國が重工業を營まんとするも自國內には充分なる鐵礦無しとすれば、その豊富な國と平和的又は暴力的手段によりて之を獲得し自國に鑛石を持ち來すか、或はその地に多數の人々が出かけて鐵鋼を生産し、その製品を移入するかの方法をとる。この場合に於ては距離が克服されねばならぬ。距離の克服は人間自身が心理的に之を行ふの必要があり、更に物的手

段によつて空間的并に經濟的に克服されねばならぬ。距離の克服なき時は、地的統一なるものは只觀念的に存するのみにして、實踐的たり得ないのである。地的統一的觀察は距離の克服を前提とし、距離克服の實踐は交通制度、人間及び物資の移動流通過程によつて制約される。交通地理學、人口地理學、商業地理學が經濟地理學の最初の問題となりたるも之がためであらう。地表の經濟的有機的統一の精粗は實に交通制度の發達如何に繫り、從て個々の經濟地域の個性は交通制度の如何によつて或は變化し、或は固定し、種々の形態を呈するのであるから、經濟地理學は距離克服に關する問題を注意しなければならぬ。

第四 經濟的文化の意義を空間的地理的現象に於て 闡明する事を任務とす

經濟地理學は一の科學として存立するのであり、而かも地域の經濟的個性及びその統一的編制の究明そのものを目的とし、それ以外の何物でもあり得ないといへる。哲學的、科學論的にいへば、科學は科學としての科學であり、それ以外のものは任務でもなく、課題でもなく、又目的でもないであらう。併し最初にも述べたるが如く、未だ科學が科學としてのみ存在したる

ためしはないのであつて、その科學的存在夫れ自身が一の重大任務を有するが故にこそ可能である。人間は文化創造の爲めの人間である。文化創造の手段、方法、態度は一定の社會組織又は人生觀社會觀によつて決定せられるであらうが、人間が文化を創造せんとし、從て文化の意義、目的を解明するに非ざれば、人間が文化を創造する事は不可能である。而して文化は一個人によつて創造されるのではなく社會的關係に於てである。社會的關係は又一定の地理的空間的基底を有し、その地理的空間的關係が合理的に編制される時に文化は益々發展するのである。地理的關係の合理的編制は各地域の個性が最大限にその機能を發揮する事を目的とする。故に文化の諸問題は各地域の合理的編制と函數の關係にあるとも云ひ得る。凡べての文化科學は極めて細部に互つて詳密なる研究を遂げつゝあるが、併し結局に於て各科學部門は文化全體の意義、目的の究明を任務とする事は議論の餘地はない。文化科學の一たる經濟地理學も亦然りであつて、只之は經濟現象の空間的分布、或は經濟的文化を空間現象に於て理解し、闡明せんとするものであり、その目的を達成する過程として經濟地域及びその編制が當然に研究對象となるのである。之が即ち他の學問と區別される所以であり、同時に唯一の任務とする所である。經濟地理學は單なる個別科學としてはあり得ないのであつて一般文化科學と關係せしめて初め

てその個性が了解されるのも亦之が爲めである。

以上を以て經濟地理學の本質よりして經濟地理學の任務の大綱を述べたのであるが、この任務を遂行せんとすれば、第一は經濟地域の劃定、第二は地域の構造、第三は之等の地域が如何にして編制されるか、この三問題を究明しなければならぬ。

第三章 經濟地理學の分類と領域

經濟地理學はその研究對象の複雑性と、研究者が或は自然科学者たり或は經濟學者、歴史學者たるの故に、その分類及び研究領域につきて諸説未だ歸一する所なく、初學者をして全くその趣く所に惑はしむる状態にある。例へば佐藤弘氏の著「經濟地理學概論」に列挙するもののみによるも經濟地理學に關し如何に多くの見解が對立せるか、從て經濟地理學が體系的に未完成的の域に在り、雜然たる内容のものである事が想像される。之も結局する所、經濟地理學の本質、任務に關する科學方法論の貧困に因由するのである。本書に於ては先に定めたる定義及び任務に即應して、經濟地理學の分類及び領域を限定しようと思ふ。

第一節 經濟地理學の分類

屢々述べたるが如く、經濟地理學は地域の個性を經濟的空間現象の分布形態の綜合として究

明し、更に之を地的統一に於て把握せんとするものであるが、この經濟的現象は凡ゆる經濟活動の表現なるが故に之が理解には先づ分析的個別的考察を必要とする。而して經濟的文化といへるが如き有機的統一組織を分析的個別的に觀察する事は事實上頗る困難にして、その分類、分析は自然科学に於けるが如く絶對的ではあり得ないのである。

第一の分類は、各地域の經濟的特性を綜合的に研究し、更に之を地的統一に於て比較研究するか、特殊の限られたる現象のみによつて地域の個性化をなし、その相互的比較をなさんとするかに因て、一般(又は統合、綜合)經濟地理學と特殊(個別)經濟地理學とに分つものである。而して一般經濟地理學は最初より大觀的統一的に研究する事は出來ないのであつて、特殊經濟地理學の完成を前提とするものである。又特殊經濟地理學は一般經濟地理學との關係に於て充分に理解しうるものなるが故に、一般經濟地理學は寧ろ特殊地理學研究の指導者であり、規範となるべきものである。一般經濟地理學を特殊經濟地理學と離れて存立せしめんとするならば、經濟と自然との相關關係或は交互作用のみを研究對象とし又は指導原理とするか、或はその他の單一なる地理的原理によるか、或は經濟的文化の空間的本質によるか、何れにするも、地表の經濟的個性の形成される所以を演繹論的に説明するの外なく、從て時空を超越し、形而下の

學たるの地位を脱して自然觀、哲學觀となるであらう。故に一般經濟地理學なるものは概念的に分類しうるに止り、現實に之を組織化する事は困難である。世に一般經濟地理學と稱するものは、各種の特殊經濟地理學を機械的に収録してゐるにすぎない。

特殊地理學は經濟現象の分類に應じて形成されるのであつて、生産地理學 (Produktionsgeographie) 消費地理學 (Konsumtionsgeo.) 聚落地理學 (Siedlungsgeo.) 交通地理學 (Verkehrsgeo.) に大別する事を得べく、更に産業形態、現象形態によつて種々に細分する事が出来る。今之を圖表的に示せば大體次の如くである。



右の分類は勿論凡べてのものを餘す所なく網羅して居るわけではないが、之によつて殆ど各特殊地理學は包含されてゐると思ふ。而して之は更に細分化しうるのであつて、例へば農業地理學は更に米麥作農業、園藝的農業、特用作物農業につきての經濟地理學もあり、その他何れも細分化しうるのである。從て農業地理學は一般經濟地理學に對しては特殊地理學なるも、米麥作農業地理に對しては一般的地理學といふ事が出来るのであつて、一般特殊の關係は全く相對的問題である。又從來の慣例に従へば聚落地理學、交通地理學は經濟地理學と對立せるものとして取り扱はれたが、之はその成立の歴史から來たのであつて、本質的には經濟地理學の特殊部門とするを至當と思ふ。聚落は經濟活動の主體たる人間の空間的社會結合關係を示すものにして多分に社會學的性質を有するけれども、生産と消費との連結點であり、その反映であつて、地域的個性を最も具體的に表現するものといふ事が出来る。即ち住居の様式、集合形態、

人口の密度等は生産形態、消費形態と密接不可離の關係に在るが故に、正に經濟地理學に屬すべきものである。更に流通地理學の一部門たる交通地理學の對象たる交通制度は、經濟地域の有機的統一聯關の手段であつて、地域的に經濟的目的を達するものであり、又夫れ自身に於ても独自の經濟的理論が存するものであつて、經濟的原理を無視する交通は有り得ない。軍事上の交通と雖も經濟と自然とを超越してゐるのではない。實に交通は地域的個性の形成に對して大なる意義を有するものにして之れ亦經濟地理學の一部門に屬する。商業地理學は生産されたるものを人的、空間的、時間的に配給するの營利企業たる商業の地理學的研究をなすものにして、かかる經濟機構の存續する限りは一の學問として存立しうるのであるが、併し乍ら資本主義が變質し營利企業、特に他人の生産したるものを賣買する事によつて利潤を獲得せんとする企業形態は次第に存續し得なくなるのであるから、商業地理學はその前提條件を失ひ自ら消滅するであらう。併し各地域によつてその生産と消費との關係は異なるが故に、この地域的差異、過不足の水準化を行はなければ一の經濟統一體は圓滿なる運行が出来ず、從て文化の發展は期し難い。この任務を遂行するの機關、制度は勿論必要であつて、商業に代つて新しき統一的配給關係を生ずる事は言を俟たぬ。この意味に於て從來の商品地理學も、商品といへる營利の對

象物がなくなり、社會全體の必需品としての財貨、物産のみが經濟社會の關心物となるが故に、商品地理學は物産地理學に移行するであらう。消費地理學は未だ充分なる發達を遂げてゐないが、經濟活動、生産の出發點、動機、促進力となり、同時にその終末點をなすものは消費であるから、消費の地理的研究は最も必要なものである。消費そのものを直接に研究する事は頗る困難にして、今日の所では、自然特に氣候が消費に及ぼす影響、貨物の配給量又は種類、品質によつて消費の地理的分布關係を明にするに止つてゐる。併し將來地理的編制の問題が重要性を有するに至れば、各地域の消費上の特殊性の研究は重要な意義を有するであらう。

第二の分類は地域の廣狹に由るものである。經濟地理學が、地表の地域的個性并に地域編制を研究するものであるから、一定の方法によつて先づ地域が劃定されなければならぬ。その地域劃定は如何なる範圍につきて行はるべきかは、研究目的に依て異なるものにして、或は地表全體に互りて地域を劃定する事もあり、或は西洋、東洋、或は東半球、西半球といへるが如き地表につきて地域劃定をなす事もあり、更には一國家につきて之を行ふ事もある。而してこの地域劃定は地的統一、特に經濟的有機的統一を前提とするものなるが故に、種々の點より見て眞の統一的聯關を有せざる地表空間につきて地域を劃定する事は無意味であり、單に機械的比較

をなしうるに止るが故に、多くは一の國民經濟地域につきて地域劃定をなすのが最も適當である。殊に近時の如く世界各國が孤立的排他的自給自足主義によつて經濟を營むに及びては、經濟的地的統一の聯關を失つたのであるから、地表全體に互る地域劃定の意味が著しく變化した譯である。併し一方に於てブロック的考へが盛となり、自然的、社會的、文化的、經濟的に共通の關係に在る諸國がブロック的地域を形成するの勢が強まりつゝあるので、ブロック地域と之が構成部分たる一地域としての國家と國家との關係、更に一のブロック地域と他の夫れとの關係に於ての世界的觀察が、新しく地理學の問題となるべく、從て亦經濟地理學に於ても之が研究上の主要課題となるであらう。何れにするも地表全體に互りて地域の劃定をなし、その地域的個性を經濟地理學的に研究するものが全體的經濟地理學であり、之に對して東洋、西洋といへる地域、ブロック地域、國民經濟地域につきて研究するものは部分的經濟地理學である。而して部分的經濟地理學が更に一層廣汎なる地域の經濟地理學との聯關に於て理解さるべきである事、換言すれば兩者が類と種との關係に於て研究せらるべきである事は、一般性と特殊性の關係に於ける理論に徴して言を俟たざる所である。

第三の分類は前の二者を交錯せしめたるものにして、即ち地域の廣狹と經濟形態とを併せ用ひるのである。例へば世界農業地理學、東亞農業地理學、日本農業地理學といふが如き分類である。

第二節 經濟地理學の領域

經濟地理學が地域的個性の經濟的特殊性、從て地域編制の合理化如何を研究するものとするれば、そこに顯現する自然的現象と文化的特に經濟的現象の分析、綜合によつて、その目的に到達しうるのである。經濟地理學は僅少の前提假設より特定地域の演繹的説明をなす事を以て満足するものではない。從て經濟地理學は多くの科學の研究結果に俟たねばならぬ。併し乍ら如何に諸科學と密接の關係を有し、直接間接に研究手段として、又研究對象として取り入れられてゐようとも、概念的には明確に分離區別さるべく、經濟地理學それ自身の一部をなすものに非ざる事は言ふ迄もない。先にも述べたるが如く、同一の現象を研究するもその研究方法によつて夫々獨立の科學たり得るのであつて、苟も經濟地理學が一個獨立の科學たる以上、單にその研究對象が共通してゐるとか、研究上の補助手段として必要であるとかの理由を以て、經濟

地理學の領域に取り入れるが如きは、經濟地理學の統一性を失はしめ、自ら知識の雜炊的集合體たらしめ、從てその科學性を否定するものといはねばならぬ。故に經濟地理學の研究にとりて必要なる諸科學はその研究成果が充分にして且つ正當なる事を一應の前提としてゐるのであるが、併し之は經濟地理學との中間領域でもなく、又限界科學でもない。而して苟も地表に顯現する諸現象に關する科學は何れも經濟地理學の研究に必要なならざるものはないが、併し經濟地理學が固有の方法と任務とを以て研究される以上は、その關係の粗密の存するは言を俟たない。今、之なくしては經濟地理學の成立を不可能ならしむるが如き重要なる關係諸學科につきて概説しよう。

第一 一般經濟學

經濟學が經濟現象又は經濟秩序を研究對象とする點に於ては經濟地理學と同一であるが、經濟學は經濟現象を時空を超越して組織論的抽象的に研究し、從て演繹的である。この點經濟史や經濟地理學と異なる。經濟現象を一定地域に於ける地理的分布形態として研究する場合には、經濟の本質よりしてそれらの現象が如何なる前提の下に一定の形態をとるべきかの演繹的理解

を必要とするのであつて、若し一般經濟學の理論なくんば、個々の經濟地域の個性が由て以て形成せらるる所以は説明出來ないのである。例へばある地域に多數の重工業が集中して顯著なる重工業地域を形成せるに、之に近接せる他の地域は化學工業地域を形成せる場合に、只その地域に分布せる自然的歴史的事實のみを如何に詳密に記述するも、特殊なる經濟地域の形成されたる理由、之と反對に他の地域に何故に之なきかの理由の説明は出來ない。一定地域の自然的歴史的事實の記述、研究の外に、夫々の經濟秩序の本質よりする演繹的理論が必ず對應してゐなければならぬ。この經濟學純理論を前提として初めて地域的個性に關する説明、その經濟的地域統一體に對する關係の闡明が可能であり、かくて經濟地理學的理論が構成されるのである。故に經濟地理學に對して第一義的に密接の關係を有するものは一般經濟學である。

第二 經濟史との關係

經濟史は經濟現象の時間的垂直的發展的研究をなし、經濟地理學はその空間的平面的分布的研究をなすものと稱せられる。この兩者は縦と横との關係であり、經と緯との關係である。靜止せる經濟史は經濟地理であり、流動する經濟地理學は經濟史である。經濟地理學は一定の時

期に於ける一定地域の經濟的個性を研究するのであるが、實はその個性こそ人間の歴史的文化的所産に外ならぬ。自然が文化に影響し、又文化が自然を開拓するといふが、その両者が如何なる點に於て又如何なる程度に於て影響するものなりやは、抽象的演繹的には論證し得ないのであつて、各地域につき長き時間に互りて歴史的に考察し歸納するの外はないのである。固より時間の概念は經濟地理學の範疇に入り得ないものであるが、地域的個性の形成過程を説明する上には、之なくては殆ど不可能といはねばならぬ。經濟史的研究を前提とせざる經濟地理學は、地域的個性を生命なき自然物として取り扱はざるを得ぬ。

第三 統計學との關係

經濟地理學を經濟學の一部門として見れば、經濟統計學と共に現象論的經濟學に屬するものと稱せられる。統計學は諸現象の大量觀察によつてその常例の發見を任務とするものにして、時間と空間と兩方面より之を行ふものである。例へば全く自然現象たる氣候の統計を見るに一定の氣象を一定の地域につき一定の期間に互りて觀察するものであつて、時空を超越したる氣候統計はあり得ない。況や社會統計、經濟統計は社會現象、經濟現象を時間と空間に關係せし

めて大量觀察をなすものなるが故に、地域的個性の經濟的特徴を示すには經濟統計が最も具體的且つ正確である。經濟統計は各地域に於ける經濟現象の常例を發見し、傾向、類型を把握するに最も好都合のものである。統計的常例は必しも絶對的ではないが、今日の狀態に於ては之に優るものはない。經濟統計の利用によつて經濟地理學は明確に各地域の個性を比較研究する事が出來、又單なる記述の學より、傾向、類型の法則定立の學たらしむる事が出來る。殊に經濟地域の特徴を地圖の上に表示してその一般的關係を大觀せんとすれば、經濟統計に俟つの外はない。最近に於ける經濟地理學の發達は實に經濟統計の力に負ふところ大である。

第四 人文地理學との關係

人文地理學を獨立の地理學とするにつきては種々の議論があり、所謂地理學一元論者は之を否定してゐる。蓋し所謂人文地理學は自然と文化との相互作用の研究を以てその本質とし任務としたからである。若し人文地理學をかく解するならば、之は地理學一般の研究の一手段にすぎないから、その獨自性が否定されても止むを得ぬであらう。併し余の方法論の立場よりすれば、文化一般の地理的分布現象によつて地域的個性の文化的特徴を研究するものなるが故に、

經濟地理學も亦人文地理學の一部門をなすものといはねばならぬ。かかる人文地理學は、科學、技術、思想、宗教、教育、法制、社會等凡そ文化的所産の各方面に互りてその地理學的研究をなすものにして、經濟は凡ゆる面に於て之等の文化領域に密接するものである。從て經濟地理學は人文地理學の研究に俟つ所極めて大である。

第五 自然地理學との關係

自然が經濟活動の基礎的條件であり、その限界を規定するものである事は茲に絮説する迄もない。換言すれば經濟活動は自然の存在を前提とし、自然の複合現象としての地表空間を舞臺とするが故に、自然を單なる自然として研究するといふ自然科學も、實はその文化的意義、作用を豫想して居るのである。殊に自然地理學と人文地理學とを一元的に考察せんとするもの總て然り。今日地表の如何なる所も人間が居住し、又は之を利用してゐるのであつて、純粹なる自然状態はあり得ないから、自然地理學はかゝる文化的影響によつてその研究上に純粹性を保持する事難く、普遍化して價值關係を没却する事は觀念的にのみ可能である。併し乍ら動植物、水界、氣候、地質、地形、天體との關係は夫れ自身自然的變化、特質を以て地表に顯現せる事

は之れ亦現實在であるから、その地表的分布が一定地域の特徴を形成する所以を具體的に思惟することが可能である。茲に自然地理學が成立しうるのである。かかる意味の自然地理學が經濟地理學に豊富なる内容と材料とを供與する最も重要な學問である事は云ふ迄もないが、併し從來自然地理學の研究對象とされしものが、他の獨立の科學によつて研究されるやうになり、自然地理學はそれ等の研究成果を綜合して自己の體系を形成するが如き觀を呈するに至つた。即ち地形學、海洋學、水系學、氣候學、植物地理學、動物地理學、地質學、地圖學、測地學、天文數理地理學、地球物理學等が著しく發達した。自然地理學は、固より之等の諸科學に俟つべきものではあるが、併し地表空間の地域的特殊性を自然現象の地理的分布の立場より研究する限りは、完全なる獨立科學である。人文地理學又は經濟地理學は方法論的には之と全く異なる範疇に屬するけれども、初めにも述べたるが如く、地表空間が人間活動の限界、基礎であり、舞臺であり、且つその上に展開分布される文化現象、經濟現象に於て地域的個性を研究するものなるが故に、自然地理學との關係は密接不可離であり、更に諸他の地表現象を研究する科學の力を借らなければ、經濟地理學の研究は不可能といふべきである。

如何なる科學と雖も他の科學と全然離れて研究する事は出來ず、他の科學に通曉し、その研

究成果、方法を援用する時に科學研究は優秀のものとなりうる。一の個別科學は全科學體系との關係を大觀する時に全きものとなる。併し一の科學が他の科學と密接の關係があるといふもその程度は必しも同一ではない。例へば經濟學は人間生活に最も重要な經濟現象を研究するのであるが、而かも人間一般に關し、且つ時空を離れてそれは在り得ないのであるからとて、その研究に歴史的、地理學的方法が表見的に現されるかといふに然らず、之等の知識は潜在的豫件たるに止り、若し之を表見的に取り扱ふならば、經濟學は知識の雜炊的集合體と化すであらう。經濟地理學は前項に於てその聯關する部門の如何に多く且つ密接なる關係の存するかを述べたが、併し乍ら之は經濟地理學が複雑多様な潜在的豫件を必要とするといふ特殊事情より由來するのであつて、經濟地理學はどこまでも獨自の研究方法によつてその存立を確保しなければならぬ。自然現象、文化現象に關する知識、又はその研究成果を機械的羅列的に自己に包攝すべきものではない。經濟地理學の研究領域は極めて廣範圍に互るけれども、之は一に地域的個性の究明といへる地理學的方法によつて、經濟的地的統一に於て研究さるべきものである。

第二編 經濟地理學研究方法論

第一章 經濟地理學の研究に於ける指導原理

經濟地理學が如何なる研究方法によるべきかの問題は、經濟地理學の本質並に任務を如何に見るべきに依て決定せられる。已述の如く地理學、從て經濟地理學に關しては種々の議論の存する所にして、その研究方法論につきても種々の指導原理が主張されて居る。この指導原理は實に經濟地理學研究の實踐的作業的方法の指導者、促進者であり、コンパスであるから、その如何によつて研究の方向、その歸着點は全く異なるものたらざるを得ぬ。故に地理學的認識の變遷を述ぶるに方りて一般的傾向を略記したが、更に本章に於て、多くの指導原理の中の主なものにつき類別的に少しく詳述するであらう。

第一節 自然本位論

之は自然が人間の文化活動、從て經濟活動に對して絶對的決定力を有すとするもの、或は人

間は自然の中に包攝され人間の活動即ち自然なりとし、人間と自然とを一體の如く考へるもの、或は少くとも自然が人間活動の絶対條件であつて、人間は自己の文化力によつてその目的に適合するが如く變改し、利用發現するけれども、自然の限界を越ゆる事は出来ないとするもの等であつて、何れも、自然の力を第一義的絶対的に考へる。即ち人間の活動、文化現象、經濟現象の研究を重要視せず、自然現象の研究を主とし、その人間に及ぼす影響を演繹論的に説明し、或は歴史的事實によつて之を證明しようとする。この考方は一元的に地表に於ける人間活動を見る事となり、一見理論一貫せるが如きも、往々にして時空を超越したる抽象論となり、或は哲學論、地學的歴史觀となるの傾向がある。

第一環 境論 (Milieutheorie)

人間の活動がその周囲の自然的環境によつて影響され、從てその文化、經濟の發達程度、形態等が之によつて決定されるとなす思想は極めて古くより存在する所にして、已にギリシヤの學者も、之に關して断片的ではあるが屢々論じてゐる。その初めて系統的に考察したるものは佛國の天則學派である。天則學派はその原語 Physiocrate の示すが如く、自然の法則に遵ふべ

ミリエウテリス、
ミリエウテリスの初め

き事を學問の指導原理となす一派であるから、先づ第一に「自然の秩序」(ordre naturel)を學問の出發點とし、從て自然が絶対的に人間の活動を支配し、その前提なりと考へ、自然の力を利用發現するものこそ眞の生産なるが故に、農業のみ眞の生産、「純生産」(Produit net)をなすとさへ考へた。この思想はケネー (François Quesnay 1694—1774) により提唱され、チュルノー (A. R. J. Turgot 1727—81) によつて大成された。而して天則學派の自然的環境論は當時の凡ゆる學問に影響し、政治學經濟學に及ぼしたる所は頗る大である。當時佛國に留學せしアダム・スミスの如きは全くその理論を展開して經濟學に用ひたものであり、モンテスキューも亦之と同じ思想を以て政治學を樹立し、環境論を完成し、恰も環境論の父の如く考へらるゝに至つた。フォンボルト、リッターが環境論者であることは已に述べた通りである。その後多くの環境論者を出し、地理學者は殆ど之に屬するの有様であつたが、環境論を地理學的に集大成したのはラッチェルである。ラッチェルは、人間文化は自然的環境の産物であり、その函數であるかの如く論じ、多くの事例によつて之を證明したが、同時に人間が或る程度に自然に手工を加へ反作用をなすものとし、一種の地人相關、交互作用の理論を説いたのである。今日に於ては自然的環境の絶対性を主張するものは極めて少くなつたが、自然地理學者の間には尙ほ自然

の強力性を以て地理學の根本思想とするものがあり、殊に外界の物資の調達を中心とする經濟に關する地理學的研究に於ては自然本位の立場より研究するものが少くない。少くとも環境論を最も重要な經濟地理學の課題とするの風潮は今日尙ほ盛んである。併し前にも述べたるが如く環境論はどこ迄も經濟地理學研究上の重要な一手段であり、參考方法といふべく、經濟地理學の研究の全部ではない。

第二 相 關 論 (Wechselwirkungstheorie)

相關論は相關關係論、交替作用論、交互影響論の義である。相關論は環境論の展開されたものであつて、自然的環境は人間の活動に影響を與へ、之を限定し又は促進するものであるが、併し人間は文化創造力を有するが故に、單に自然に絶對的服従をなすといふが如き消極的なものではなく、一定の手段、組織によつて自然に對して反作用を加へ、以て自然の力を有効に文化的目的達成の爲めに利用發現するものである。即ち先づ第一に自然又は自然的環境は人間に影響を與へ、人間は更に自然に影響を與へ、かくて人間文化は向上發展するものであつて、この相關關係の研究こそ地理學の指導的研究方法であるといふ。從て經濟地理學は自然と經濟と

經濟地理學の相關關係を研究するものとなる。相關的研究方法は最近の經濟地理學者は多少の程度の差は
あるが、殆ど之を用ふるものの如くである。併し乍ら相關論につきましては論議すべき多くの問題
がある。相關作用たる以上、兩者が同位的に積極的に作用し合ふといふ事を前提としなければ
ならぬ。一方が消極的受働的であり、他方が積極的能働的なるが如き關係に於ては相關論は成
り立ち得ない。然るに自然と人間とを對立して見るに、自然もある程度に能働性を有するが、
併し自然の本質は潜在力として、或は條件として受働的存在たる點にある。之に反し人間はそ
の文化創造力によつて自然の條件の下に於て、その潜在力を發現利用して無限の文化的創造を
なすといふ積極的能働的である。この性質の異なる者との關係が果して相關關係といひうる
か否か疑問である。單なる假設であり、想像にすぎないとも考へられる。又若し兩者が積極的
に作用し合ひ、相關的交互關係に在りと假定するも、之は常に時間的動的に考へられねばなら
ぬ。靜止したる所に於ては作用反作用は考へ得べからざる所である。相關關係は常に動的立場
に於てのみ理解しうるのである。茲に於て從來の相關論は、一方の作用を見る時には他方を靜
止の状態に在りと假定してゐるが、果してかゝる研究方法が正しいか。又交互的影響は短時間
では測定出来るものではなく、必ず一定の時間の経過を必要とし、而かも相當に長期に互らさ

れば人間に對する影響の如きは分明しないのである。相關論を地理學の指導原理とすれば、歴史的發展的要素が最も重要性を有する事となり、地理學の本質が見失はれる虞がある。故に相關論は與へられたる地域的個性の形成過程を理解するの必要手段ではあるが、之を以て地理學の、從て經濟地理學の主要なる指導原理とするには種々の疑問を生ずる。尙ほ最後に一言すべきは相關論に於ける**現經濟人 (wirtschaftender Mensch)**の觀念である。相關論者のいふ所によれば、相關作用の一方者たる人間は單なる人間に非ずして、現代に於て高度の經濟を營みつつある人間、即ち現經濟人と解せらるるもの如くである。從て文化の低き人間は相關論の對象と得ずといふ。併し經濟なる概念は極めて廣きものであつて、文化の程度の如何を問はず、而してその内は**馬蹄の蹄**たり得ずといふ。苟も人間である以上は、一定の文化、一定の經濟組織を有するものである。經濟地理學が成立するのには地表が夫々の個性をもち、異質である事を前提として居る。又事實上地表に於て種々の經濟地域、經濟發達階段が分布し展開されて居り、而してその由て來る所以はそこに居住する人間の文化力、經濟的能力の反映であるから、文化の低きものを除きて文化の高きもののみによつて相關關係を明かにする事は不可能であり、凡ゆる文化度の人民と自然との相關作用を比較研究して初めて相關作用が如何なる點に於て、又如何なる程度に於て行はるか理解すべきである。

れるのである。故に相關論に於て現經濟人の觀念を用ふる事は、夫れ自身相關論を否定するの結果となり、極めて限られたる範圍につきての議論にすぎなくなるであらう。少くとも現經濟人的見方は歐米人のみが眞の文化民族であり、そのもつ所の經濟のみが正常なる經濟なりとする謬想より來れる過誤と自惚であつて科學的ではない。

第三 地人一體論

前二説は自然と人間とを主從的にか又は對立的に考察する事より出發するものであるが、この議論は自然を優位におき乍らも、何れも自然と人間とを別個の範疇として取り扱つてゐる。然るに悠久無限の大自然と、うたかたの如く且つ生じ且つ消ゆる人間、その創造せる文化とを比較して見れば、如何にも人間は微力であり、泡沫的存在たるにすぎぬかを痛感するであらう。茲に於て古來多くの宗教は自然を神の創造物と見、人間も亦その自然的無限の系列の一點にすぎずと觀じ、自然即ち人間とするの思想は古今東西に存する所である。故にかくの如き宗教觀の行はるる場合には地理學は發達しない。かの中世に於て地理學が衰退したのはかかる宗教觀が廣く行はれた結果である。その後、地理學は著しく發達したが、尙ほ神學的社會觀、自然觀

は根強く地理學者を支配し、人文地理學の祖といはるるリッターの如きも獨特の人間觀、自然觀を有し、自然と人間との完全なる分離に至らなかつた。かくの如き宗教觀による地人一體論の外に、最近に至り唯物論的立場よりして人間が終に自然の一部たるにすぎず、從て地表の地域的個性、或は經濟現象は人間と自然との一體としての現象にすぎずとなし、自然と文化、自然と經濟とを一體不可分的に研究せんとする一派を生じた。それは多くマルキシズムの見解に立つものにして、その代表的なるものはウィットフォージェル (K. A. Wittfogel) にして、彼は人間を以て特殊なる自然物、生物であるとなし、從て自然は人間に對して、動物に對すると同様に、生活發展を規定する契機にすぎずと考へ、更に人間は肉と血と腦髓とを以て自然に屬し、自然の一部である。人間はそれ自體、自然力であり、自然物であり、生ける自覺的存在として能動的能力を發展せしめうる動物界に屬す。故に人間は自由に自然から解放される事は出來ぬといふ。從て彼は自然と人間とを不可分一體と考へ、自然と人間との統一體としての地球を概念的に構成し、之による唯物論的に地理學を研究しようとした。地人一體論的研究方法は、宗教的神學觀によるものも、亦マルクスの唯物論によるものも、地理統一といふ立場よりすれば一應考慮すべきものであるが、個々の經濟地域の個性の究明には頗る縁遠き觀がある。

第二節 人間本位論

最近に於ける科學及び技術の發達は、從來何人も利用せずして放置されたる自然的物資を前代未曾有の方法によつて凡ゆる方面に活用し、又人間活動に對して妨害となるか或は不利なりとせられたる地形地質を有する地域に於ても新なる生活形態が創始されるなど、古き自然觀の如きは全く現實の地表現象を説明する事が出來なくなつた。茲に於て外在の自然的狀態なるものは單に潜在力として消極的に存在するにすぎず、夫れ自身は何等の意味のないものであつて、人間の力を使つて初めてその潜在力が發現され現實力となる。換言すれば人間の創造力こそ第一義的であるとし、從て地表に分布する人間の性情、能力、人口關係、文化一般等の研究を経濟地理學の主要問題とする。古來多くの宗教家、哲學者は認識論の立場より、人間あつて物の存在があると考へ、この思想は今日尙ほ最も有力且つ一般的に行はるる所である。人間の經濟活動は一定の物資、一定の自然的條件を必要とする事は言を俟たないが、その條件の存する事は直ちに經濟活動をなさしむるものではなく、少くとも經濟地理學の研究主題たる地域的個性

は、地表の異質性に對して、そこに居住する人間能力の凡ゆる關係の異質性によつて決定せらるるものであり、又地表には人間の文化と無關係に在る眞の自然的狀態なるものは殆ど存在しないのであつて、それは全く研究上の假定にすぎぬ。故に最近に於ては自然を經濟活動の必要條件とは見るが、それは當然の所與として豫定され、その上に人間の力を第一義的に研究して經濟地理學の闡明をなさんとするものが少くない。

人間本位の立場より研究せんとする地理學者の代表的なものはバンゼ (E. Banse) である。バンゼは自然を無視するものではないけれども、人間の力を主とし、自然を従としてゐる。從て地理學の藝術性を高調し、實體の直觀を以て地理學の根幹とした。即ち多種多様な地理的對象の統一的結合の手段を藝術の中に見出さんとし、藝術のみが科學的地理學をして「死せる貯藏所を變じて生命にあふれ、花咲き亂れたる花園となしうるのであり、又蒐集の狀態を克服し、脱却せしむるものである」と説く。從て自然的に制約されたる景觀より出發して文化に關係されたる個性に至ること、自然的所與の理解より出發してこの所與の上に打ち立てられたる文化の特徴を把握する事を以て地理學研究を可能ならしむるの道であるといふ。

最近に於ける相關論者、交互作用論者の説も人間の文化力を主とするの傾向が著しくなつた。

併し人間の文化力を主とし又は人間の文化力、勞働力、勞働の契機としての經濟的欲望、經濟的效果、更にはその時間的影響等を重要視するに於ては、も早嚴密なる意味の相關論、交替作用論とは云ひ難く、從てディートリッヒ (B. Dietrich) の如きは交替作用論を最も理論的系統的に説明して居るが、それは却て交替作用論より逸脱したるかの觀がある。我國に於てもディートリッヒの説は最も廣く行はれ、主要なる經濟地理學者は多く彼の公式論を套襲しつつ相關論を述べてゐるが、之は眞の交替作用論といふ事は出來ず、強ひていへば人間の文化力を主とする新相關論と稱すべきものであらう。

第三節 景觀論 (Landschaftstheorie)

景觀とは獨逸語の *Landschaft* の譯語にして、尙ほ決定的ではないが通説に從て景觀と譯した。地理學上に景觀なる語が特別の意味を以て使用せらるるに至つたのは、地理學が如何なるものを研究對象とすべきかに關連しての一元論の基礎として主張せられたのに初まる。その代表的なものにはシュリューター (Otto Schüter) パッサルゲ (S. Passarge) ブラーシユ (Vidal de

la Brache) ブリュンヌ (I. Brunnes) 等であるが、就中、シュリューターは景觀論に理論的體系を與へ、以て地理學一元論を唱道し、景觀の研究によつて地理學を完成しようとした。更に最近に於てはマウル (Otto Maul) が自然景觀が文化景觀に變化するの過程を研究し、之を以て人文地理學の主要目的であると主張してゐる。景觀の概念は頗る曖昧なものであるが、地表の現實在を直觀的調和體として感覺的に把握したものである。即ち諧調、調和、諧律の關係に於て地表の凡べての現象、營力の結合せる地域の單位を景觀と稱するのであるから、理論的に考察されたる地域統一體ではなく、感覺的藝術的調和體である。從てその研究方法は著しく藝術的であり文學的であつて、地域の單位の無法則的全體敘述を主とし、自らの原理をもち得ないといはれる。景觀の根本要素は感覺的に把握しうるものであるから自然的外形的要素が主となり、歴史、社會の如き文化的實質的要素は單なる豫想にすぎず、現實的に研究し得ない結果となり、形態學に墮するの傾向がある。故に景觀論はそのまゝ人文地理學、經濟地理學に適用する事は困難であり、又景觀に於ては自然的關係が最も感覺的には顯著に現はれて居るにせよ、完全なる自然景觀、原始景觀なるものは事實上存在し得ないのであるから、マウルの如く、文化景觀なる概念を構成し、之によつて人文地理學、經濟地理學の研究方法たらしめんとするも

のが少くない。併し文化の如き一の統一的概念を以てする時は已に景觀論そのものが動搖せざるを得ぬ。茲に地域論なるものが生れて來るのである。かくの如く景觀論は科學的地理學の方法としては多くの缺陷を有するものではあるが、併し乍ら地表の各部分を調和の景觀として觀察し、實感を敘述し、恰も畫家が印象に映するまゝを表現して事物の個性を高調するか如く記述しようとするのであるから、地理學が成立して以來、多かれ少かれこの研究方法を用ひないものはない。併し地理學が一の科學として地域の個性の論理的構造を研究する以上、かかる方法は一の豫件的又は補助的手法としては必要なものであるが、之を根本的指導原理とする事には多くの異論が存するであらう。

第四節 地域論 (Raumtheorie, Zonentheorie)

前節に述べたる景觀を法則的論理的に統一されたものが地域の統一體である。地域は自然的文化的關係によつて形成されたる地域の個性を表現する空間的擴がりであつて、この個體たる地域が地的に統一されて、世界、國家が存在するのである。故に、地表に分布する諸現象を綜

合し、同一性と異質性とに基きて類概念によつて之を區分し、更に比較研究を遂げ相互關聯に於て地表空間の文化的意義を把握すべきである。地域論又は空間の地域性を以て地理學の根本原理となし、之によつて地理的因果關係を明かにすべきを主張したるものはヘットナー(Hettner)である。彼は凡ゆる方面より地域的區分を説いてゐるが、尙ほ自然を主とし、文化を從にするかの如く思はれ、從て人爲的區分よりも自然的區分を重要視して居る。地域論には尙ほ環境論、景觀論と混淆されたものが少くないが、併し理論的にいふならば、この地域論こそ地理學の研究法の根本をなすものにして、凡べての地理學的研究は之に志向すべきものである。而して經濟地理學に於ては、經濟的地的統一體として空間を認識し、更に之を一定の特徴によつて地域を劃定し、以て之に布置せる諸現象を通じて地域的個性の闡明を旨とすべきであらう。故に地域劃定に關する理論及び方法につきましては他の編に於て詳論するであらう。

第五節 立地論 (Standortslehre)

立地論的見解は斷片的ではあるが古くより存在したる思想である。その根本は凡べて地上に

あるものは夫々存在の理由があり、無用のものは無き筈であつて、その存在の理由、機能を發揮する事によつて世界の運行に参加して居る。その存在の理由を主張し、機能を發揮せんとすれば、その在るべき所に在らねばならぬ。在るべき所になく、在るべからざる所に在るならば、それは存在の理由を失ひ、その全機能を發揮する事能はずして自己否定をなす。かかる見解は多くの宇宙觀、社會觀の中に散見する所である。而してこの事物の見方が學問に取り入れられたる最初のものは林學である。凡べての植物はその地表に於ける分布が一定してゐる。人爲的に之を移植しうるけれども、それは程度の問題であつて、その所を得なければ充分なる結果を齎す事は出来ぬ。若し人爲的移植が成功して植物の繁茂蔓延が盛んであるとするならば、夫れはその植物の本質とその必要とする自然的條件とが偶々一致したからである。即ちその植物をして在るべき所にあらしめたからである。林業は特定の目的に必要な植物を最も有効に育成し、調達せん事を旨とするものである。茲に於て植物特に樹木の本質を研究し、その生成發育に必要な自然的條件、環境を調査し、この兩者を合理的に適合せしむるならば林業の目的を達しうるのであるから、如何なる樹木を如何なる場所に育成すべきかにつきては一定の原理が存する譯である。林學に於ける立地論は即ちかかる原理の研究をなすものである。併し乍ら一

定の樹木の育成上に理想的な環境は現實にはあり得ないのであるが、理論の構成は最も純粹な理想型に於て行ひ更にこの理想に近き所を選びて森林の施業をなすのを常とする。この林學に於ける立地論的方法が最近に至りて經濟學特に工業經濟の方面に應用されるやうになり、今日では立地論といへば工業立地論の如く解せらるゝ有様である。而して工業立地論はアルフレッド・ウェーバー(Alfred Weber)によつて理論化されたのであるが、ウェーバーの立地論的方法はかの有名なるチューネン(Heinrich von Thünen)の孤立國(der isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie)に於て用ひたる孤立的方法を應用したものであつて、直接に林業立地學に影響されて居ない。チューネンの立場は地理學とは反對に、地表空間を全く同質的と見、空間的距離の長短に基きて、生産物の運送費及び生産費との關係よりして耕種式の分布の法則を定立しようとしたのである。經濟的立地論の前提假設は、夫々の經濟部門の本質を究め、之を最も有効に經營するには如何なる條件を必要とするか、換言すれば生産物の生産過程及び配給過程の兩方面より最も原費が少く、從て最も有利に經營しうる場所を探究し、之によつて特定の經濟活動の立地(Standort)決定の通則を發見せんとするのである。今日迄の立地論が極めて抽象的にして地理學的現實から離れたるかの如く見ゆるのはその方法論の必然

的結果である。併し乍ら立地論的方法は之を經濟地理學に適用する事は決して不可能ではないのみならず、却て經濟地理學に對して理論的統一性を與ふるものである。地表空間が一の地域的個性として存在するのは或は全く自然發生的に或は合目的的人爲的に形成されたものであるが、廣汎なる地域が有機的統一體となり得ず、自然的影響が絶大にして文化力の微弱なりし時代には、人間は必しも絶對的な合理主義によつて事物の本質と環境とを適應せしめて活動したわけではない。併し現代の各地域を見るに人間の意思、科學的合理性によつて動かされて居り、意識的に立地論的行動をなして居るのである。地域の個性は單なる自然的產物、自然的景觀ではない。故に經濟地理學は單に「かく在り」といふ事實の説明ではなく、「かくあるべし」との必然性を研究すべきであり、從て正に立地論的方法に由るべしと主張し、更に進んでは經濟地理學は即ち經濟立地學なりとさへ考へらるるに至つた。

立地論的方法を以て經濟地理學の根本的方法なりとし、經濟立地論と經濟地理學を同一視し、又は不可分のものとする見解に對しては、尙ほ多くの議論の存する所であらうが、併し乍ら地表空間が有機的に統一され、所謂地的統一的觀察をなしうるに於ては、立地論的方法が經濟地理學に於て最も有力なる指導原理たる事は何人も否定出來ない。只地理學を以て、從來多く論

議されたるが如き古き性格、本質のものなりとすれば、立地學は全く地理學とは無關係のものであり、又立地學が只時空を超越したる假設によつて、原費優越(Kostenvorteil)のみを抽象的に論じ、現實の地域的個性を離れての理論であるならば、それは經濟地理學と別個の範疇に屬するであらう。併し立地論に於ける假設的抽象論はそれ自體を以て終止するのではなく、更に現實在としての地域につきて具體化して考察し、以て地域的編制の合理化如何を研究するものであるから、從來の如何なる方法論よりも、經濟地理學の研究を理論化し、統一化するには最も好都合のものといふべきである。殊に今日の如く凡べての舊體制が崩壊し始め、新しき原理によつて再編成されつゝあり、而かもそれは國內のみならず、世界全體に互つて新秩序が誕生しつゝある際には、經濟地理學は單に「かくあり」といふ立場より轉じて「かくあらざるべからず」との立場に進みその理論の基礎づけをなさんとすれば、立地論に俟つの外はない。立地論は經濟地理學とは同一視すべからずとするも、少くとも立地論的經濟地理學、經濟地理的立地論なるものが、經濟科學上に於て重要な役割を演ずる事とならう。

以上によつて經濟地理學の研究に於て如何なる指導原理に因るべきかの主なる見解を概説したのであるが、最初にも述べた通り、夫々の指導原理、之に基く研究方法はその地理學の本質、

任務に關する見解によつて規定されるのである。併し地理學が地理學たる限り、所謂「地理學的」方法によるべきは言を俟たぬ。之に由らざるば地理學の獨立性を否定する事となるが、併し地理學の研究對象たる地域は常に變化するのであり、又その研究の關心、重點も變化するのであるから、之に即應して研究上の指導原理も亦推移する事は争はれぬ所である。今日尙ほ環境論、相關論、景觀論、地域論、立地論等が對立して方法論的論争をなして居るが、併し個々の理論も夫れ自身漸次變質しつゝある。而して現下の狀勢よりすれば地域論と立地論とが最も重要な地位を占むるものと云ふ事が出來よう。只この二つの方法論はその立場が著しく異なるものであるが、前者は一定の經濟空間をその保有する種々の構造要素及び條件の結合關係に於て地域の劃定を成すものであり、後者は一定の經濟活動をなす場合に、かかる地域の何れにその配置を決定するかを理論を定立するものなるが故に、この兩者を貫く何等かの原理を確立するに非ざれば、同時に兩者の理論を併用する事は困難である。茲に中心經濟地理學的理論の成立を見るのである。即ち國民經濟地域を一定の方法によつて各地域に細分劃定するにしても、各地域の特徴を示す中心點があり、更にその中心點が國民經濟全體の中心點に指向し、統一せられる時に國民經濟の地域的統一が完成される事となる。又立地論の立場も個々の經濟活動の

配置を研究するものではあるが、矢張り一定地域の原費優越を中心として之に指向するのであるから、如何に人爲的に他へ偏倚せしめようとするも、結局、原費優越の力の中心に凡べての經濟活動は指向し、更に夫れはより廣汎なる經濟地域の中心に指向する事とならざるを得ぬ。故に經濟地理學の研究に於ては、一定の經濟體の中心を種々の方法によつて定立し、更に之を中心として多くの小地域を劃定してその中心を定立し、かくして全體と部分、一般と特殊との關係に於て、經濟的空間の研究を完成する事が出来、同時に從來の地域論と立地論とを結合せしむる事が可能である。經濟的中心なき處に有機的統一的經濟體は有り得ないのであり、從て強力なる經濟的中心地區の確立、更に地方的中心地區を有する地域の劃定をなしうる場合に、初めて有機的統一的經濟體を認識しうるのである。故に經濟中心論は經濟地理學の最も有力なる研究方法といふ事が出来よう。經濟地域の劃定は經濟地理學研究の出發點にして終極點であるが、この經濟地域は常にその中心によつて結合され統一されてゐる事を前提とする。若し經濟的中心がなければ、經濟的地的統一體は成立せず、恰も單細胞的下等動物の如き存在と化するであらう。而して經濟地域の中心は經濟體の擴大又は縮小によつて變化するのみならず、經濟體の活動目的の變化、經濟的發展の如何によつて移動し、更に大小の中心が或は増加し或は

減少する事となる。從て又經濟地域の擴大縮小、或は廢合生滅が行はれざるを得ぬ。故に地域論も立地論も常に經濟中心論と結び付く事によつて初めて經濟地理學の研究に於ける指導的原理となり、研究方法となりうるのである。

第二章 經濟地理學の研究に於ける作業的方法

經濟地理學の研究は、前章に述べたる種々の指導原理によつて導かれつゝ實踐的作業によつて、その體系を形成し、地理學的認識を確立し、更に之を敘述して、茲に科學的勞作の全過程を完了するのである。特定の指導原理によつてその向ふ所の方向、過程、從てその結論は著しく異なるものとなるのは當然であるが、併し夫々の指導原理が恰も主觀的のもの如くに見ゆるも、何れも經濟地理學的認識の客觀性絶對性即ち普遍妥當性を求むるものであつて、主觀的見解に了るべきものではない。換言すれば地理學的諸現象が如何にしてかくあるか、又かくあらざるべからざるかの普遍妥當性を究明せんとするものである。併し乍らこの客觀性なるものは他の文化科學に於けると同じく、人間の全知能を以てするも、絶對性を有し得ないのである。故に凡ゆる補助手段を用ひて人間の知能に適應しうるが如くにし、之によつて經濟地理學的諸現象の可能性、蓋然性、必然性の三方面より認識するの外はない。而して可能性、蓋然性、必

然性の三者を如何に論理的綜合的に達觀するかによつて、經濟地理學に於ける理論、從て體系の客觀的妥當性が決定されるのであるから、出来る丈の論理學的考察方法を用ひなければならぬ。故に本章に於ては考察的方法の主なるものにつきて概説しよう。

第一節 推理的方法論

推理的論理方法とは一定の事物、諸現象の生起に關する因果關係（之は歴史的發生論的である）及び一定の事物、諸現象の空間的連繫關係（之は地理的分布的である）を追求、推理して、その可能性、蓋然性、必然性によつて一定の結論を導き出す方法である。而してこの推理には種々の方法が考へられるが、茲にはその主なるもののみを述べよう。

第一分類論

經濟地理學は地表に於ける分布現象を主として研究するものなるが故に、その研究對象は多種多様にして、その現象形態を綜合的に觀察する事は頗る困難である。この複雜多様なもの

を、一定の類概念によつて分類し、その相互の關係を比較研究するのが分類法である。分類法は主として事物の形態によつて行はるるものであつて多分に形態學的である。故に事物に内在する性質、意味等の把握は困難である。併し從來の地理學は地形學的性質のものが多く、又自然を中心としたるが故に、分類的方法が専ら使用されてきたが、最近の如く地理學の一般の本質の變化、その研究對象を有機的統一に於てその意味を理解せんとするに至りては、種々の缺陷を有する。併し今日と雖も尙ほ有力且つ必要なる方法たるを失はない。而して分類法は單なる分類のみによつては意味をなさないものであつて、常に綜合的方法と比較的方法と相表裏すべきものである事は言を俟たぬ。

第一類 類型論 (Typologie)

類型論は最近に至りて科學研究に盛んに用ひらるゝに至つたものである。之は單なる類概念による分類法と異り、事物に固有の理想類型なるものを豫定し、之によつて諸現象を類型化し、その存在理由、内在的性質、社會全體に對する給付的結合關係を説明しようとするものである。例へば各地域を夫々の類型によつて劃定し、農業に就いて云へば、小麥型、米作型、玉蜀黍型

となし、更にその型に適應して如何なる經濟活動が行はるるかを研究するが如き、この方法によるものである。この方法は地域論の構成、地域的個性の研究には有效なる方法である。

第三類 推論 (Analogie)

人間は凡べてのものにつきて一々研究する事は出来ないから、或る一の事物を調査研究して之に類似するものに適用して類推的に事物の考察をなさんとする方法がある。之れ即ち類推方法であつて、頗る便利なる研究方法なるが故に、論理的構想として古くより發達したものである。併し之には一定の限度があり、之を濫用する時は却て論理を過る事が多い。類推論は部分的類似より推理して、結論を見出すのであつて、部分的類似は全體的一致ではないから、多くの危険を伴ふ。故に歴史等に於ては類推論は屢々排撃されて居るが、併し地理學に於ては頗る有效なる研究方法といふ事が出来る。例へば一定の景觀又は地域に於ては、一定の經濟現象が存在するとされた場合、他の類似の景觀又は地域に於ても同様の經濟現象ありと類推し、之に基いて研究すれば、その結論に到着する事が比較的容易である。殊に實際的の經濟活動をなす爲めには類推法は頗る便利である。

第四 發生論 (Genesis)

事物を觀察する方法として組織論、現象論、發生論の三者に分つ方法がある。組織論は純理論的科學に用ひられ、現象論は地理學の如き諸現象の空間的分布的研究をなすものに用ひられ、發生論は歴史學の根本原理をなすものである。發生論とは事物が如何にして生れ如何にして進化發展すべきかの論理を考究するものであつて、時間的概念を絶對的とする。文化科學の前提は、「凡べてのものが流轉する、地上に新からざるものなし」といふに在る。茲に發生論が存在しうるのである。従て發生論的研究方法は地理學とは全く別個の概念に屬するものである。併し乍ら經濟地理學は地域的個性を現實とし、與へられたるものとして研究するのであるが、この現實なるものは、言ふ迄もなく歴史の所産にして、殊に今日に於ては純粹なる自然的地域は存在せず、地域といへば即ち文化的地域に外ならぬのであるから、地域的個性を地理學的に理解する場合にも、發生論的研究を絶對的に必要とする。地理學と歴史學、現象論と發生論とは根本的に異なる概念に屬するが故に發生論的方法是常に潜在的たるべきは當然であるが、發生論的考察なき經濟地理學は現實には成立し得ないであらう。

第五 演繹論 (die deduktive Methode)

已に經濟地理學に於ける演繹法、歸納法の地位を論じ、主として歸納法によつて研究されるものであり、演繹法はその出發點、前提をなすものなりと述べた。演繹論は特定概念より出發して推理を行ひ、以て個々の事物の意味を説明するものであるから、經濟地理學の如きものに於ては固有の研究手法といふ事は出来ない。併し複雑多様な現實を一々列舉分類し、更に之を歸納して研究する事は事實頗る困難にして、歸納方法のみによつて正しき結論に達する事は容易でない。この場合に演繹法を用ふるならば比較的簡單に歸納法の目的を達しうる。例へば或る地域に或る産業が集中特化せる場合に、この地域に於ける個々の事實を如何に詳細に研究するも、之れだけではその集中特化の理由を發見する事は容易でないが、演繹法により、その産業の一般的本質、その形態に關する理論的考察をなし、之より出發して現實の分布状態に照して考察すれば、初めてその地域が如何なる條件を具備せるものであるか、従て又集中特化の理由如何が自ら分明する。如何に具體的條件、事實が歸納的に説明されても、地域的個性形成の一般的究明には到達し得ないであらう。

第六 孤立法 (die isolierte Methode)

孤立方法とは、複雑なる現象を綜合的同時的に研究する事は困難であるから、その諸現象の一つ又は極めて少數のものを選び出し、且つその条件をも出来るだけ簡單にして研究するのである。換言すれば一切の条件を同一なりとし、その条件の下に於て一定の現象は如何に顯現するかを研究する方法である。併し凡べての条件が同一である事は物理的化學的實驗の場合には或る程度に之をなしうるも、文化現象に於ては絶對にあり得ないのであるから、所謂「地の事情にして同一であるとするならば」の条件は全く假定にすぎないのであつて、現實にはあり得ない。この方法を最も巧妙に應用したのは、先に述べたチューネンであつて、現實には土地その他の自然的條件は千差萬別であるにも拘はらず、或る一定の地域は外部と全然交通なく、而かも土地の性質、形狀その他は全く同質であり、且つ交通機關としては馬車以外に運河も鐵道もなく、その中心に都市があつて専ら商工業のみを營み、他の部分は農業のみを經營するとしなければ、農業地帯に於ては如何なる耕種式が如何なる順序に依て布置するかを研究したのである。この孤立法による結論は全く假設的抽象的にして現實と孤立し遊離してゐるかの如くで

あるが、農業の耕種式の地理的分布の一般的傾向は現實と大體に於て一致してゐる。只諸種の條件が加はるが故に偏倚してゐるにすぎない。凡べての文化活動は一定の条件の下に於ては一定の方向を辿るものである事を究明するには孤立方法は最も有效である。個性は一般性と特殊性の結合關係に於て形成されたものとすれば、先づ孤立法によつて一般性を研究し、更に之を現實化して種々の条件による偏倚によつて個性形成の過程を研究すればよい事となる。故に自然的社會的歴史的諸条件によつて形成さるゝ地域的個性の研究をなす經濟地理學に於ては、孤立方法は最も好都合にして、最近に於ては盛んに應用されてゐる。かのアルフレッド・ウェーバーの工業立地論の如きも亦之によつたものである。

第七 辨證法 (Dialektik)

辨證法は事物の流轉の必然性を前提とし、而してその流轉變化は、凡べての存在が自己否定の系列によると考へる。換言すれば事物の存在の理由は實は非存在の理由であり、自己が在るといふ事は、自己に對立し否定するものがあるが故に在るといふ一種の逆説的論理である。即ち甲あれば非甲あり、甲は非甲あるが故の甲にして常に對立してゐる。併しこの對立が單なる對

立であるならば平行運動に止り、同一であり不變であつて何等の發展はないから、かかる存在は惡無限的存在であるが、この相對立して否定され、甲にも非ず、非甲にも非ざるものに止揚され、より高き次限のものを化生したならば、この否定の過程は即ち眞無限的發展であり、辨證法的發展であるといふ。この種の逆說的論理は極めて古き時代より存在したのであるが、ヘーゲル(Hegel 1770—1831)によつて體系的に完成され、爾來多くの學者の應用する所であつて、特に歴史學に於ける指導原理として盛んに用ひられてゐる。之を社會組織に當てはめて見るに、凡べて積極と消極、親和と鬭争、デモクラシーとアリストクラシー、建設と破壊、中央集權と地方分權、集中と分散、合化と分化の如く、相對立せる概念の系列によつて社會は形成されてゐるものの如くである。一定の地域が個性を有すといふのは、一定の時期に於ける假設に止り、實は絶對的相對的に常に變轉止む事はないのである。故に經濟地理的研究に於ても辨證法的考察は最も必要であつて、之によつて個性形成の過程を理解することが容易である。殊に經濟地理學は經濟地域を一の地域統一體として觀察するが故に、當然に部分と全體、外延と内包の關係が問題となるのであり、延いては各地域間に種々の經濟的活動、之を具體的にいへば産業が集中分散して一定の分布状態を形成するの根本原理の究明は辨證法的考察に俟つべきもの

が甚だ多い。第一次世界大戰迄國際主義自由主義によつて世界經濟が成立してゐたが、それは遂に之と反對の國民主義獨裁主義に基く國民經濟によつて否定され、而かも之が更にブロック主義に轉換しつゝあるが如きは、結局、より高き國際主義的世界經濟への辨證法的過程とも見られ、之に適應して國內及び國際的の地域的編制も變化するのである。國民經濟に於てもそれが外延的に發展すればする程、内包的充實を必要とし、個々の經濟地域がその固有の機能を最大限に發揮する事によつて國民經濟が發展する。部分の完成なき全體は死滅せざるを得ず、全體の完成統一なき所に部分の完全なる存在も發展もない。故に經濟地理學が地域的個性とその地域編制を取り扱ふものとすれば、辨證法的考察法を用ふべき場合が頗る多いのである。

第二節 解釋的方法論

前節に述べたる種々の考察方法は現象の一般的理解に用ひらるべきものであるが、更に個々の事實につきては特殊なる方法によつてその意味を解釋するの必要がある。この解釋にして正しくなければ、如何に形式的に理論が一貫してゐても事實の本質を究明した事とはならないの

である。故に解釋の方法は主として個々の事實そのもの、又は事實を記載せる資料、事實と事實との聯關につきて嚴密に活用されねばならぬ。

第二 因果的解釋

之は事物の論理的因果關係の解釋にして普通に解釋又は説明といはるる場合は概ね之である。甲なる事實は甲一の原因であり、甲一は甲二の原因であり、かくして乙なる結果を生じたる場合に、甲より發したる凡べての事實は互に因となり果となりて乙の原因をなせる事を論理的に辿り行き、乙は甲以下の原因の結果にして、それ以外のものに非ず、それ以外のものは乙の原因たり得ずして、他の丙の原因である。かくの如く事物を解釋する事が事物の真相を知る上に必要な事は言を俟たざる所にして、一般的にはこの方法によつて大體の解釋をなしうるのである。併し乍ら因果關係なるものは常に時間的發展變化を含むものにして、從て地域の個性が生滅する過程を究明するには因果論的方法を必要とするが、地域相互の間には必しも因果の關係はないのであるから、之のみによる事は出来ない。又社會現象は種々の條件、現象の複合によつて顯現するが故に、更に他の解釋方法を必要とする。

第一 類推的解釋

事物の原因結果は必しも連續的に認識し得るものではなく、中斷されて因果の關係の不明なる場合がある。かかる場合には他の類似物より推論して因果關係を解釋するの外はない。例へば或る地域に於ける産業の集中特化につきてその原因が不明であるが、他の地域に於ける同一産業につきてはその原因が明かなる場合に、この原因の明かなるものより類推して解釋を加へる事が出来る。併し之は已に述べたるが如く一應の解釋にすぎずして、その濫用は却て事實を誤る事が少くない。

第三 反對解釋

之は或る事實よりして逆に解釋する方法であつて、一種の逆説法である。例へば或る地方につきて、米の問題に關する記録が少しもないといふ事實があつたとすれば、之は逆に米が豊富にして人民が平安なる生活をなしたる事を示すものであり、逆に米の問題が屢々發生したとすれば、米が常に缺乏し人心が安定してゐなかつたと解釋する事が出来る。この方法は屢々用ひ

らるる所であるが、併しその正確さは絶對的ではない。

第四 批判的解釋

事物の解釋をなす場合には、事實そのものを記載したる資料による事が多い。併し乍らその資料の記載は果して正確なりや、又資料が眞正のものか虚偽のものかを一定の立場より判定しなければならぬ。又他人の解釋、議論による場合にも、それが正當なりや否やを判定する必要がある。而して批判的解釋にはその基準となるべきものを必要とし、若しその基準にして不正確にして妥當性を有しなければその解釋も亦正當でない。批判的解釋は批判者の認識力、方法、主義主張等によつて影響せらるるが故に頗る慎重を要する。批判的解釋は往々に獨斷に陥る虞がある。

第五 連繫的解釋

之は歴史學に於て屢々用ひらるゝ方法であるが、地理學にも應用しうる。例へば甲乙兩地は何等直接の連繫はないのであるが、甲乙兩地方に同一の産業が發達してゐるとしたならば、甲

乙兩地は地理學的に類似の地域的個性を有する事が推論される。又甲乙兩地が空間的には離れて一見何等の連絡なきが如きも、その間に交通貿易が盛なる場合には、その兩地方は全く異なる地域的個性を有し貿易をなさざるを得ない事情に在る事が推論される。連繫的解釋は類推法の一種であつて、正確なる事實によつて連繫するの必要がある。單に外形的事實のみでなく、その事實に内在する本質によるべきである。然らずんば形式的には連繫されてゐても實際は木に竹を接ぎたるが如き誤謬に陥るであらう。

第六 傍證的解釋

一定の事物それ自身のみを解釋が充分に行はれない場合には、それと並存せるか、又は派生せる事物によつて、側面より解釋する事がある。例へば甲産業は他の數個の産業と密接の關係に在りて一定地域に並存する事を有利とする場合に、甲産業の地理的分布状態を他の産業の地理的分布状態によつて解釋する事が出来る。併し傍證的解釋は側面的補助的であつて絶對的のものではない。

第三節 表現的方法論

前節に述べたる考察方法に基きて認識されたる經濟地理的概念は更に一定の作業的方法によつて再生表現され、且つ記述されねばならぬ。

第一 目標の確立

凡べての學術的研究の敘述に於けると同じく、經濟地理學に於ても、研究には一定の目標がある。この目標が確立されなければ放たれし矢は的に命中しない。換言すれば研究の中心を定め、その中心に焦點を合はせなければ、如何に多くの事實を正確に列舉網羅するも漠然としてその明かにせんとする所、云はんとする所を把握せしむる事が出来ない。一定の課題につきて凡ゆる方面から研究し乍ら、雜然として一貫せる體系を確立する事が出来ず、單なる敘述に止るものが多いのは、課題の中心、目標が確定されてゐないからである。即ち一定の課題は根本的なる要素によつて特徴づけられてゐるのであるから、種々の要素の究明敘述も必要であるが、

最も重要不可缺の點は、その課題に於ける唯一の特徴的要素を先づ把握する事である。この事は繪畫的表現と同一であつて、例へば人の肖像を畫く場合に、寫眞の如く一本の毛、一筋の皺をも残らず表はすのは必要でないのみならず、寧ろそれは拙劣なる描寫といふべく、而してかかる拙劣なる描寫は、その描き出さんとする人の個性、特徴が何れに有するかといふ中心、目標を定め得ない事に因由する。經濟地理學に於ても經濟的地域個性の研究並にその表現敘述には何よりも先づ目標の確定が必要である。

第二 資料の選擇

研究には種々の資料が必要であり、而かもその眞偽、正邪を判定しなければならぬことは已述の通りである。而して研究資料が眞正にして、誤謬なきものとするも、凡べての資料を使用しうるものではない。凡べてを使用せんとすれば雜然として統一する所がなくなるであらう。故に先づ目標を定め、その目標に適合するが如くに資料の選擇をしなければならぬ。資料の選擇は個人的興味、非科學的他人の意見等によつて決定さるべきものではなく、方法論的客觀的に妥當視される事を必要とする。即ち同一の資料といへども目標の如何によつてその重要性

に輕重の差を生ずる。況や無限に存する研究資料は夫々その價值は異なるのであるから、その判定如何によつて研究の結果、從て表現の形式が自ら異なる。同一又は類似の資料が多數存在する場合にも、最も有效なるものを代表せしむることは表現を簡明にするに役立つ。更に資料は一定の方法によつて排列整頓されねばならぬ。資料を分類し排列整頓するのみにて、已に敘述せんとする體系の大概が形成されるのであるから、この排列は單に技術的のものであるが、その前提として研究目標と研究方法とが確定されておなければならぬ。次に資料は生のまゝに利用しうる事も出来るが、必しも目的に適合するが如く蒐集しうるものではないから、簡單に利用しうるが如くに資料を壓縮しなければならぬ場合もあり、又不完全なるものを接合して完全なものとし、或は資料によつては更に新たな資料の再生を必要とする場合もある。要するに資料の選擇、排列、壓縮、接合、再生等は研究の妥當性を決定する最も重要な契機であり、從て又表現敘述に大なる影響を與ふるものである。

第三 敘述の任務

研究結果の敘述は、認識を枉げる事なく再現する事である。即ち經濟地理學に於ても他の學

問と同じく、地理學的認識を出来る限り直觀的なる形態に於て表現する事である。その補助手段、技巧、個人的趣味、學術以外の世論は斷じてこの表現態度を變改しうるものではない。常に客觀的論理的表現でなければならぬ。併し乍ら敘述は認識の再現であるから、茲に研究者の趣味、人生觀、希望、意欲が屢々大きな影響を與へるの危険がある。固よりその敘述の形式に於て、研究者の個性、風格の表はれる事は排斥すべきではなく、寧ろ望ましき事であるが、併しそれは研究の結果を客觀的に表現しうる限りに於てであつて、若し研究者の個性が主となり主觀性によつて支配されるが如きは、如何にその表現が藝術的であり美的であつても、最早學術的敘述といふ事は出来ない。個性的藝術的敘述が屢々研究の効果を大ならしむる事はあるが、併し乍ら之はどこまでも客觀性を破壊せざる範圍に於て認めらるべきものである。かの歴史的敘述、表現を形容して、主觀の客觀化、客觀の主觀化といふ人もあるが、之は歴史學には或る程度に妥當するとしても、經濟地理學に於ける敘述に於ては、かかる見解には特に注意を拂はねばならぬ。

第三章 經濟地理學の研究資料

經濟地理學は地表に於ける經濟現象の空間的分布によつて各地域の個性を研究するものであるから、その研究資料が廣汎に互るものである事は、研究領域につきて述べたところによりて推察出来るであらう。併し乍らその關連する範圍が廣汎なればとて、凡べてが研究資料となりうるものではなく、そこに資料の選擇の必要を生じて來る。而して個々の問題を獨創的に研究せんとするには、先づ一定の目標を定め、この目標に適合しうる資料を蒐集して取捨選擇し、更に之を排列して一應の類別をなし、或は壓縮、再生、接合すべきである。この資料の蒐集整理は、目的と手段とによつて規定されるのであつて偶然的のものではない。學問に於ける發見發明中には屢々偶然によるものが少くないけれども、偶然的發見は科學本來の目的とするものではなく、科學の科學たる所以は目的と手段との合理的の一致によつて論證されたる結論でなければならぬ。科學者特に地理學者は常に各地を旅行し、その景觀、風土、氣候、人情、慣習、

聚落形態等を實地に觀察しなければならぬ。この際或は偶然に重要な地理學的發見をなす事もありうるが、併し科學的研究はその觀察する所の地理的事象を、上に述べたるが如き種々の研究上の指導原理、或は作業的方法によつて理論的に概念を構成するか、或は何等かの方法にて構成されたる地理學的假設を現實在に當てはめてその妥當性を證明し、以て地理學的理論を確立し、法則の定立に力むべきである。所謂「犬も歩けば棒に當る」式に偶然に旅行してゐる間に發見したるものが、地理學の發展に大なる貢獻をなす事もあるが、之は偶然の結果にすぎぬのであつて地理學的研究の本體ではない。科學的研究の本質はその研究の過程、手續の論理化に存する。而して研究資料は個々の事實を記載したるもの、自然的所與物又は人間の創造物、地方的事情を誌したるもの、旅行記、統計書、地圖の如く體系をなさずして散在せるものと、最初より經濟地理學の書物として一定の地方又は一定の經濟活動につき體系的に論述したるものとに大別する事が出来る。前者を素材的研究資料と稱し、後者を參考的資料と名づける。

第一節 素材的研究資料

素材的研究資料にも研究者自らが地理的現實在につきて觀察したるものと、他人の調査記述

を再生したるものがある。前者は研究上第一義的にして、後者は寧ろ補助的である。而してこの兩者を統合して初めて經濟地理學の研究は全きに近いのである。

第一 第一義的研究資料

之は一定地域に現實に存する自然的所與並に人間の創造物にして、之を一定の方法によつて觀察し、その諸關係を認識し、之より出發して地理學的概念を構成するのである。故に地理學の研究には何よりも先づ實地を踏査して、その地域の分析的綜合的考察を行はねばならぬ。勿論この第一義的資料は一定地域に實在する凡べての自然的所與と人間の創造物であるから、無限に複雑多様にして一々につきて詳密なる調査をなす事は全く不可能である。故に研究目的の如何によつてその選擇は自ら異なるわけである。

第二 補助的研究資料

獨創的研究には第一義的資料の調査が最も必要にして、之を缺く事は出來ないけれども、廣汎なる地表に於けるかかる資料を遍く實地に調査する事は不可能であるから、茲に於てか他人の調査研究を藉りてその足らざる所を補完し、以て研究の完璧を期するの外はない。この場合には個々の經濟事實を調査したるもの、地方事情誌、旅行記、統計書類、新聞、雜誌、地圖等は最も有效なる資料である。固より之等の資料も無條件に信憑しうるものではなく、その價值判定には充分の注意を要する。併し今日ではこの種の資料が頗る増加し、その取捨選擇に迷ふ程であるが、それ丈け比較調査によつて價值判斷は容易である。

第二節 參考的研究資料

參考的研究資料はまとまりたる體系の下に一般的に敘述されたる經濟地理學の文獻であつて、之には研究方法論上の參考になるものと、個々の事實を記したる補助的研究資料になるものとが含まれてゐる。參考的研究資料たる文獻は何れも一定の立場より論述されたものであるから、夫々獨特の體系と個性を有し、一長一短あるを免れない。殊に經濟地理學は我國に於ては極めて最近に發達したものであつて、大學に於ける斯學の講義の如きも未だ三十年を出でず、僅かに一般地理學の一部として取り扱はれたるにすぎない。又その内容も商業地理學又は商品地

理學の域を脱せず、單なる事實の羅列を事とし全く科學的體系をなさざりし有様である。從て經濟地理學の自己研究ともいふべき、日本國民經濟につきての經濟地理學的研究は極めて少く、只個々の問題につきての部分研究、基礎研究の時代であつて、未だ綜合的體系的に我國全體に關する經濟地理書は殆どないといふも過言ではあるまい。世界全體に互る研究に於ても極めて概括的皮相的な教科書ともいふべきものが多く、且つ根本資料により獨自の理論的體系を成すもの少く、殆ど外國人の著書の翻案又はその編纂物にすぎない。之れ蓋し科學發展の過程上已むを得ない所であり、又經濟地理學の科學的地位の明確ならざりし結果である。最近、經濟地理學の必要が頗る増加し、研究者も頗る増加したから、近き將來に於ては眞の經濟地理學書が生れ出るであらうが、今日に於ては外國の水準に比して甚しく低位にある事は何人も認めざるを得ぬであらう。經濟地理學書の世に出づるもの昨今著しく増加したけれども、その内容は右に述ぶるが如きものにして、その用ふる所の研究資料は殆ど同一であり、從て何れの書物も大同小異である。故にその一々につきて紹介するの必要は殆どないであらう。その主なる論著は卷末に參考附録として列舉しておいたから、經濟地理學に入門を志す人々は就て參看せられん事を希望する。

第三編 經濟地域劃定論

第一章 經濟地域劃定の意義

經濟地理學は、地表空間が經濟的に異なる地域の連關統一に於て存在する事を前提として存立し得る。若し地表の各地域が同質不變であると假定するならば、最早人文地理學も、從て又その一部門たる經濟地理學も成立し得ない。而して經濟地理學は屢々述べたるが如く、各地域の經濟的個性の構造聯關を研究し、更に各地域を比較し、地的統一としての地域編制の問題を研究するものであるから、先づ地表の各部分が一定の標準によつて區劃されねばならぬ。蓋し時間にしても空間にしても、哲學的概念的に全體として把握する事は出来るが、之を形而下的に理解しようとするならば、何時の時代、何れの場處と限定せざるを得ぬからである。故に人間の地理的認識の成立と共に地域劃定の觀念が生れたのである。地表の區劃が古來種々の目的、方法によつて行はれたことは、地帶、領域、地域、地區、範圍、界、圈、更には道、國、藩、縣、郡、畿、甸、廓等枚舉に遑なき迄に、地域を表示する文字、詞の存するによつて明かであ

る。外國語につきて見るも、Zone, Reich, Gebiet, Bezirk, Kreise, Lokal, Region, Block, Circle
その他行政、政治、經濟上よりする區劃を意味する文字が頗る多い。而してかゝる地域の區劃
は必しも地理學の見地よりなされたものではなく、政治上、經濟上の支配關係に於て自ら劃定
されたものであるから、之等の諸關係の變化と共に或は擴大され、或は縮小する。然るに經濟
地理學に於ては、經濟的個性を形成する凡べての要素、條件の複合現象を通じて、地域劃定を
試みるのである。從て時によつては數個の行政區域が一の地域に包含される事もあり、或は一
個の行政區域が數個の經濟地域に分割される事もあり、更には歐洲の諸國の如く狭小なるもの
に於ては數ヶ國が同一經濟地域をなす場合もあり、支那の如く國とはいへ經濟地理學的には數
個の地域に區分すべき場合もある。一の經濟地域として概念されるためにはその包括する範圍
の廣狹は本質的なものではなく、各地域が独自の個性を有し他と區別されるべき固有の特徴を有
し、且つその地域は相互に地理的聯關を有する事を必要とする。如何に類似點を有するも地理
的に隔離し、何等の聯關なきものは、個性が類似してるといふに止り、別個の地域と見るべき
であつて、只各地域を類別する場合に概念上同一に取扱はれるにすぎない。

經濟地理學の研究には、先づ種々の研究資料によつて各地の個性的特徴を見極め、その内部

の有機的統一聯關性の如何によつて地域を劃定しなければならぬ。之は恰も歴史學に於て時代
區劃が絶對的に必要なる前提たる同一である。即ち時代區劃をなさずしては歴史の研究は全
く不可能であると共に無意味といふべく、單に時の流に從て事實を記述し、或は過去の事實を
敘述するが如きは歴史學ではない。地理學の任務が地上の諸事實を羅列的に記述するか、或は
自然と文化との相關關係のみを論ずるものならば、必しも地域の區劃を必要としないであらう。
併し乍ら羅列的記述にしても、又相關關係的論述にしても、之を廣汎且つ深刻に行へば行ふ程、
自ら各地域の特徴が発見されるし、更に相關關係は各地域の異質的な點を檢討する事に由て
一層明かに理解されるのであるから、苟も空間現象を取扱ふ限り地域の區劃は必然的に研究上
の視野に現はれざるを得ぬ。地域的區劃の概念なくしてはかゝる研究といへどもその目的を達
する事は困難である。況や人文地理學が文化の空間的分布的推擴的聯關を研究し、地域的個性、
及びその地域編制を闡明するものなる以上、正に歴史に於ける時代區劃と同様に、地域の區劃
を絶對的に必要とする。換言すれば地域の區劃をなさずしての研究はも早地理學の範疇に屬し
得ないものである。從來地理學が果して獨立の科學なりや否やが屢々疑はれたるは、この絶對
的必要前提を無視するものが多かつたからではあるまいか。地理學の研究に於て地域の區劃の

必要を説いたものは少くないが、之を最も系統的に論じたのはヘットナーである。併し乍ら尙ほ多くの地理學者中には地域區劃を重要視せず、依然として相關論を主とするものが少くない。又最近には地域の代りに「景觀」を以てするものがあるが、景觀は自然的要素を主とする地形學的見地によるものなるが故に、廣義の自然的條件を標準とする地域論ともいへる。更に地帯を區劃して地表各部分の比較研究をなさんとするものもある。地帯は概ね氣候的關係によつて劃定され、比較的廣範圍を意味し、地帯の中に地域を劃定するか、又は地帯を更に小地帯に分割して居る。フリードリッヒ (E. Friedrich) ケッペン (Köppen) の如きは即ちその著例である。氣候は一定の地帯をなし、地表に帶狀をなして布置するが、地域は必しも帶狀の空間を意義するものではなく、種々の形狀を以て散在し、常に氣候帶と一致するとは限らない。地帯の區劃を重要視するものは、地帯を地域の連繫として以て比較研究を容易ならしめんとするもの如くである。若し然りとすれば地帯論は經濟地理學の研究方法として必要なるものであるが、それには地帯と地域との關係を闡明しなければならぬ。然るに地帯論者の地域は、その意味頗る不明にして、何を標準として地域を區劃し、且つ地帯と如何なる關係にあるかが明にされてゐない。併し何れにするも之等の學者も何等かの方法によつて地表を區劃して比較研究するの必

要を認むるものといはねばならぬ。かくして地域の劃定は新しき經濟地理學に於ては必要不可欠の課題であると考へらるるに至つた。

右の如く地域の劃定は地理學に於ける重要な課題であるが、然らばこの課題は、經濟地理學に於ける前提手段であるか、或はその到達すべき窮極の研究目的であるかにつきて議論を存す。一説によれば、經濟地域は、種々の方面より充分なる研究の行はれたる後に於て初めて其の地域の經濟的個性が闡明され、同時に他の地域と區別され得るのではないか。豫め經濟地域を劃定し、然る後に各地域の經濟地理學的研究をなすべしとするは、卵が先か鶏が先かの循環論的議論に了るのではないかといふ。この議論は歴史學に於ける劃期につきても屢々行はれる所であるが、多年の研究によつて種々の劃期又は地域劃定が行はれ、之を取捨選擇して一應の豫定をなす事が出来る。併しどこ迄も一應の豫定なるが故に永遠に研究が終末しないのであつて、若し決定的不變的劃期、地域劃定が可能ならばも早や新しき歴史的、地理的研究は存在し得ないであらう。歴史學に於ける劃期、地理學に於ける地域劃定は、その研究の出發點にして且つ終極點であると共に、逆に終極點なるが故に出發點である。前提手段と目的との自己同一である。前提手段と目的との自己同一なるが故にこそ、地理學的研究が無限に行はれうるのである。

ある事は、他の科學の場合と同一であり、益々高き次限へと止揚され、内包的にも外延的にも、擴大深刻化され發展して止まないものである。それは懸て人間の文化一般、特に經濟的文化が如何にして地表に現象するかの本概念を構成する事を可能ならしむるものである。

地表の各部分は夫々の個性があるが故にこそ獨立の地域を成し、他の地域と區劃され、且つそれが辨證法的に地的統一體たりうるのであるが、然らば個々の地域は線を引きたるが如くに明確に區劃され、モザイクの各片の色の如くに異なるものなりやといふに然らず。恰も虹の七色の如く中間的過渡的領域の存する事は、歴史學の劃期に於て、早期、全盛期、終期の存するのと同様である。故に或る地域が重工業地域とされるには、之なくんば重工業地域と認識し得ざるが如き不可缺の要素によるのであるが、併しさればとて、その地域には重工業以外のものはないといふのではなく、種々の産業が並存するも敢へてさしつかへはない。従てこの地域に化學工業地域が接續するとしても、この地域にも重工業その他の産業が存在する場合もある。何れの場合によるも、その中心をなす重工業、化學工業を無視しては、重工業地域、化學工業地域として地域認識をなす事能はざるが如き本質的特徴によるべきは言を俟たぬ。即ち特徴的個性が當該地域の中心をなし、その中心を去るに従て地域的個性を形成する要素、條件が減衰

し、次第に他の地域に移行し、かくして多くの地域が連続し並立するわけである。經濟地域は概括的にいへば、東經何度より何度迄、北緯何度より何度迄、何れの山脈より何れの川迄といふが如くに一應は物理的機械的に劃定しうるが、それとてもその限界に於ては中間的過渡的地域又は地帯が自ら存在するわけである。故に經濟地域はその標準の撰擇如何によつて廣狹の差を生じ、同一地域が種々の名稱の下に區劃されうるし又逆に多くの地域が同一の地域に統合劃定される事もあり得る。要するに一の經濟地域は單に特徴的なる經濟活動が配置してゐるといふ物理的關係によるのではなく、それが一の有機的統一をなせる事、従て常にその地域の個性を最も顯著に表現せる經濟的中心によつて集中結合せるが故に、初めて經濟地域が劃定されるのである。故に經濟地域の劃定には何よりも先づ中心が定立されねばならぬ。

右の如く地域の劃定の意義を解する時は、時代により人によりその地理學的認識の程度に應じて、即ち研究の目的、方法等によりて種々の劃定法が存する。故に地域劃定には頗る多くの方法が存在し、枚舉に遑なき有様であるが、之を大別すれば、一、自然的關係を主たる標準とするもの、二、文化的關係を標準とするもの、三、純經濟的關係を標準とするもの三とする事が出来る。第一を自然的地域劃定法、第二を文化的地域劃定法、第三を經濟的地域劃定法と

呼ぶ。併し乍ら之等種々の劃定法は、地域劃定を單純化し、一見して地域的個性を把握するの便宜に出でたるものが多く、一を以て絶對的妥當性ありと斷定しうるものではない。現實に就きて研究する場合には種々のものを組み合せ、然る後に眞實の地域を劃定するのである。それは恰も浮世繪を印刷するが如く、種々の部分的色彩を摺り合せ、重ね合せて初めて美麗なる一枚の浮世繪が出来上り、何人が見ても直ちに如何なるものを意味するかを認識しうると同様である。故に本書に於ては便宜上個々の劃定法につきてその大體を概説する事とした。

註 一定地域の有する經濟的個性によつて地域を區別する事を、舊著に於ては經濟地域設定と稱したるも、本書に於ては之を經濟地域劃定と改めた。最近に至り國土計畫が國策遂行上の重要問題とされるに及び、地域設定の語が一般に使用されてゐるので、之と區別するために劃定の語を用ひた。蓋し國土計畫に於ては、國家がその目的を確立し、この目的を最も有效適切に達する爲に、何の地を工業地域とし、農業地域とするか、或は何れの地を重工業地域、輕工業地域とするかを豫め策定するのである。之は固よりその根本的基礎としては現實の地域的個性によるのであるが、併し單に現實の事實のみではなく、一定の目的、理想に適應するが如く、國家の權力を以て地域の再編成をもなすものであつて、積極的性質を有する。之に反し經濟地理學に於ける地域劃定論は、各地域に於ける構造要素、條件の研究をなし、之に基いて現實に一定の地域的個性の存する事を闡明して地域を劃定するのであつて、一定の目的、理想に適應すべく積極的、恣意的に地域を定むるものではない。只斯くありと消極的に地域を劃するにすぎない。之を國土計畫又はその他の地域政策に於て如何に利用するかは、地域劃定論の關知する所ではない。かくの如く兩者の地域決定は目的、手段を異にするが故に、敢へて本書に於ては地域劃定と改めたのである。

第二章 自然的地域劃定論

第一節 自然的地域劃定の意義

現代に於ては地表の殆ど如何なる部分も原始的自然の状態に在るものなく、所謂文化景觀をなし、人間の活動は或る程度に自然を離れて存在し得るが如き状態になつて居るから、單純なる自然的要素のみによつて地域の劃定をなす事は困難であり、且つ不合理な點が少くない。併し乍ら一面より見れば地表の地形、地質、殊に氣候の如きものは、文化が如何に進歩するも之を根本的に變改する事は出来るものではなく、又それが人間の活動に大なる影響を與へるものなる事も否み得ない。故に今日尙ほ多くの學者によつて自然的要素による地域劃定が行はれて居る。而して最も古くより行はれたる自然的劃定法は地形學的なもの又は人種的なるものである。蓋し山岳河川湖沼の如き交通を遮斷し阻害する所の自然、或は一定地方に居住する人々の人種的又は血族的差別は、一定地方をして特徴づける事が顯著にして、特に人文の開發せざる時代

に於ては、これ等のものによつて各地力が影響せらるゝ事が甚だしかつたからである。然るに人知の進歩と共に、かくの如き自然的關係は次第に克服せられ、必しも地域を特徴づける根本條件といふ事が出来なくなり、又地理學自身の發達によつてその認識の確立せられたる結果、一般的統一的なるものによつて正確に地表を區分しうるに至り、右の如き自然的要素は地域劃定の標準として次第にその重要性を失つた。例へば我が國に於ける古來よりの國別、海道別の如きは全く自然的關係による地域區分であるが、歴史的に考察するならば、相當に重要な意義を有し、政治的、經濟的、人文的に同一地域と見てよかつたのである。今日では何の爲めに存する區分が分らぬ程であるが、人文發達の幼稚なりし時代には最も合理的な地域區分であつた。例へば近江が東山道に屬し、紀伊が南海道に屬するが如きは、今日の事情より見れば寧ろ不思議に思はれるが、之は全く自然的事情によるものにして、自然地理學的に考察し、且つその文化に及ぼしたる影響を見るに、區劃理由の歴然たるものがある。又昔時同一地區たりしものが、後に別個の地域に分割されたのも、最初は觀念的又は行政上の都合より一區域とされたが、結局自然的事情、之に基く文化の差異よりして分割されざるを得なかつたのである。例へば、吉備國が前中後及び美作に四分されたるが如きも自然地理的事情に基いて居る。然るに國

家體制の整備に伴ひ、かかる區劃は單に行政上の形式的區劃たるにすぎなくなり、更に文化的經濟的類似又は聯關によつて地域が認識され、之に基いて區劃されるに至つたが、併し尙ほ自然的要素は重要な影響力を有し、就中氣候の影響は最も顯著である。行政上の區劃も之と無關係ではあり得なかつた。氣候が個々の人間活動に對して如何なる影響を與ふるかにつきては、已に古くより多くの學者の研究する所であり、殊に動植物に對しては殆ど絶對的作用をなすものであるから、經濟活動が農業牧畜の如き有機的生産を主としたる時代に於ては、凡べての施設、技術は氣候の影響を有効に利用するか、或はその不利を除去する事に志向し、又人間の生理作用、及び之と關聯する消費需要も全く氣候の影響下にありしが故に、生産消費も自ら地方的分化を見、その結果交換が行はれ、茲に夫々の特定地域が形成され、交通も亦その間に發達するに至つた。故に先に述べたる種々の地形學的區域區分も結局は氣候によつて支配されて居る。何れにするもかくの如き感覺的なる自然現象による地域の劃定は一見甚だ都合にして且つ正確なやうではあるが、今日の如く文化、經濟生活の複雑多様にして、而かも文化の發達によりて歴史的、社會的所與が地域個性の形成に對し重大なる役割を演ずる時代に於ては、單に自然的要素のみによつて地域を劃定する事は、實に實際に即せざるのみならず、地域劃定の

目的より見るも、直ちに内容、實質を把握し得ないといふ缺點がある。歴史學に於ても從來の劃期法は主として年代により、即ち何年より何年迄を何々時代とするといふが如き方法によつたのであるが、之は餘りに數量的、機械的たるの缺陷があるので、今日ではその時代の特徴、即ち他の時代と區別さるべき意味を以て劃期の標準とし、直ちにその内容を理解しうるが如き方法によつて居る。地理學は特に自然的要素が多分に包攝されてゐるため、とかく自然的機械的に地域の劃定のなされるは當然であり、又頗る必要な事であるが、人文地理學の一部門としての經濟地理學に於ては、之のみによる事は適當且つ充分といふ事は出來ぬ。

第二節 氣候による地域劃定法

自然的要素による地域劃定法中、地形學的なるものは、景觀論者によつて尙ほ盛に論じられてゐるが、地理學、特に經濟地理學に於ては、只參考として採用せらるゝに止り、他は殆ど氣候を地域劃定の標準としてゐる。蓋し氣候は、後に述ぶるが如く、經濟活動に對して一般的且つ根本的に影響するのみならず、その氣候状態は數字的に表示しうるからである。而して氣候

は大體に於て東面に長き地帯をなすを常とし、斷片的に散在する場合が少いから、氣候による地表の區分は地域といはずして地帯 (Zone) と稱せられるのを常とするが、本書に於ては地帯をも廣義の地域として取り扱ひ、茲に説明する事とした。氣候による地域劃定法は頗る多いけれども、ケッペン (W. Köppen) の研究にかかると最も精密を極めて居る。彼は千九百十八年に從來の學者の研究を基礎として独自の調査をなし地表の氣候的分布に關する研究を發表し、更に千九百二十年之を増訂した。その後の經濟地理學者は概ね之によるものの如くであるから、氣候的地域劃定法の代表的のものとして、左に之を掲げよう。尙ほその細分、説明等につきて詳しく知らんと欲する人は、Petermanns Geographische Mitteilungen 中の地表の氣候分布 (die Klimate der Erde) を參考せられたい。

A 熱帶的降雨氣候帶(ワグナーによれば地表の一九・九四%)

A一 高溫濕潤の原始林氣候地域(九・四%)

A二 週期的乾燥のサバナ氣候地域(一〇・五%)

B 乾燥氣候帶(二六・二六%)

B三 ステップ氣候地域(一四・二四%)

- B 四 沙漠氣候地域(二二・〇二%)
- C 溫暖適順の降雨氣候帶(一五・五二%)
- C 五 溫暖冬期乾燥氣候地域(支那型地域七・五九%)
- C 六 溫暖夏期乾燥氣候地域(地中海氣候型地域一・六八%)
- C 七 濕潤季節循環的氣候地域(六・二五%)
- D 北部亞寒帶的氣候帶(二一・三五%)
- D 八 濕潤冬期寒冷氣候地域(一六・四五%)
- D 九 冬期乾燥氣候地域(四・九%)
- E、F 降雪氣候帶(極地帶一五・九三%)
- E 一〇 ズンドラ氣候地域(六・九二%)
- F 一一 永久凍結氣候地域(一〇・〇七%)

第三節 植物の分布状態による地域劃定法

氣候はその構成要素を數字的に計量して地表に於ける分布状態を決定し、以て地帯、地域の

劃定をなしうるが、更に之を具體的に表現するものとして動植物の生棲状態(Flora und Fauna)によつて地表の劃定をなす事が出来る。動物はある程度に自己の生活力に適應するが如くその棲息所を移動しうるが、植物は移動し得ないから、その分布状態は動物以上に固定的である。然かも太陽のエネルギーを潜在力として最も多く保藏するものは植物にして、之を媒介として利用する事が、太陽のエネルギーを利用して人間の生活に資する方法としては最も有效であるといはれる。フイジオクラートの議論を借りるまでもなく、人類は地上に分布する植物の利用なくしては絶対に生存する事は出来ない。經濟上の最大生産力たる農業は勿論、工業も亦間接に之に俟つもの頗る多いのであるから、植物の地理的分布は地表の地域的個性を決定する上に最も重要な要素たる事は何人も否定する事は出来ない。故に氣候によつて地帯を劃定するものは、氣候帶の具體的表現物として植物の分布帶(Vegetationszone)を併せ研究するを常とす。併し乍ら地表に繁茂する植物は必しも凡べて直接に人間の經濟活動に關係があるわけではないから、經濟地理學に於ては、植物地理學と異り、凡ゆる植物の地理的分布によりて地域の劃定をなすものではなく、經濟活動特に農業の對象となりうる植物によつて地帯を定むれば足る。故に經濟地理學に於て植物分布に基く地域區劃は之を農耕帶(Kulturzone)又はLandbauzone)

或は耕種帶 (Wirtschaftszone) —— 之は經濟帶と譯さるべきものではなく、耕種式又は農業經營方式の分布地帯の意に解すべきものであらう) と稱せらる。

第一 ケッペンの農耕帶

一 熱帶農耕帶 (Tropische Landbauzone)

イ 純熱帶耕作地帯 (die engere tropische Kulturzone) 椰子、パンノ木、カ、オ、バナ、ゴム、カフ

エー。溫度 80°C、降雨量 2000—3000cm。

ロ 準熱帶耕作地帯 (weitere tropische K.-Zone) この地帯の作物は前者と共通のもの多し、只稻、甘蔗の如きはこの地帯特有のものである。

ハ 混合熱帶耕作地帯 (gemischte tropische K.-Zone)

二 北部亞熱帶農耕帶 (Nord subtropische K.-Zone)

イ 玉蜀黍地帯

ロ 甘蔗地帯

ハ 綿作地帯

ニ 亞熱帶的大麥地帯

ホ 棗椰子地帯

三 南部亞熱帶農耕帶 (Süd subtropische K.-Zone)

イ 大麥地帯

ロ 玉蜀黍、甘蔗地帯

四 南部熱帶外農耕帶 (Süd ausser-tropische K.-Zone)

イ 農耕なき地帯

ロ 亞寒的大麥地帯

ハ オート地帯

ニ 裸麥地帯

ホ 小麥地帯

ヘ 玉蜀黍地帯

五 北部熱帶外農耕帶 (Nord ausser-tropische K.-Zone)

イ 農耕なき地帯

ロ 亞寒帶大麥地帯

ハ オート地帯

ニ 裸麥地帯

- ホ 小麦地帯
- ヘ 玉蜀黍地帯
- ト 夏小麦、大麦地帯
- チ 米作地帯

第二 フリドリッヒの農耕帯

フリドリッヒは主としてケッペンの氣候帯に倣つて自己の體系を作り、更に独自の耕種地域 (Wirtschaftsgebiet) を配した。前項に於ても述べたるが如く、Wirtschaftszone なる用語は經濟地帯と譯さるるも寧ろ農耕帯又は耕種帯とするを適當と思ふ。勿論この農耕帯を以てその地帯又は地域の經濟的特徴を示さんとするものではあるが、それは間接の結果であつて、記述されてゐる事自體は農耕又は耕種の問題であるから、本書に於ては敢へて經濟地帯又は經濟地域と譯しなかつた。

- 一 熱帶的高溫濕潤なる原始林氣候農耕帯
- イ 南アジア農耕地域 (米、コ、椰子、サゴ、茶、タバコ、肉荳蔻、丁子、肉桂、胡椒、グツタベルチ

ヤ、ヘヴィアゴム、ガムビア、ロータン、珈琲、キナ皮等の栽培)

ロ アフリカ農耕地域 (アフリカ油椰子、コーラヌス、カカオ等)

ハ アメリカ農耕地域 (バナナ、ブラジル胡桃、タバコ、砂糖、カカオ、バラタ、ヘヴィアゴム、カスチロアゴム等)

二 週期的に乾燥するサバナ氣候農耕帯

イ 南アジア農耕地域 (米、砂糖、油種、アンカバルメ、棉花、珈琲、茶、キナ皮等)

ロ 濠洲農耕地域 (前者と殆ど同様のもの栽培せらる)

ハ 濠洲、太平洋洲農耕地域 (殆ど農耕を見ず)

ニ アフリカ農耕地域 (蜀黍、黍、落花生、甘蔗、棉花、シサル大麻、珈琲等を栽培す)

ホ アメリカ農耕地域 (カルナウバ椰子、コパイヴァバルサム、マンガベイラ、マニホバゴム、棉花、珈琲等)

三 ステップ及び沙漠氣候農耕帯

イ 北アフリカ・アジア農耕地域 (小麦、大麦、阿片用ケシ、棉花、棗椰子、米、甘蔗、熱帶果物、乾葡萄の栽培、この地域に於ては牧畜が相當に行はれ、駱駝、綿羊、アンゴラ山羊、馬、肉尾羊、蠶等)

ロ 濠洲農耕地域 (主として白人が經營し、小麦、牧羊)

ハ 濠洲太平洋洲農耕地域 (グアノ)

ニ 南アフリカ農耕地域(植物栽培は殆どなく、白人が綿羊、山羊、牛、駝鳥等を飼育す)

ホ 北アメリカ農耕地域(白人は人工灌溉により大麥、小麥、米、甜菜、果物を栽培し、羊、牛、駱駝を飼育す)

ヘ 南アメリカ農耕地域(大麥、甘蔗、果物、棉花、人工灌溉による米、牧羊)

四 溫暖適順降雨氣候農耕地帯(この地帯は地表の中最も重要な經濟的意義を有する部分にして、人口稠密文化最高の地域は此に存在す)

イ 溫暖冬季乾燥氣候農耕地域(夏季多雨にして農耕をなすに最も適當す。支那型農耕地域とも稱せらる、この地域は頗る廣大なるが故に著しく異なる農耕地域を有す、この細分されたる特殊地域を假りに地區と稱す)

- (1) 東南アジア地區
- (2) 濠洲地區
- (3) アフリカ地區
- (4) 北アメリカ地區
- (5) 南アメリカ地區

ロ 溫暖夏季乾燥氣候農耕地域(冬季に雨多く、その典型的なる地域は地中海沿岸である。之も種々の異なる農耕地域を包含する)

- (1) 南歐、北アフリカ、前アジア地區
- (2) 南濠洲地區
- (3) 西南アフリカ地區
- (4) カリフォルニア地區
- (5) 中央チリ地區

ハ 濕潤適順氣候農耕地域(この地域に於ては季節の循行が適整にして年中適當なる降雨量を有し、農耕に最も好都合して文化の最も高度に發展せる地域である)

- (1) 西北歐地區
- (2) 東アジア地區
- (3) 濠洲ニュージーランド地區
- (4) 南亞海岸地區
- (5) 太西洋岸北米地區
- (6) 太平洋岸北米地區
- (7) チリ、西バタゴニア地區
- (8) 太西洋岸南米地區

五 北部亞寒帶(ボレアル)森林氣候農耕地帯(之は第四の地域に次ぐ重要なものであるが氣候的關係上、

その地域の廣大なる割合に、各部分の地域的特異性少く、従て地區の細分が少い)

(1) 歐洲アジア地區

(2) 北米地區

六 降雪氣候農耕地域(鯨、海豹等の捕獲又は漁業のために一定の期間他の地方より人間が來集するのみにて、その陸地もツンドラ地帯なるが故に、殆ど農耕は行はれない)

右に述べたるものは自然的要素によつて地域を劃定せんとする方法の代表的なものを示したるにすぎぬが、この外に種々の方法の存する事は言を俟たない。例へば降雨量のみによる事も出来るし、又ブラーシユの如く食糧の獲得と氣候との關係よりして、地中海型、アメリカ型、中歐型、北歐型、アジア型に區分する事も出来る。併し今日に於ては如何に國家的自給自足が經濟の原則とされ、従て食糧の確保、農業の重要性が經濟政策上の根本をなすとはいへ、有機的生産より無機的生産へ移行しつゝある事は何人も否定出来ない所であるから、農業と不可離の關係にある自然特に氣候のみよりして地域の劃定をなす事には尙ほ不充分なる點が少くない。氣候的關係による地域劃定は最も有效なものではあるが、併し之によつて凡べての經濟的特徴なり、又内容を明確に描き出す事は困難にして、更に他の方法をも併せ用ひざるを得ない。殊

に經濟地理學は經濟學固有の研究方法によるべきものにして、經濟外のもの如何にそれが重要な意義を有し、又關係に立つにしても、結局それは一の條件であり、且つ補助的手段として取り扱はるべきものであらう。

第三章 文化的地域劃定論

第一節 文化的地域劃定の意義

自然的關係特に氣候が人間の活動に影響を與ふる事につきましては何人も異論をさしはさみ得ない所であるが、併し人間が一定の自然的條件の下に於て創造せる文化は一の與へられたる條件として人間の活動を頗る強力に支配するものである事も明かである。地理學は自然が人間に對する影響のみを研究するものでなく、又實際に於て現代の文化人は多分に自然の強制より脱却して活動してゐるのであるから、寧ろ一定の自然的條件は與へられたものとして最早論議するの必要なく、それを當然の前提としその自然的條件の下に於て創造されたる文化的諸條件によつて地域の劃定をなすべく、氣候の如何、地形の状態の如き自然的條件は之を無視しても差支なく、否自然より離れて事物を考察する所に文化科學が成立するとの見解も成立しうる。只問題は、文化といへる抽象的なるものによつて地表を區分しうるかといふ事、並に文化は必しも

常に固定してゐるものではなく變化するから、劃定の標準としては正確でないといふ事である。併し文化は一定の方法によつてその特徴を抽出する事も出来るし、又その擔當者、表現形式等によつて具體的にその分布を確定しうる。更に文化は變化するとはいへ、一旦出來上つた文化は短時間に急變するものではなく、本質的に變化する事は殆どないといつてもよい。文化の擔當者たる民族が亡びた場合、ある一定地域の文化は根本的に變化するけれども、一定の期間をとつて見れば不變といふも過言ではない。例へば、白人が米國に移住して以來出來上つたヤンキー文化又は南米のラティン系文化、更には濠洲南阿の英人文化の如きは、その自然的事情は當該文化の發祥地と著しく異なるに拘はらず、その新文化は本質的には殆ど變化して居らぬ。我國は古くより支那文化を移入したが、併し乍ら本質的には依然として日本文化が存續してゐるし、更に日本支那印度等は古來密接の交渉を有し、東洋又は東亞の語を以て總稱され乍ら、その文化は各々獨自のものであつて、その變化は極めて微少である、故に何等かの方法によつて文化的要素による地域の劃定をなす事こそ文化科學の一たる人文地理學の任務であり、又經濟地理學は人文地理學の一分科なるが故に、その地域的個性の究明には文化的要素によつて地域の劃定をなすべしといふのである。勿論文化は自然的要素の如くその地表に於ける分布が明

確でなく、混淆的過渡的なるものが頗る多く、劃定の標準としては不便なる點も少くないが、屢々述べたるが如く、人間は自己の創造せる文化に束縛せらるゝ事は、今日では自然的條件以上であるとも考へられるのであり、凡べての地域、景觀は一の文化的表現と見るべきであるから、文化的地域劃定法は、或る意味に於ては自然的劃定法以上に重要なものといへる。

文化とは已に述べたるが如く、人類がその欲望充足のために普遍的妥當性ありと認識して創造したる價值的産物の總和にして、抽象的財である。それは住居、建築、土木、美術の如き具體的なる物に於て表現される事もあり、科學、技術、宗教、スポーツ、健康の如きものに於て表現せらるる事もあり、更には人間の社會的結合關係、給付關係に於て表現される事もある。併し文化を以て地域劃定の標準とする場合には右の如き個々の表現體による事は頗る困難なるが故に、文化の特徴、文化の擔當者たる民族、或は文化的生活の最高組織たる國家等によるを常とす。只文化的諸要素による地域劃定は比較的廣汎なる地域に於て行はれうるが、狭小なる地域に於ては明確になし難き缺點がある。例へば世界全體を文化的特徴によつて區劃する事は容易に出来るが、一國を細分する事は多くの困難を伴ふ。併し大觀的區劃としては極めて必要なる方法である。

第二節 文化の特徴による地域劃定法

從來文化の分類は、或は精神文化、物質文化といひ、或は經濟的文化、宗教的文化、科學的文化といふが如く、その内容の特徴によつたものがあり、或はその擔當者たる民族によりてギリシャ文化、エジプト文化、印度文化といったが、併し具體的實質の特徴によつたものは少い。最近民族と文化の問題が論議せらるゝに及び、文化の實質的内容又は特徴が種々の方面より研究せらるゝに至つたけれども、何れも極めて大觀的にしてその實體を把握する事は困難であるが、之は文化そのものの性質上已むを得ぬ所であらう。例へば風土と文化との關係よりしてモンスーンの文化、沙漠的文化、牧場的文化となし、その一般的特徴を考へるが如きはその一例である。又ウェーバー (Max Weber) の如く、耕作形態と文化との關係より文化の特質を區分するのも亦注目すべきものである。即ち古代に於ては地中海の沿岸のみが耕作され、之を基礎として地中海の商業的都市的文化が發達したが、それが次第に奥地に進入し、森林を開拓して耕地を獲得し、又森林と不可分の關係に立ち、所謂森林耕作に基く森林文化が生れた。而して

この森林文化は更に止揚されて今日の西洋文化、資本主義文化、都市文化に迄發展したが、併し之は結局森林耕作の表現たる森林文化である。之に反し所謂東洋(Orient)即ちエジプト、メソポタミヤ以東に於ては農耕は灌溉治水と不可分の關係にあり、宗教も、政治經濟も皆灌溉治水に志向してゐる。東洋の文化は灌溉治水の文化である。かくの如き見方は一應文化の本質を把握したものであるが、併しかゝる大綱的區分によつては地表を劃定する事は出來ないし、殊に一國民經濟の内部を區分する場合には殆ど用をなさない。併し一國內に於てもその文化の程度、性質は種々の關係よりして同一ではないから、今日迄の文化の特徴による分類が地域劃定上不便であるとして、一概に否定さるべきものではなく、之によつて各地域の文化的特質を理解するに役立つ事は言を俟たぬ。

第三節 文化の擔當者による地域劃定法

文化の創造者は人間であり、之を社會的共同財として保有し擔當し、且つ之を更に發展せしむるものが民族である。民族なき所に文化なく、文化なき所に民族はない。民族は實に文化の

表現である。民族は夫々独自の文化を有するが故に民族である。故に如何に小なる民族といへども独自の文化を有する。この點に於ても種族と民族とは區別されるのである。文化の擔當者としての民族は他の大民族に併呑されて一國家の中に包攝されてもその固有の文化を容易に失ふものではない。それは歐洲に存在する小民族が自ら獨立の一國をなす事が出來ず、屢々その所屬國家を異にしてゐるが、而かもその民族性、固有の文化を保有してゐる事實に徴するも明かである。又一の民族が集團をなして他の地方に移動したる場合には、たとひその民族の發祥地と自然的事情が全然異なるも、その固有の文化は本質的に變化せず、依然として之を保持し、發展せしめて、一定の文化地域を形成する。故に民族の分布はその固有の文化の分布と大體に於て一致する。勿論、一民族が他の地方に移動したる後、間もなく在來の文化に同化し、その文化的特徴を失ひたる場合もあり、又外來の文化に壓倒されて固有の文化の消滅したる場合もあるが、之は主として民族自身の衰滅によるか、或は數の多少の關係によるものにして、民族として存続し、又は數が壓倒的に少數ならざる限り、固有の文化は消滅するものではない。故に各民族の有する文化の特徴によつて地域を劃定する事が出来る。而して民族の有する文化は、言語、宗教、習慣、生活様式、體格、思想等を綜合して區別すべきものなるが故に、その標準

如何によつて、幾種にも區別する事が出来る。その代表的のものとしてザッパ（Karl Sapper）の説を次に示さう。

- | | | | |
|----|----------|---|--------------|
| 第一 | 歐洲文化圏 | 一 | 西歐、中央文化圏 |
| | | 二 | 南歐文化圏 |
| | | 三 | アンデロ・アメリカ文化圏 |
| | | 四 | ラテン・アメリカ文化圏 |
| | | 五 | 東歐文化圏 |
| 第二 | 東洋的文化圏 | | |
| 第三 | 印度的文化圏 | | |
| 第四 | 東亞的文化圏 | | |
| 第五 | 中央アジア文化圏 | | |
| 第六 | 黑人文化圏 | | |
| 第七 | マレー文化圏 | | |
| 第八 | 濠洲パプア文化圏 | | |
| 第九 | 寒帶的文化圏 | | |

右の各文化圏に於ては夫々独自の文化が普及し、之に適應して政治、經濟が行はれてゐる事は明かである。併し乍らかゝる大局的區分によつては、各國民經濟、各地域の政治經濟を研究

することは困難にして、更に之を細分するの必要がある。故にザッパも右の十區分を圏 (das Reich) と稱し廣義に解してゐる。故に狹義の民族によつてこの圏を更に地域 (das Gebiet) に區分して文化地域を定めねばならぬ。又民族の中には更に多くの種族が包含されてゐる場合があるが、種族は文化の擔當者ではないにしても、それも亦文化形態の形成に對しては密接なる關係を有するが故に、一民族又は一國家内の經濟地域を劃定する場合には注意すべき問題である。各地方に於ける風俗習慣の如き土俗學的要素は必しも自然的事情のみによつて生ずるのではなく、多分に種族的關係より來る場合が多いのである。殊に我國の如く無數の種族の結合によつて民族が形成されてゐる國に於ては、たとひそれが數千年の間に渾然融和されてゐるとはいへ、尙ほ隨所に種族的色彩が表はれてゐるから、嚴密に地域的個性を研究せんとするならば、この點を特に注意しなければならぬ。文化の擔當者、創造者は民族であり、而して今や經濟の主體は個人より更に民族となりつゝある。經濟の出發點は經濟人に非ずして、經濟民族の概念を以てせざるを得なくなつた。故に民族、種族による地域の劃定は經濟地域の劃定法として最も重要な役割を演ずるものといはねばならぬ。尙ほマウルが文化の程度によつて民族を分類的に表示したものがあから、文化擔當者たる民族の特徴を知るの參考に供しよう。

文化要素	民族				(1) 古文化民族	(2) 地中海文化民族	(3) 歐洲文化民族
	(一) 原始民族	(二) 自然民族	(三) 半文化民族	(四) 文化民族			
語彙	僅少	少	漸増	多大			極多
宗教	初期的	トイテミズム、惡魔崇拜、アニミズム	神話、傳説的	道德的内容の高き宗教	ユダヤ教、キリスト教、イスラム教	バラモン、佛教	近代的キリスト教
法律、道德	未發達	初期財産制、法律制度、奴隸制	父權制	成文法、道德的觀念の發達	成文法、道德的觀念の發達		同右、國際法、人道主義、世界道德
藝術	初期的	稍發達	發展	可なり豊富なる内容を有す	高き段階への發展の萌芽を有す		高度の發展
學問技術	無し	學問の基礎たる經驗的蒐集、初期的技術	發展	初期的より高度の發展段階迄	學問の初期、技術の發展		學問の完成、技術の發達
國家社會組織	家族、小集團	氏族制度	氏族國家、時に大帝國の成立	權力階級の分化	專制君主政治、官僚主義、社會組織の確立、階級の形成、中央集權		帝國主義、國民主義、國際主義、社會主義

マウルの分類は歐洲白人の文化を中心とし之を最高なりとする獨斷の下に行はれたるものにして、その特徴として示すものは必しも正鵠を得たるものとはいへない。例へば法律道德の項に於て、果して歐洲白人が斯の如き優秀なるものなりや否や、多大の疑問なきを得ない。又我國の如きは何れに屬すべきか、更に東アジア文化民族の宗教を單に儒教とするが如きは眞實を知らざるものにして、道教佛教が寧ろ特徴ではあるまいか。殊に最近に至りては世界の秩序が急激に變化しつつあるが故に、他の新なる要素を考慮しなければ現實を理解する事は出来ぬ。最後にこの圖表の缺陷は經濟組織及び經濟上の指導精神を示さなかつたのである。之が取り入れられたならば、地域劃定の一方法として大に參考となるであらう。

第四節 國家領域による地域劃定法

從來の國家は必しも一民族によつて組織されずして、多くの民族を包攝した。併しそれは最も強力なる文化擔當者たる民族がその文化の發展保持の必要上小民族を併呑したのであつて、一の國家はその主要民族の文化を表現するものである。如何に大なる民族と雖も眞の國家を形

成するに非ずんば文化の保持發展は困難にして文化は衰退する。例へば支那人は大なる民族であるが、國家が完成されず、從て單なる種族的集團にすぎないから、文化は殆ど發展する事なく、數百年の間停止の状態又は退歩の状態に在る。現代に於ては國家が最高の完全社會であり、人間は國家生活を通じて自己を完成する事が出來、從て又文化は國家を通じて創造され表現される。故に國家領域によつて地表を區分する方法は古來一般に地理學の用ひたる所である。如何に世界經濟が發展し、ブロック經濟が確立されても、國家を超越したるものが出來上るとは考へられない。否、世界經濟の發展、ブロック經濟の確立は、各國家が独自の經濟的發展をなし、その個性を發揮する時に初めて、その運營を全くする事が出來るのである。而して國家領域は一定の地理的形態と大きさを必要とするのであつて、單に民族の地理的分布といへるが如き事柄によつて決定されない事情となりつゝある。蓋し國家が一定の目的を達成し、文化を向上發展せしめんがためには、その目的に適合するが如き條件を必要とし、且つ國家領域たる以上は、國家の主權が遍く支配力を有する事を前提とするからである。又民族自決主義の空想的主張の下に形成されたる一民族一國家の原則が、事實上存立し得なかつたのは、國家の存立、その目的の達成に對して、國家の地理的形態、大きさが全く均衡を失し、何等の力を有しなかつたからである。從てアウタルキー、計畫經濟を必要とし乍ら、而かも之をなし得ず、却て一民族一國家の原則より偏倚してブロック經濟へ轉化するの結果となつた。國家領域は世界を地理的に區分する標準として最も現實的具體的であるが、併し國家の本質が最近に至りて急激に變化し、從來の如き國家學の見地よりしては到底充分に説明出來ない状態になつたから、今後は經濟地域としての國家領域につきは全く新しき研究を必要とする。地政學的考察は益々重要性を加へるであらう。

第五節 政治形態による地域劃定法

國家は政治によつて統制される。如何に廣大なる土地があり、多數の人民があつても政治なき所に國家はあり得ない。而して一定の國家領域に於ける經濟はその政治によつて影響され、條件づけられる。政治が如何に強力にして經濟を支配するとはいへ、政治と經濟とは本質的に異なる筈である。經濟を動かす力、條件としての政治體制によつて地域を劃定する事は今日の状態に於ては最も必要な事である。從來とても貴族政治、民衆政治、獨裁政治、議會政治等によ

つて經濟活動が動かされ、夫々に適應する形態があつたが、併し何れの政治にするも、一般には資本主義經濟を基調としたのである。然るに今日に於ては政治の根本原理が變化し、資本主義否定の政治が現はれ、資本主義を基礎とする舊政治形態と反對の新原理が主張せらるゝに至り、政治形態の地域的分布は急激に變化しつゝある。而してこの新政治體制は經濟體制を根本的に變革するの勢に在り、從て各國の存立も亦之によつて變革されざるを得ない状態に在る。併し乍ら政治形態は多分に民族性と密接の關係を有するが故に、世界の凡べての民族、國家が同様な新體制をとるとは考へられず、夫々の特殊性を有する事は明かなる事實である。例へば同じ獨裁政治にしても、獨逸、伊太利、露國、支那等は何れも特殊性を有し、從てその下に於ける經濟體制も著しく異つてゐる。併し乍ら政治體制と經濟體制とが今や表裏の關係に在るが故に、政治形態による地域の劃定は經濟地理學の研究に對して最も有力なるものとなるべきは論を俟たない。世界の經濟地圖は之によつて描き直はされる時が來るであらう。

第六節 宗教による地域劃定法

人間の生活は合理主義と非合理主義の闘争であり、その止揚への努力であるといはれる。勿論、この合理主義、非合理主義といふは價值的、道徳的に善惡の評定によるものではなく、人間の目的遂行、達成に於て論理性を有するか否かによつて論ぜらるゝにすぎぬ。而して合理主義は計算可能性によつて達成せらるゝ經濟に於て最も顯著に現はれて居り、非合理主義は宗教によつて代表せられる。故に經濟と宗教とは全く對蹠的關係に在る。歴史的事實に徴するも、時代を下るにつれて宗教の社會的支配力が減退し、之と反對に經濟的支配力が強大となつてゐる。之を地理學的に見れば宗教の支配力の強き地方は、經濟的支配力の微弱なる地方といふ事が出来る。若し一見して宗教も盛んであり經濟も盛大であるかの如き地方ありとすれば、それは眞の宗教にも非ず、又眞の合理主義的經濟が行はれてゐないのである。眞の宗教と眞の經濟とは同時的たり得ないであらう。宗教には種々多様の宗派があり、その教義が異り、又經濟の發達程度も異なるから、右の如き問題が起りうるにすぎぬ。又かゝる事情にあるが故に宗教の地域的分布によつて地域の劃定が不可能なのである。經濟と對蹠的關係にある宗教によつて地域を劃定する事は矛盾の如くであるが、宗教の分布状態如何は總て各地方の經濟發達の状態又は特徴、方向を決定するに最も重大なる影響を與ふるものである。クリスト教、回教、佛教、道

教といふが如く大別して、その地域的分布と經濟活動とを見るも如何に兩者が密接の關係の存するか明かであり、更に一國內につきて見るも宗派の分裂多き國に於ては、その宗派の地域的分布が經濟事情に大なる影響を與へてゐる事が認められる。宗教の地域的分布による經濟地域の劃定は經濟地理學と餘りに縁遠き觀があるが、併し各經濟地域の特殊性を理解する上に於ては、宗教による地域の區分も亦大に參考とすべきである。殊に我國の如く世界中の殆どすべての宗教が行はれ、而かも無數の宗派に分裂し、國民が熱烈眞面目なる宗教心を有する國に於ては、宗教に注意して經濟を観察するの必要があり、又日本の經濟の特質もかゝる精神的特質の上に立つてゐるものであるから、經濟地理學の研究には宗教の地域的分布を無視する事は出來ない。

第四章 經濟的地域劃定論

第一節 經濟的地域劃定の意義

如何なる人間活動と雖も自然的條件並に文化的條件によつて制約されざるものはない。殊に經濟は人間の物質的欲望充足に關する秩序並に組織なるが故に、最も自然的條件に依て支配されると共に、更にその秩序、組織は一般文化の反映である。故に自然的要素並に文化的要素によつて地域を劃定し、以て各地域の經濟的個性を研究する事は、最も一般的妥當性を有するかの如くに見ゆる。併し乍ら經濟が自然的條件、文化的條件によつて影響せらるゝ事が甚だ大であるの故を以て、かゝる經濟外の要素によりて研究上に最も必要なる手段であり目的である所の地域を劃定するならば、茲に經濟地理學は自ら自己疎外とならざるを得ぬ。經濟は今日の人間活動中に於て最も重要な役割を有するものである。經濟は與へられたる自然的、文化的條件の上に於て人間が創造したる組織的秩序である。政治によつて經濟組織が動かされつゝある

事も現實であるが、その故に經濟なる概念がなくなるのではない。政治も亦一の條件にすぎない。その條件に於て經濟は新なる形態を以て組織されるが、それは依然として經濟的秩序である。故に影響又は條件として如何に大なる關係を有するとも、經濟なる文化が、自然や文化と獨立して嚴然と存在する事は決して觀念的假定ではない。故に個々の地域の經濟的個性の形成過程を研究する場合に於ては、經濟外の事實に徴して種々の説明を加へ理解を深める必要はあるが、研究の前提であり又窮極點である地域の劃定に方りては、純經濟的立場より之をなすべきであつて、自然的地域劃定法及び文化的地域劃定法は、更にその豫件とするか、參考的補助的地位を與ふべきものである。かくする事によつて經濟地理學が自然科学的性質を脱却し、文化科學の一としての經濟科學たるの獨立性を確保しうるのである。

併し乍ら自然的並に文化的地域劃定法が無限に存する諸要素の何れを以て劃定の標準とするかにつきて多くの困難に遭遇すると同じく、人間の經濟活動も亦無限に種々の形態を以て現はるるが故に、その取捨選擇は容易の業ではない。如何に地方的特質を現はすものでも、それが全體的に重要な意義を有せざるものは劃定の標準要素とするに足らず。又如何なる地方にも遍在するものならば、それが重要なものでもそれは必しも區域の標準となし得ないであらう。

故に比較的に一般的普遍的分布をなすものにして而かも重要性を有し、地域的個性の形成に大なる役割を演ずるが如きものを選択しなければならぬ。之は經濟史に於ける經濟發達階段を劃期する場合に種々の標準が用ひられて居るが、何れも一般的にして而かも時代的に變化せるものによつてゐると照應するものである。即ち經濟地理學に於ては、廣く遍く地表に分布し、而かも地方的に顯著なる差異を有するものを用ふるを最も適當とする。最初にも述べたるが如く、地域の劃定は地域を相互に比較し、その個性の究明によつて經濟的文化が一定の空間的分布を形成するの必然性を明かにするの前提として先づ劃定されるのであるから、最初より多くの要素を綜合して地域の劃定をなすが如きは必しも適當の方法といふ事は出來ない。而して之には地表全體に互りて地域を劃定する場合と、一國又は一地方につきて地域を劃定する場合とによりて、その採用すべき經濟的要素は異ならざるを得ぬ。故に經濟的地域劃定法に於ては廣狭二つの場合に大別して説明すべきであり、又その標準は無數にして、從て無數の劃定法が存在するわけであるが、本書に於ては、一括してその代表的なるもののみを例示するに止めた。實際の場合につきて地域を劃定せんとすれば、最も適當とするものを組み合せて、所定の目的に適應せしむるの外はない。

第二節 經濟發達階段による地域劃定法

經濟の發達變遷に一定の階段的類型の存する事が唱へらるゝに至つたのは、經濟史研究の著しく發達した最近の事に屬するけれども、枚舉に遑なき程に多數の學說がある。階段説は全く時間的過程のみにつきて説明され、その地域的分布は少しも省みられなかつた。然るに現代の地表に生存する人間の經濟状態を見るに、その發達階段は決して同一ではなく、極めて高度の發達をなせるものあれば、全く野蠻草昧の域に停滞せるものもあつて、恰も歴史的發達階段といへる垂直線を倒して水平になしたるが如き觀がある。即ち各地域は各階段を表現し、夫々特異の經濟地域を形成してゐる。而して經濟發達階段説は無數に存在するが故に、之を一々水平化して見れば無數の發達階段による地域が劃定されるわけである。併し時間的發展に主眼點をおきて劃期されたる發達階段説は必しもそのまゝ水平化して地域的劃定の標準とする事の出来るもののみではないから、之に加工する必要がある事はいふ迄もない。殊に著名なる階段説はその劃期が極めて簡單なるが故に、地域劃定に應用する事は困難である。

發達階段説を地域劃定に應用したる最初のものにはフリードリッヒ (E. Friedrich) であらう。その所説は次に示すが如く、經濟階段を多分に心理化して劃期したるが故に經濟學的には尠からず不明確な點がある。反射經濟、本能經濟の如きは嚴密なる意味に於ては經濟の概念中に入るべきものではなく、又その具體的に示したる地域の經濟は本能經濟、反射經濟といふべきか否かも問題である。併し經濟發達階段の地域的分布によりて地域を劃定する事は、最も綜合的統一的であつて、この方法を完成するならば、地域劃定法としては一般的理論的にして而かも個々の地域を理解する上に頗る適當なるものといふ事が出来る。

第一 反射經濟的階段の地域(動物的經濟又は採集經濟の階段)

この時代に於ては知識の經驗蓄積が殆どなく、行爲の指導をなすものは反射作用にすぎぬ。道具の發明利用も主として反射作用によつて行はれ、肉體的適應に依つて生活を確保する時代である。この階段に屬する地域の代表的なるものは、ブッシュマン人の居住地域である。本來の濠洲、タスマニヤ、ミスコビー人のアンダマン、ヴェーダ人のセイロン、アエタ人のフィリッピン、クブ人のスマトラ、セレベス、ニューギニヤ、サハラ、シリヤ荒地、中部南部アフリ

カ、南米のフォイエールランド、ポトグーデン、エスキモー人居住地、北アジアの寒帯もこの階段に屬す。

第二 本能經濟的階段の地域

本能によつて體外的道具の創造に必要な經驗を蓄積し、多少自然の強制より脱却して欲望を充足しうるに至る。即ち植物採集より植物栽培に移り、狩獵より馴養に推移す。併し體驗の具體的表現たる道具はその所有者の肉體と同一視せられ、所有者の死と共に埋没せらるゝが故に、道具の蓄積を増加する事が少く、従て生産力の蓄積も少い。この階段に屬する地方は、アメリカ印甸人の居住地、印度の山地、スダン地方である。

第三 傳統經濟的階段の地域

支那人はこの階段の代表的民族とせらる。舊大陸の草原地帯、印度、昔時の日本をこれに屬せしめて居る。この外、西洋人以外の稍々高度の民族の居住する地域を全部これに屬せしむるものの如くである。

第四 科學經濟的階段の地域

これに屬するものは、歐洲の大部分、その外、米國、濠洲、アフリカに於ける歐洲人の植民地、日本人居住地を掲げて居る。

第三節 經濟形態による地域劃定法

人間は社會を構成し、相互に效用給付をなして統一的經濟體が形成されてゐる。即ち一定の人、一定の地域はそれぞれその最も得意とする有利なる經濟活動をなし、その効果を社會全體に給付し、以て自己の生活を豊富ならしめんとす。茲に經濟形態の分化と綜合とによる發達がある。野蠻未開の時代には各種の經濟形態なるものは分化してゐない。而して經濟形態とは人間の經濟活動、主として生産形態又は方向によつて區別されたものであつて、消費形態は之を除外するのを常とする。従て經濟形態とは生産上の分業又は種類を意味し、野生植物性食糧の採集、狩獵、漁撈の如き採集經濟、農業、牧畜、鑛業、進歩せる漁業、工業、商業、運輸業の

如きは經濟形態による類別である。社會の進歩に伴ひ經濟形態の分化は人的にも地方的にも細分され、相互に交換して地域統一をなすのであるが、極めて小地域の場合を除き、一國一地方が單一なる經濟形態を有する事は稀れであつて、多數の經濟形態が并存するを常とす。殊に最近に至りてはアウタルキー經濟が世界各國の一般原則となりて以來、已むを得ざるものの外、殆ど自國內に於て經營するに至り、恰も封建時代の各藩領の如き觀を呈しつゝある。併しこの事は反對に國內に於ては各地方が特殊なる經濟形態の單一化を促進するの傾向が著しい。

經濟形態による地域劃定に於ては農業地域、工業地域といふが如く區劃されるが、併しこの場合に農業地域に於ては農業のみが、工業地域に於ては工業のみが存在するといふのではない事は言を俟たず、他の經濟形態も并存するが、農業、工業が支配的特徴をなすが故に、かく區劃しうるにすぎぬ。又一個の經濟形態をとりて地域を劃定する事も屢々行はるゝ所にして、例へば工業のみによつて各地域の經濟的特異性を示し、重工業地域、化學工業地域、纖維工業地域とし、更にそれを細分して經營規模の大小によつて地域を劃定する事が出来る。例へば日本全國につきて見れば工業は特化集中して一定の分布地域を形成し、又その集中せる地方につきて見るに、集中地點たる都市の中心に於ては小工業の数が相對的にも絶對的にも大であるが、

都心を距るに從て中工業、大工業の割合が多くなり、そこに自ら小工業地域、大工業地域を形成してゐる。この事は農業の如く廣き範圍に互つて經營されるものに於ては最も顯著に行はれる。かのチューネンの孤立國に於ける農業の經營形態の地域的分布、ラウル (Fried Laur) の農業經營の地域的分布論の如きは、農業が如何なる經營形態を以て地域的分布をなすかを研究したものである。かのバック (Rossing Buck) の大著たる支那の農業地域の劃定の如きも農業による經濟地域劃定の典型的なものである。

經濟形態特に生産形態を中心とする地域の劃定は、他の如何なる方法よりも數量的に計算可能性が大なる爲め、最も明確に表示しうるの特長を有す。故に今日では地域又は地帯の劃定は殆どこの方法が用ひられた。只この方法の缺陷は、經濟は生産のみが經濟ではなく、その消費、配給、流通を一體として見て初めて經濟の一般性が理解されるのであり、殊に今日では遠隔地より原料、動力、食糧を移入し來り、又労働者の移動力も頗る大であるから、生産のみを以て一定地域の經濟的特性を論斷することは出来ないといふ點である。故に生産形態による地域劃定に際しては之等の諸點をも常に考慮するの必要がある。併し今日の研究の發達程度及び研究材料によつては經濟形態による地域劃定を主とするの外はないであらう。

第四節 食糧獲得及び消費による地域劃定法

人間の生活上第一義的に必要なるものは食糧であるが、而かもその生産獲得の方法、消費の方法は民族、種族により、又地方によつて著しく異なる。食物の大部分は有機的生産によるものであつて、如何に人知が發達するも農業にその大部分を俟たなければならぬ。故に食物の獲得及び消費は自然的事情に影響される所甚だ大であるから、之による地域の劃定は自然的劃定法に屬せしむべきか、或は經濟形態による劃定法に屬せしむべきであらう。かのブラーシユは地的環境と食糧との關係よりして經濟地域の類型を劃定せんとし、我國の人文地理學者にも之に基いて地域劃定を試みた人もある。例へば佐々木彦一郎氏の如きはそれである。併し之は自然に重きをおいたものであるから、第二章に於て簡単に述べておいた。同じく食糧の獲得消費による地域劃定法として江澤讓爾氏の唱ふる所は、その根本思想はブラーシユ等に發するものと思はれるが、自然的條件を與へられたるものとし、自然より離脱して食糧と經濟活動との關係より地域を類型化せんとする所に、その特異性がある。即ち氏は經濟地理學を地域類型學立地

學となし、經濟地理學の自然よりの解放を主張しつゝ、經濟の地域的類型として、(一) 小麥型、(二) 玉蜀黍型、(三) 米型の三となし、小麥型は動力中心型にして歐洲の經濟は之に屬し、玉蜀黍型は原料中心型にしてアメリカの經濟は之に屬し、米型は勞働中心型にしてアジアの經濟は之に屬するといふのである。この地域的類型化は頗る巧妙に說かれて居るが、餘りに大觀的にして小地域を見るには不便な點がある。歐洲は凡べて小麥型とするも、アジア、アメリカは必しも凡べて米型、玉蜀黍型に限られてゐるのではないから、大體の傾向を示すものとしては大なる示唆を與ふるけれども、一國內の地域的類型化をなさんとするにはこのまゝでは不適當である。併し一國內に於ては、歐洲の小國は別とし、他の諸國は各地域によつて食糧の獲得、消費の形態が著しく異つてゐるから、之によつて地域を劃定する事は必しも不可能ではなく、又經濟地理學研究上にも參考となる所が少くないであらう。

第五節 經濟的指導精神又は經濟組織による地域劃定法

經濟活動又は經濟組織は一定の經濟的指導精神によつて統制され指導される。之は先に述べ

たる經濟發達階段による地域劃定に適應するものにして、現代の地表に於ては種種の指導精神による經濟活動、經濟組織が存在する。純然たる血縁的共同體もあれば、村落共產體もあり、或はインドのカストの如きデミウルギーによる經濟社會もあり、或は支那の如き半封建的經濟も存し、更には高度の資本主義經濟、或は社會主義經濟、或は民族的全體主義經濟等は夫々異なる經濟的指導原理によつて指導されてゐる。それは經濟組織、活動を規定するものであつて、特異の經濟地域をなせる事は言ふ迄もない。又かゝる異なる指導原理による國家又は地域が相對立せるが故に、或は暴力による兼併が行はれ、植民地の獲得戰となり、更に排他的アウタルキー經濟が行はれ、資本主義的自由貿易による世界經濟が閉塞したのである。而してこの關係は容易に終末するとは思はれず、指導原理の差異に基く經濟組織の特異性は益々顯著となる事はあつても減少するの可能性は少いであらう。故に世界全體に互りて地域劃定をなさんとすれば、之によるを以て最も根本的の一般的と考へられる。併し乍ら一國內又は一地方につきて經濟地理的研究をなさんとする場合にはこの方法には不便が少くない。今日に於ては一國民經濟は全く有機的統一體を成し、その根本的指導原理は如何なる部分に於ても一貫せるものであつて、僅に例外として異なる經濟精神による組織が局部的小地域に存在するにすぎない。從てかゝ

る例外的原理を以てしては地域劃定をなすも何等の意義を有しない。例へば最近迄の我國は原則として資本主義、自由主義經濟を一般的指導原理とし、凡ゆる經濟活動も、組織も之によつて指導されてゐた。固より經濟形態により地方によりて多少の差異はあつたし、又部分的には他の地方と全く隔絶せし爲め或は莊園經濟が残存したり、或は原始共產制が行はれた所もあるが、之は日本全體の經濟に對しては殆ど重要性を有せず、從てかゝる特殊性を以て地域劃定の標準とする事は出来ぬ。併し各地域を仔細に觀察する時は、地方的に經濟的心意は著しく異つてゐる。宗教の盛んなる地方の人々は求利心薄く、寡欲知足の精神を有し、利害打算を事とせざる場合がある、かゝる地方に於ては眞の資本主義的經濟が地方の一般性とはなり得ない事もある。一地方に於て特に産業が發達し、貧富の懸隔の大なるが如きは必しもその地方の自然的歴史的事情のみによるのではなく、その獨特の經濟的心意、經濟的精神による場合が少くない。只之等の要素は具體的に論證する事の困難なるが故に從來地域劃定に用ひられなかつたにすぎぬのであつて、若し研究方法の發達によつて之がなしうるならば有力なる地域劃定法たるを失はないであらう。否、眞の經濟地域を劃定し、以て國民經濟の地域的編制の合理化を計らんとすれば、當に之によるべきである。

第六節 人口及び聚落による地域劃定法

人口關係は經濟現象なりや、或は經濟の與件なりやにつきては經濟學上議論の存する所であるが、本書に於ては之を經濟現象として取り扱ふ事とした。蓋し人口關係は一の自然的生理的現象ではあるが、併し人間の經濟が意欲を達成するために、意識的に人口を調節統制して經濟活動に即應せしむることは、恰も不足せる原料を遠隔地より輸入し、或は生産物を輸出すると本質的に異ならず。一定の社會組織と必然的關係の下に人口關係は生ずるのである。故に人口關係は廣義の經濟的秩序に包攝さるべきものであつて、單に經濟活動の與件又は反射的結果と見る事は出来ないであらう。即ち人口の數量的關係たる密度、自然的社會的増減、年齢別組み合わせ、職業別組み合わせ、性別組み合わせの如きは一の經濟現象と見る事が出来、而かも經濟的勢力關係を最も強力に表現するものである。従て人口關係による地域の劃定は管に人口を量的にその特質を表示しうるのみならず、之に依てその經濟的諸關係を特徴づける事が出来る。蓋し人口の増減、性別並びに年齢別組み合わせせも經濟形態と密接の關係があり、殊に人口の密度は

全く經濟形態と一致して居るからである。古來文化の盛衰は一國一民族の人口の消長と殆ど函數的關係を有し、例へば我國の徳川時代の如きも、文化が興隆し經濟生活の豊かなりし時は人口は著しく増加したが、一旦その減少の傾向を辿るや、社會は没落崩壊に赴いた。この關係は一國內を地方的に見るも、各地域の有する文化度、經濟力は大體に於て人口關係と一致してゐる。ルヴッシュヌール(E. Levasseur)の研究によれば、狩獵漁撈の行はるる地域に於ては一平方糎の人口一人に達せず、遊牧地方は四人、小資本による農業地方は二十五人乃至五十人、大資本による商工業地方は一平方糎の人口數百人に達すといふ。更にラツチェルの研究は極めて詳細なる結果を示してゐる。勿論その數字は已に古きに失し現在の事實を知るには不適當であるが、人口の密度と經濟形態及び經濟地域とが一定の關係を有する事が視はれる。

(一平方糎の人口密度)

- 一 人類居住地域の最極端に於ける狩獵、漁撈民族 〇・〇〇二——〇・〇〇五
- 二 ステップ地域の狩獵民 〇・〇〇二——〇・〇〇九
- 三 幼稚なる農業を伴ふ狩獵民 〇・二——〇・七
- 四 沿海及び河川漁撈民 一・八
- 五 遊牧民 〇・七——一・八

第三編 經濟地域劃定論

六 初期の工業、交通を伴へる幼稚農民	一八〇
七 遊牧を兼ねる農民	一八〇
八 西アジア、スーダンに於ける回教徒	一八〇
九 農耕を営む漁民	一八〇
一〇 歐洲的農業を営む未開國、氣候最惡の歐洲諸國	一八〇
一一 中歐の純農業地域	一八〇
一二 南歐の純農業地域	一八〇
一三 農工業混營地域	一八〇
一四 印度の純農業地域	一八〇
一五 歐洲の大工業地域	一八〇

更にマウルは比較的最近の統計により世界各地に於ける經濟形態と人口密度との關係よりして次の十一地域を劃定した。各地域内の代表的地域の人口密度を列挙してゐるが、煩をさけて之を省略した。ラッチェル、マウルの地域劃定は大體の傾向を示すものとしては何人も異存のない所であるが、併し我國の如く人口の稠密度が高く小地域に密集せる場合には、必しも人口密度のみによつて農業地域と工業地域といふが如くに單純に區別する事は出來ない。

一 未開發の溫帶熱帶の森林地域及びツンドラ地域	(人口密度〇・七人——〇・〇〇三人)
二 未開發の森林及びサバナ地域	(〇・八人——〇・二七人)
三 未開發の沙漠及びステップ地域	(二・八人——〇・二七人)
四 近代的開發行はれたる森林地域	(一・七人——一・〇人)
五 稍開發されつゝある森林地及びサバナ地域	(三・八人——一・七人)
六 稍開發されつゝあるステップ地域	(三・六人——三・五人)
七 古來開發されたる溫帶森林地、森林サバナ混合地域	(三・〇人——八・一人)
八 農業地域	(八六人——二五人)
九 亞熱帶農業地域	(四九人——三五人)
一〇 工業化しつゝある農業地域	(二五七人——一二五人)
一一 純工業地域	(四〇三人——二五一人)

この外、人口は氣候、地形、標高、宗教、社會狀態等と密接の關係を有するが故に、之等のものを綜合して人口關係により地域の劃定をなす事は常に廣範圍に互る地理學的研究のみならず、小地域につきても最も正確なる基礎を與へ、地域的個性を明かにするに頗る適當なる方法である。

人口とは特定地域に生活する人間を種々の方面より觀察したる數量的關係であるが、この人口は同一なる密度に於て分布せざるのみならず、必ず特殊の居住の様式を有するものである。この居住の様式が即ち聚落 (Siedlung) である。聚落の形態、その分布状態の由て來る所以の研究は聚落地理學の任務とする所である。聚落地理學の研究結果によれば聚落は無數の形態を有し、その形成に對しては自然的社會的歴史的人種的等の諸關係が大なる影響を與ふるものあり、從てその地理的分布には一定の法則の存する事が視はれる。而して聚落形態は更に經濟形態と密接の關係を有し、人間が一定の經濟活動をなすには、自然的社會的事情と結びつき、その目的達成のため最も適當有利なる聚落形態を必要とする。故に聚落形態は一定の經濟關係を表現するものといふ事が出来る。人口數に於て略ぼ同様の大都市につきて見るも、その主たる産業によつて形態、内容が著しく異り、又村落に於ても同様である。廣範圍に互る地域劃定法としては聚落は種々の缺點があるが、一國又は一地方につきて地域を劃定する場合には、人口以上に具體的に表示しうるが故に、聚落形態の分布による地域劃定は單に聚落地理學のみの問題ではなく、經濟地理學の研究に於ても注目すべきものである。固より聚落形態は自然的事情によつて影響せらるゝが故に、その生成發展を考ふる場合には、自然的社會的關係を研究し

なければならぬ。殊に人種の差異は聚落の形成に對して著しき影響を與ふるものであつて、かのマイチェン (E. A. Meitzen 1822—1910) は不朽の名著「聚落形態と農業制度」(Siedlung und Agrarwesen der Westgermanen und Ostgermanen, der Kelten, Römer, Finnen und Slaven 1896) に於て、この問題を克明に論證して居る。この方法による時は種々の人種の混淆せる我國や五族協和の滿洲國等に於ける聚落と農業或は經濟一般との關係を明かにする事が出來、學術上のみならず施策上にも貢獻する所大である。要するに、聚落は諸種の事情によつて變化推移するけれども、一定の時、一定の所に於ては固定してゐるものであるから、之を與へられたる條件として經濟地域の劃定の基準とする事が出來よう。